

NO. 62

21  
15

THE SOUTH SEA  
OF  
JAPAN

日本之南洋

No. 9010



日本之南洋

服部微編  
渡邊義方補

南洋堂藏版

完

South Seas

4-15  
THIS SOUTHERN GROUP OF ISLANDS  
HAS BEEN EXPLORED & TAKEN  
POSSESSION OF BY COMMANDER  
JOHN KELLY & OFFICERS OF THE  
U.S. SHIP PLYMOUTH UNDER ORDERS  
FROM COMMODORE M.C. PERRY  
ON BEHALF OF THE U.S. OF N.A.  
THIS 30 DAY OF OCTOBER 1853

英國水師提督彼理別將ケルリ遺之所，銅版地圖

序。

大凡物体内の力を抵抗の最も些少ある箇所を求めて漸次移動せよと云ふは物理学の大原則なり。然れは人界の出来事も亦之れと同一理よりして、抵抗の最も些少なる箇所に向ひて漸次お集合するの、自然の勢あり。茲は南洋諸島の近世紀の間は發見したるものにして、其住民は概ね魯鈍に、其氣風も亦脆弱あるを以て、歐米各國の殖民政略の殆ど之れは輻湊し、今や通商貿易の中心市場たらんとす。我日本太平洋中は離群獨居し、地脈蜿蜒として南方に走り、其間幾多嶋嶼の聳起せるもの尠とせき。焉くんぞ知らん、這般の島嶼も、亦他の歐米南洋殖民政略の影響を

蒙るおからんことを。況んや小笠原群島の如き天候和煦  
土壤肥沃、擬起すべきの事業も亦頻繁にして、加ふるよ大  
艦隊の碇泊し供はべきの良港灣の在るをや。吁嗟日本之  
南洋も亦前途愈々多故からん。善哉、服部君の此著あるや  
君と高知の人、曾て明治號に搭じ近南洋の間を巡航せし  
ものあり。故し書中の紀事の如きを悉く之れ實往實記に  
して其確當なる固より予が言を踈るざるなり。乃ち此書  
に就き見る所を直記して、敢て以て之れが序に代ふと云  
爾。

明治二十一年一月

知川漁長志賀重昂識。

### 自序

予本年十一月一日便ヲ得テ明治丸ニ搭シ三宅、島島及小笠原島ヲ  
經火山群島ニ渡航シ、跋渉數日全十七日横濱港ニ歸着シタリ。到處各島  
ニ上陸シテ親シク其地ノ景況ヲ探リ物産ヲ蒐集シ聊カ得ル所ノモノ  
アリ歸京ノ後其調査スル所ノ筆記ト其採集スル所ノ物産トニ基ツキ  
殊ニ將來我南洋ノ經濟ニ關シテ緊要ナル事項ヲ論究シ終ニ繼續シテ  
一書ヲナス題シテ日本之南洋ト名ク元來匆匆ノ際之レカ編纂ニ着手  
シ加ルニ其刊行ヲ急キ僅々十數日ニシテ脱稿セシカ故ニ固ヨリ粗漏  
杜撰ノ實ナキヲ免レヌト雖モ幸ニシテ予同行ナリシ知友文京渡邊君  
カ校補アリテ漸ク世ニ公ニスルヲ得タリ  
伊豆諸島及小笠原島ハ我皇州ノ南門ニシテ殊ニ小笠原島ハ地熱帯ニ  
近シ地形風物自ラ内地ト異ニシテ別乾坤ナリ草木稠茂鱗介群棲シテ

海陸ノ物産乏レカラス殊ニ良港灣ノアルアリ物産的ニ軍備的ニ實ニ  
主要ノ良島ト稱スヘシ既ニ主要ノ良島タリ何ツ其事ヲ明ニセサルナ  
得ン況ンヤ近來歐米列國ニ拓地殖民政略ノ盛ナル其勢恰モ傳染病ノ  
流行スルカ如キ傾アルニ於テヤ幾ニ予辱知志賀重昂君カ南洋時事ヲ著  
スニ方リ其緒ニ書レテ曰ク輓近南洋ノ事務ハ日ニ月ニ警ヲ告ケ益々多  
故ニラントス而レテ其勢ヲ促スモノハ獨逸ナリ佛蘭西ナリ英吉利ナ  
リ我日本太平洋中ニ離群獨居シテ陽ニ南洋ノ諸島ヲ控ヘ又近ク漳州  
ニ面ス焉ン知ラシ南洋ノ鯨鯨ハ所在ヲ震盪シ其餘波ハ疾ク馳セ來  
リク富士山麓ニ憂慮センコト云々ノ記アリ果シテ然ルハ我近南洋  
モ亦將キニ多故ノ日アラントス畏懼タル一孤島ヲ以テ目レ敢テ本土ノ  
安危ニ感セサルカ如キ妄想ヲ抱テ後日ニ噬臍ノ悔アル莫レヨ嗚呼日本  
之南洋モ多事ナリ宜哉今ヤ其警備ノ議ハ開物ノ事ト共ニ急ヲ告グ世

上ノ輿論將サニ大ニ此ニ傾向スルアラントハ本書若レ幸ニシテ其警  
鐘トナリ其細針盤タルヲ失ハスノハ幸甚々々

明治廿年十二月十日宮城縣深ク品海波高キ夕京城寓舎ニ於テ

南 溟 漁 長 徹 誌

## 日本之南洋

### 凡例

- 一本書ハ伊豆諸島、島島、小笠原島及火山群島ニ關スル紀事ニシテ殊ニ諸島將來ノ經濟ニ關係アル事項ヲ説明スルヲ主眼トスルモノナリ
- 一編者タル予輩ハ勸業主義ヲトシモ、ナレハ論スル所或ハ殖産興業ノコトニ偏スルナキヲ保セス況ンヤ我南洋諸島ノ爲メニ計ルニハ此主義ノ殊ニ大ニ關係アルニ於テヲヤ
- 一本書ハ予カ這回ノ行ニ蒐集スル所ノ材料ニ基ツキ編纂シタルモノナリト雖モ之ヲ編スルニ方リ予カ辱知小花作助翁ノ小笠原島略記及其他ノ手記録ト辱交曲直瀬愛君ノ小笠原島物産(トハ大誌其卷ニ考トナルモノアリタリ深ク兩君ニ謝セサルヲ得ス)
- 一本書ヲ編スルヤ勿々ノ際最モ脱稿ヲ急キシカ故ニ書中索ヨリ誤謬

ナキヲ保セス就中里程ノ如キハ予カ明治九<sup>ニ</sup>テ腹寫セル處ニ據ル  
モノハ<sup>イ</sup>哩ヲ以テ記レ其他ハ我里程ヲ以テス改竄ノ際却テ其實ヲ失  
セント<sup>フ</sup>テ恐レハナリ咫ト尺ヲ以テ記スモノモ亦然リ是等ハ再板ヲ  
俟テ改ムヘシ

明治廿年十二月

編者誌

## 日本之南洋

### 目次

- 第一 日本之南洋
- 第二 明治丸ノ航程及日時
- 第三 伊豆七島ノ地形
- 第四 三宅島ノ碇泊
- 第五 黒瀬川夢物語
- 第六 島々通ハヌ八丈島ノ誤解
- 第七 横ノハ都
- 第八 伊豆海中ニ女羅島アリ
- 第九 七島ハ既ニ洗罪ノ地ニアラス
- 第十 鳥島ノ移住ニ感アリ



- 第十一 小笠原群島ノ地形
- 第十二 全史記沿革
- 第十三 扇浦文久開拓碑文
- 第十四 納涼山明治開拓碑文
- 第十五 移住人ト歸化人
- 第十六 二見港ノ碇泊
- 第十七 小笠原島ハ漸ク日本ノ物トナレリ(二名所見)
- 第十八 大村十一月ノ風光
- 第十九 陸産ニ三個ノ望ムヘキモノアリ
- 第二十 海産ニ三個ノ望ムヘキモノアリ
- 第二十一 遊ニ望島ヲ望テ感アリ
- 第二十二 小笠原島ノ農業及牧畜ト家畜

- 第二十三 紀文ノ軼事ヲ懐フ
- 第二十四 日本南洋ノ警戒
- 第二十五 扇浦金氏ノ寓舎
- 第二十六 火山群島
- 第二十七 南洋ノ大利益
- 第二十八 硫黄島ノ硫黄
- 第二十九 日本南洋ノ新航路

日本之南洋

南 濱 漁 長

服 部

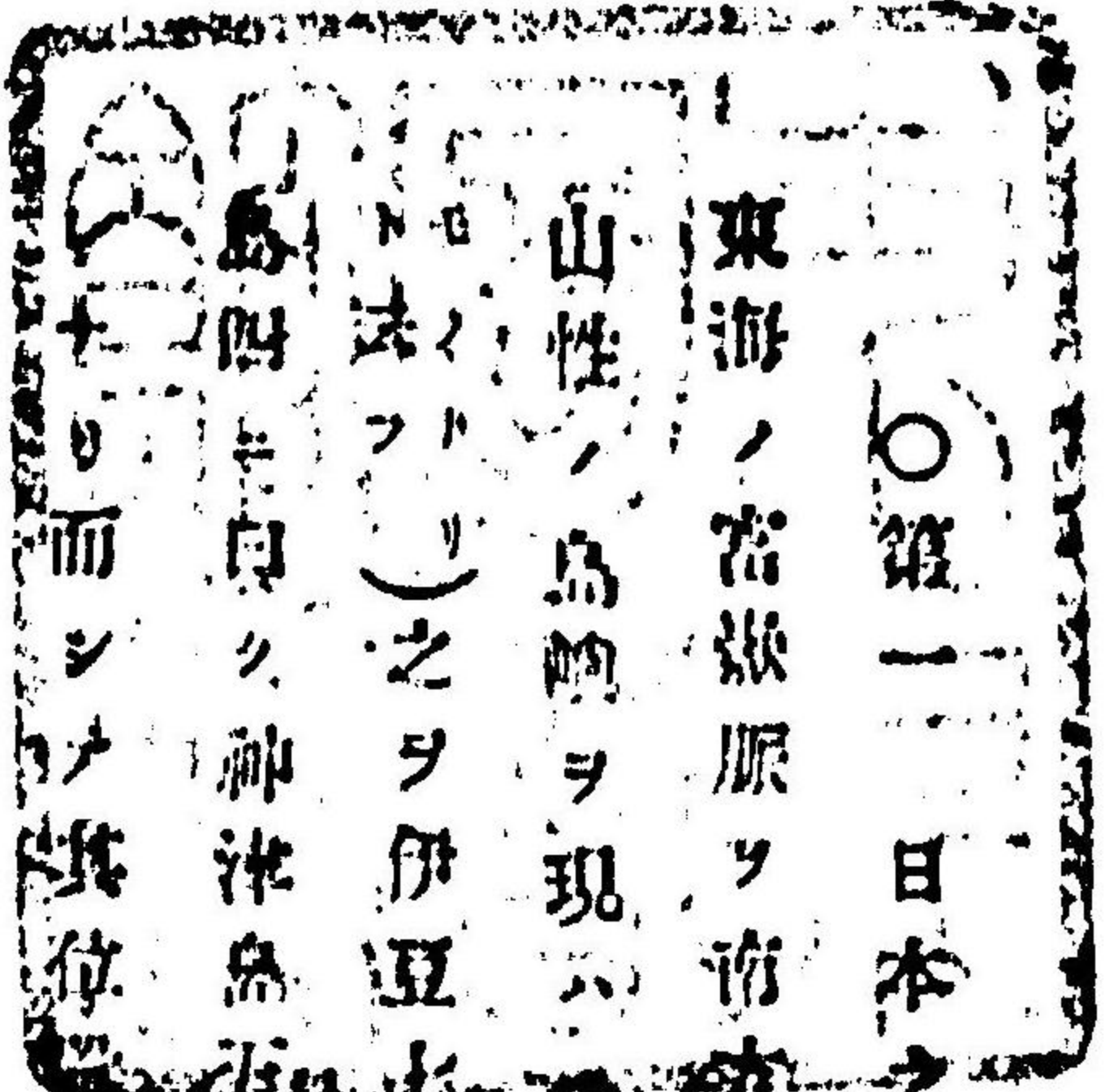
徹 編

東 海 釣 徒

渡 邊

義 方 補

○第一 日本之南洋



東海ノ宮嶽脈ヲ南方ニ走クシ豆州ノ諸山トナリ延テ海中ニ潮起シ火  
 山性ノ島嶼ヲ現ハス(爾乙人ドクトル、ナウマン氏ノ説ニ依レハ此山脈ハ北方島嶼加コリマシテ連ク此ニ通シトス)  
 島四ニ曰ク神津島五ニ曰ク三宅島六ニ曰ク御倉島七ニ曰ク八丈島是  
 北緯三拾三度ニ起リテ三拾四度七分ニ迄ヒ東  
 經百三拾九度ニ起リテ百四拾度五分ノ間ニ止マル群島ナリ、各島山巒  
 ノ高低幅員ノ廣狹ヨリ相異アリト雖モ沿海ハ悉ク千萬ノ巖礁磊落ト  
 シテ斷崖ノ下ニ基布兀立レ大島ノ波浮港ヲ除クノ外諸島共ニ一ノ港

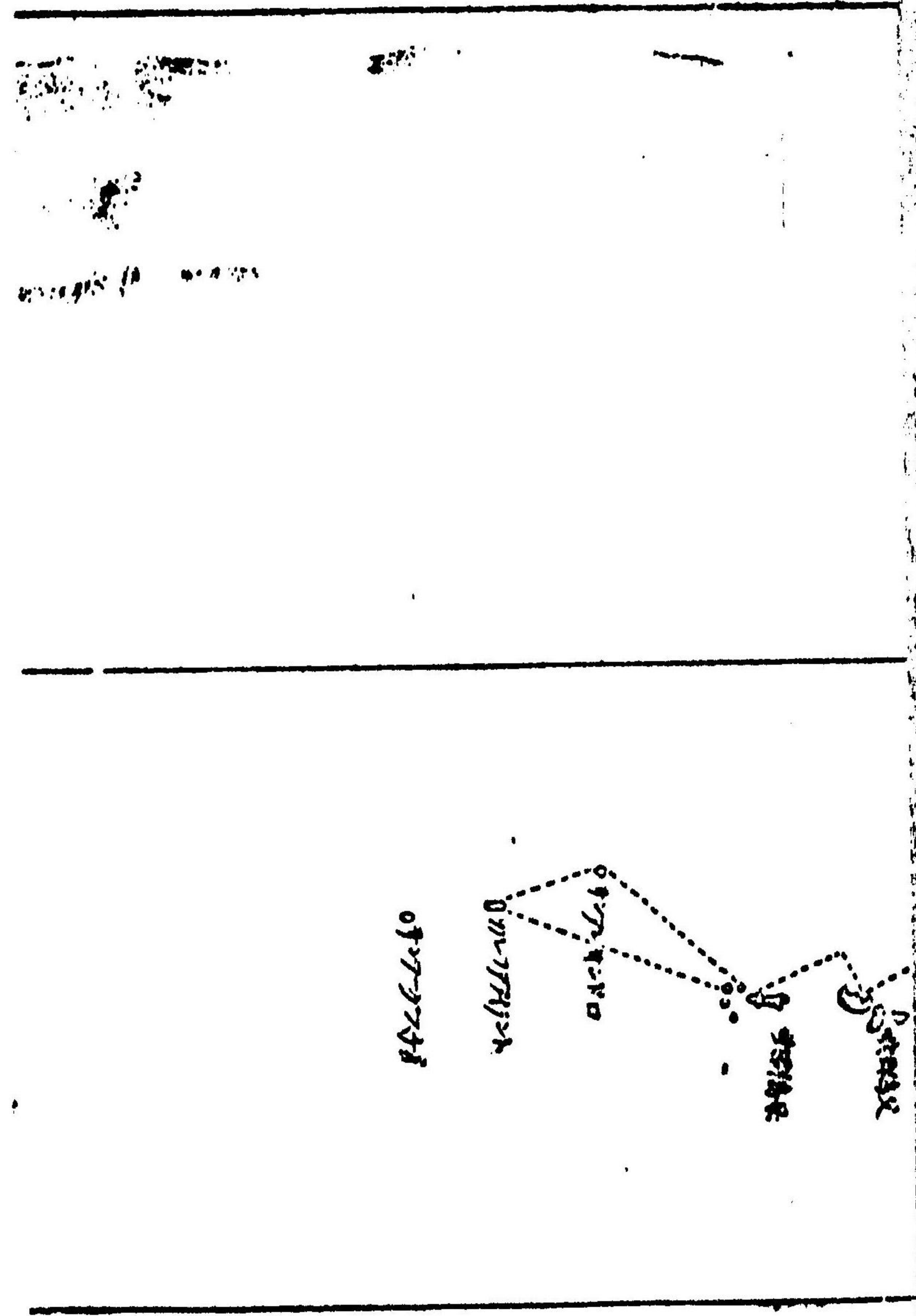
海ナク且風波常ニ穩カナラサルヲ以テ古來日本船舶ノ容易ニ渡航シ得サル所トナレ此地ヲ以テ罪人ノ配所トナレタルモ蓋シ此ニ由ラ然ルヲ知ルナリ

八丈嶋ノ南方百六拾六哩ヲ距テ一島アリ海鳥群棲レ無人ノ境ナリ因テ之ヲ鳥島ト稱ス是ヨリ又南方二百三拾哩ヲ距テ小笠原羣島ニ接ス同島ハ東京品川灣ヨリ直航海路凡五百三十餘哩ニシテ北緯二十六度三十分ニ起リ同度二十分(即チ我カ東京東經ニ度三ノ間ニ散布ス昔時文祿二年小笠原貞頼海ニ航シ始メ之ヲ檢出セシメ依リ島名トス然ルニ當時其人跡ナキヲ以テ人無島或無人島無人島等ノ數稱アリ歐米人等ハ該群島ヲ總稱シテアルゾビスガ又ホント呼フ無人ト云ヘルノ轉訛ナリ諸島ノ位世南北ニ亘リ大小二十餘島星羅棋散ス其中最大ナルモノヲ父島母島トス兄弟姉妹ノ諸島之ヲ環リ小嶋其間ニ點綴ス之ヲ

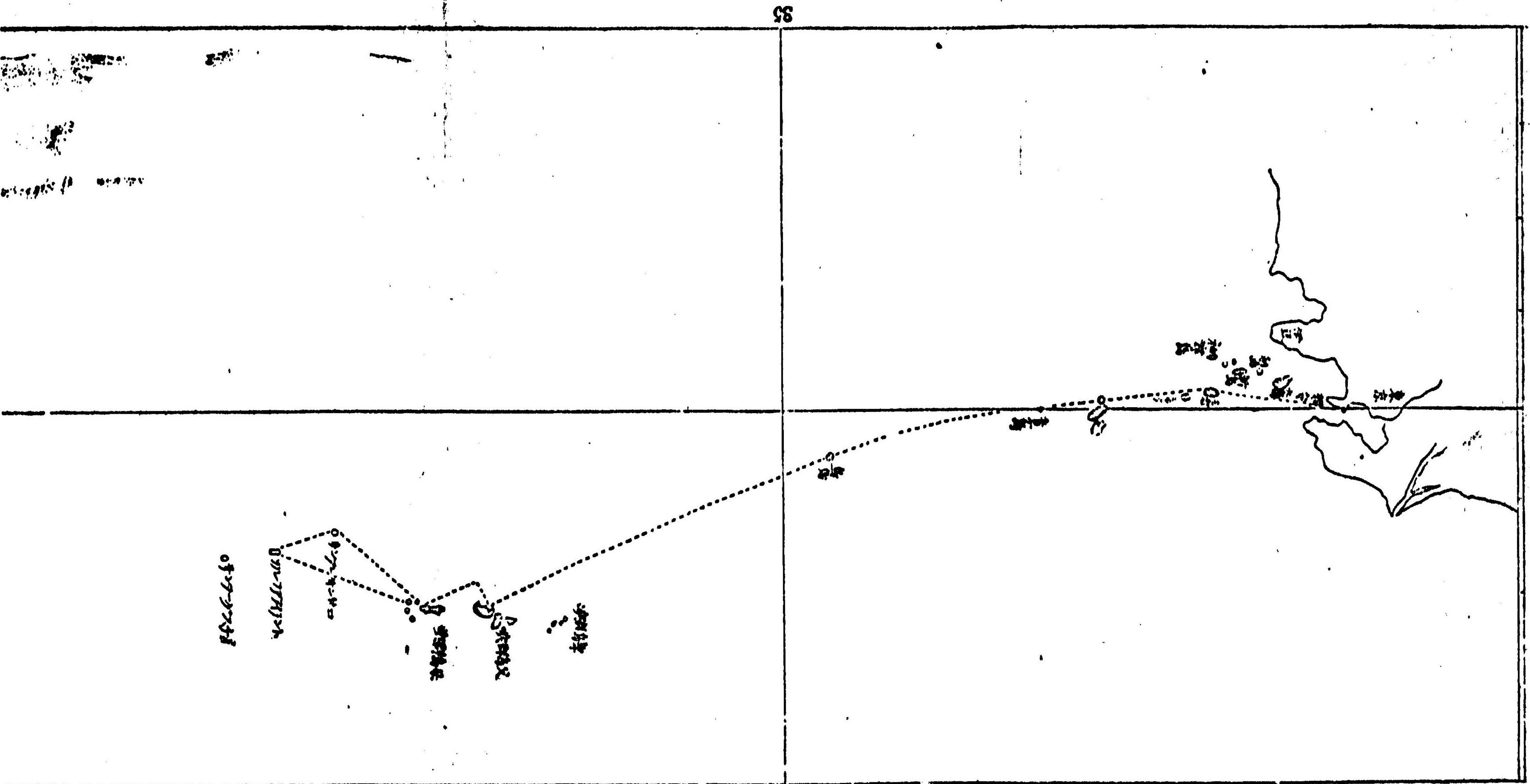
別テ父島群嶋、母島群嶋、婿島群嶋ノ三大部トス各島總テ高突ナル斷崖絶壁ニシテ熱帶ノ樹木繁茂鬱蒼之ヲ遠望セハ頗ル奇面ノ觀ヲナセリ(或地理家ノ説ニ依レハ小笠原群島ハ阿四亞尾加洲中ノ波里尼西亞部ニ屬スト云ヘリ)

以上ノ諸島ハヨク純然タル日本帝國ノ版圖内ニシテ日本ノ人民之ニ生息シ異邦ノ民モ亦我風化ニ順ヘリ而ルニ小笠原群島中ノ母島ヲ距ルニ百餘哩ノ方位ハ南微西ニ傾キテ一ノ島嶋アリ外人之ヲ亞歷山島ト稱ス實ニ北緯二拾五度十四分東經百四十一度十一分ヲ中興トセリ素ヨリ彈丸黒子ノ地ニシテ一塊ノ山嶺樹木稀ニ平地ナク而シテ泊舟ノ便アラサルカ如シ是ヨリ又東微南ニ走ルニ四拾餘哩ニシテ硫黃島ニ達ス母島ノ沖港ヨリ直航百三十餘哩ナリト云フ該島ハ地形扁長ニシテ僅ニ西部ノ一端兀然トシテ起リ海面ヲ抜クニ六百四十咫是レ即チ硫黃山コレヲ往時ノ噴火坑ナルヘシ砂磧東ニ走リ漸次隆起シ

矮草短樹ヲ生ス東西連亘五英里ニシテ其中點北緯二十四度四十八分  
 東予百四十二度十三分ニカレリ是ヨリ又南方數拾哩ヲ航シ聖澳加斯  
 島アリ漸ク夏至線直下ヲ過キ熱帶中ニ入り馬瀾蘭群島ニ連ナリ大小  
 ノ島嶼其數無慮是等ハ固ヨリ我カ日本帝國ノ風化ニ感浴セサルモノ  
 ナリ而シテ諸島多クハ無人ノ境遇ニシテ偶々酋長ノ所領アリト雖モ  
 元來獠々狂々ノ蠻族ナレハ敢テ論スルニ足ラス遠ク南方ノ洋中長土  
 輪加呂倫等ノ群島ニ至リテハ既ニ業ニ西班牙國ノ所領ニ歸セリ義ニ  
 南洋時事ノ著者ハ微小洲遙南々半球ノ時事ヲ綜スルニ方リ初メテ南  
 洋ナル新文字ヲ掲出シテ予輩ハ今芙蓉臺外ノ諸群島ヨリ遙南渺々  
 タル烟波千里ノ中ニ暮布セル群島ヲ捉來ツテ之ヲ日本ノ南洋ト稱シ  
 其既往ト將來ノ記事ヲ掲テ世人カ迷夢ヲ撲破シ以テ今日我南洋論ハ  
 必要ナル所以ヲ確カメント欲スルモノナリ



明治丸航路之圖 140



○第二 明治丸ノ航程及日時

今回予輩カ乗組ニ南洋ヲ巡航レタル明治丸ノ航程及日時等ハ左表ノ如ク

發地	日時刻	着地	日時刻	航行時間	里程	碇泊時間
横濱	十一月一日后四〇〇	横須賀	一日后六〇〇	二〇〇	五哩	九、五〇
横須賀	二日后三五〇	三宅島	三日午前八〇〇	四、十〇	七、六哩	一四、四〇
三宅島	三日后一〇、四〇	八丈島	四日前四、三〇	一〇、四〇	六、二哩	一〇、二〇
八丈島	四日后八〇〇	鳥島	五日后一〇〇〇	一七、〇〇	一六、六哩	六、三〇
鳥島	五日后七、三〇	父島	六日后一〇〇〇	二五、三〇	二三〇哩	六八、〇〇
父島	九日前八〇〇	母島	九日后〇、三〇	四、三〇	三、五哩	四、〇〇
母島	九日后五〇〇	碓黃島	十日前九、三〇	一六、〇〇	一三五哩	八、〇〇

硫黃島	十一日前	五、〇〇	母島	十一日後	六、三〇	一、三〇〇	一、三五哩	六、三〇
母島	十二日前	二、〇〇	父島	十二日前	六、〇〇	四、三〇	三五哩	五、八〇〇
父島	十四日後	三、一〇	島	十五日後	五、一七	二、六〇〇	二三〇哩	一、四三
島	十五日後	七、〇〇	八丈島	十六日後	〇、三〇	一、七〇〇	一、六六哩	九、〇〇
八丈島	十六日後	二、〇〇	三宅島	十七日前	七、〇〇	七、〇〇	六、二哩	三〇
三宅島	十七日前	七、三〇	横濱	全日後	六、五〇	一、一〇〇	八、一哩	

右ノ如クニシテ航海日數ハ十七日航行時間ハ百五十七時四十分航行  
 里程ハ千四百十八哩碇泊時間ハ百九十八時十三分ナリ而シテ其航路  
 ハ零圖ノ如シ

○第三 伊豆七島ノ地形

森々タル燧波渺々タル蒼海ノ中大小ノ島嶼散布シテ日本南洋ノ北門

トナルモノ乃チ伊豆ノ七島アリ(此條里數ハ我法ニ據ル之ヲ改ムルノ煩ハシキヲ恐レテナリ)  
 大島 ハ陸地ニ接スルヲ最モ近ク伊豆國川名ヲ距ルヲ大約七里下田  
 港ヲ距ルヲ拾八里東京ヲ距ルヲ四拾六里ナリ島ノ幅員ハ東西貳里拾  
 八丁南北五里餘周回拾里貳拾六町アリ其中央ニ聳ユル高山ヲ三原山  
 ト云フ高サ海面ヲ抽クヲ貳千五百五拾尺フットニシテ絶頂ニ噴火坑アリ今  
 尙水烟ヲ吐ク其山麓ヲ遶リテ村落ヲ爲スモノ六日ク波浮村曰ク蓬木  
 地村曰ク野増村曰ク新島村曰ク岡田村曰ク泉津村是ナリ而シテ其海  
 沿ヒ一港ヲ開クヲ波浮港ト云フ是テ伊豆七島中第一ノ良港トス  
 利島 ハ大島ノ南方ニ對シ海路ヲ隔ツルリ七里其地形廣狹ハ東西貳  
 拾六町南北拾八町餘ニシテ周圍二里拾八町ナリ東京ヨリ海路四十九  
 里下田港ヨリ拾五里ト稱ス島中一村アリ七島中最モ小ナルモノトス  
 地勢恰モ一大臺ノ氷上ヨリ抽起スルカ如クニシテ小樹密谷甚ク稀

上層漸ク高クシテ自ラ平坦ノ地ナリ其中尖ニ雷ノ絶頂ハ乃チ宮塚山ト稱シ海面ヲ抽クコト千六百拾咫ナリト云フ

新島 ハ利島ノ南東三里ヲ距リタル洋中ニアリ長ク南北ニ横ハリテ双方駢立ス遠ク之ヲ望メハ恰モ鯨ノ波上ニ遊泳シ兩々相對スルノ狀アリ而シテ島ノ南北兩部相聯ル所地勢平坦ニシテ海面ハ抽クコト甚ク高カラス大ニ他島ト其觀ヲ異ニセリ島地廣袤東西三拾町ニシテ南北ハ三里餘周回七里餘ナリトス西南神津島ニ接シ東南三宅島御倉島ト相對ス下田港ヨリスレハ拾三里東京ヨリスレハ五十一里ニ過キス島中二村アリ本村ト云ヒ若郷村ト云フ島ノ南部ナル向山ニ噴火口ノ舊跡アリ全島ノ巖樹甚ク嵯峨トシテ南北二部ニ錯ユル所ノ山ハ北部ヲ以テ高シトス其最高點ハ即チ一千四百九十咫ナリ沿海ハ島ノ中央東西ノ兩岸皆チ砂濱ニシテ船舶ヲ通スヘント雖モ其他ハ嵯峨タル盤

石海中ニ出沒シテ船ヲ繫クニ山ナク殊ニ所々奇岩怪石聳立スルコト孰レモ數十丈ニ及ビ波濤激昂シテ其勢實ニ惶ルヘキナリ式根島ハ新島ノ屬島ニシテ南方海波一里程ニアリ周回殆ント三十五丁ニ近キ孤立ノ半嶼ナリ西方拾町ヲ距テ地内島アリ又北方ニ鷓渡根島アリ式根ハ古來ニ人住マズ全島樹木能ク繁生スレバ水源ニ乏シ島ノ西北ニ方リ泊港ト稱スル一小灣アレト僅ニ小舟ヲ泊スルニ足ルノミ

神津島 ハ下田港ヨリ南方ニ當リ海路十八里ニシテ東北ニ新島ヲ扣ヘ南三宅島及御倉島ニ相對ス島ノ東西壹里拾町南北貳里餘周回五里ニシテ東京ヨリ西南ニ方リテ航路五十六里ナリトス島中一村アリ而シテ全島ノ地形ハ許多ノ巖嶺崎嶇トシテ聳立シ其中央ノ西南ニ位スル巨巖ヲ天上山ト云フ其高リ海面ヲ抽クコト一千七百咫ナリトス

三宅島 ハ周回八里餘東西貳里南北三里許南ハ御倉島ニ面シ北ハ神



津新島ノ二島ト對峙ス下田港ヨリスレハ貳拾六里東京ヨリスレハ六拾里ナリ島中五村アリ伊ヶ谷村ハ東南ニ在リテ海濱ニ接シ神着村ハ西北ノ海岸ニ瀕シ伊豆村ハ伊ヶ谷ト神着トノ中間ニアリ坪田村ハ東部ニ阿古村ハ東南ニ聯ル而シテ全島ノ形勢ハ遠ク海上ヨリ望メハ宛然タル飽圓錐狀ニシテ其絶頂ヲ雄山ト稱ス高サ凡二千五百尺島中噴火坑ノ舊址七所アリ沿海ハ巖石岬々トシテ無數ノ岩礁海中ニ出沒シ船舶ノ碇泊頗ル不便ナリ唯夕儀ニ船ヲ容ルルニ便ナルハ伊ヶ谷阿古ノ二村ナレモ是トシテモ海岸危險ニシテ遠カノ沖合ニテアササルヨリハ到底錨ヲ投シ船ヲ繫キテ永ク碇泊スルニ由ナレ

御倉島 ハ三宅島ノ東南六里ニアリ西北十三里ヲ距テハ神津新島ノ二島ト相對シ突然烟波中ニ屹立スル一島嶼ナリ東西二里半南北一里八町アリ其周圍ハ四里七町余トス東京ヨリ六十六里又下田港ヨリス

レハ大約三拾四里ナリ北方ニ向ヒタル海岸ニ一小濱アリ之ヲ大根ノ濱ト云ヒ島人常ニ舟ヲ此ニ繫キ碇着スル所ノ海門トス是ヨリ島山ノ断岸ニ梯ヲ攀テ登レハ其高サ二百五十尺ノ山間ニ一村<sup>ノ</sup>村落アリ島ノ中央突起シタル處ヲ御山ト稱ス海面ヲ抽クニ大約貳千六百五十尺ナリ是レ各島中最モ峭絶ナル石巖ナリトス

八丈島 ハ三宅島ト黒瀬ヲ距テ南方三十二里ノ洋中ニアリ東京ヨリ七十六里下田港ヨリ四十二里ノ處ニ位ス其周圍十一里餘ニシテ島ノ東西三里〇二町南北二里十二町地勢峻峻ニシテ島ノ周圍ハ悉ク断崖絶壁奇石怪巖屹立シテ僅ニ南方三ツ根ト外ニ一ヶ所ノ小艇ヲ寄泊スヘキ箇所アルノミ島ノ南端ニ聳立セル山ヲ俗ニ八丈富士ト稱ス舊時ノ噴火山ニシテ遠ク望メハ富岳ニ似タリ俗名ノ出ル所ナリ諸船舶之ヲ標準トシテ針路ヲ取ルト云フ島中五ヶ村アリ大賀郷楳立村末吉村

中ノ郷三ツ根村是ナリ此島平地アリテ耕スヘキモ沿海ハ常ニ風浪高ク潮流殊ニ急ナルカ爲メニ殆ント漁業ヲナスニ由ナシ小島ハ八丈島ノ附屬ニシテ本島ヲ距ル一里ノ南ニ在リテ東西一里二十丁南北一里周廻四里強ナリ嶋中字津木島打ノ二村落アリ青ヶ島モ亦々同シク八丈島ノ附屬ニシテ本島ヲ距ル十三里三十丁ノ南東ニ在リテ東西一里南北一里十八丁周回四里八丁餘ナリ

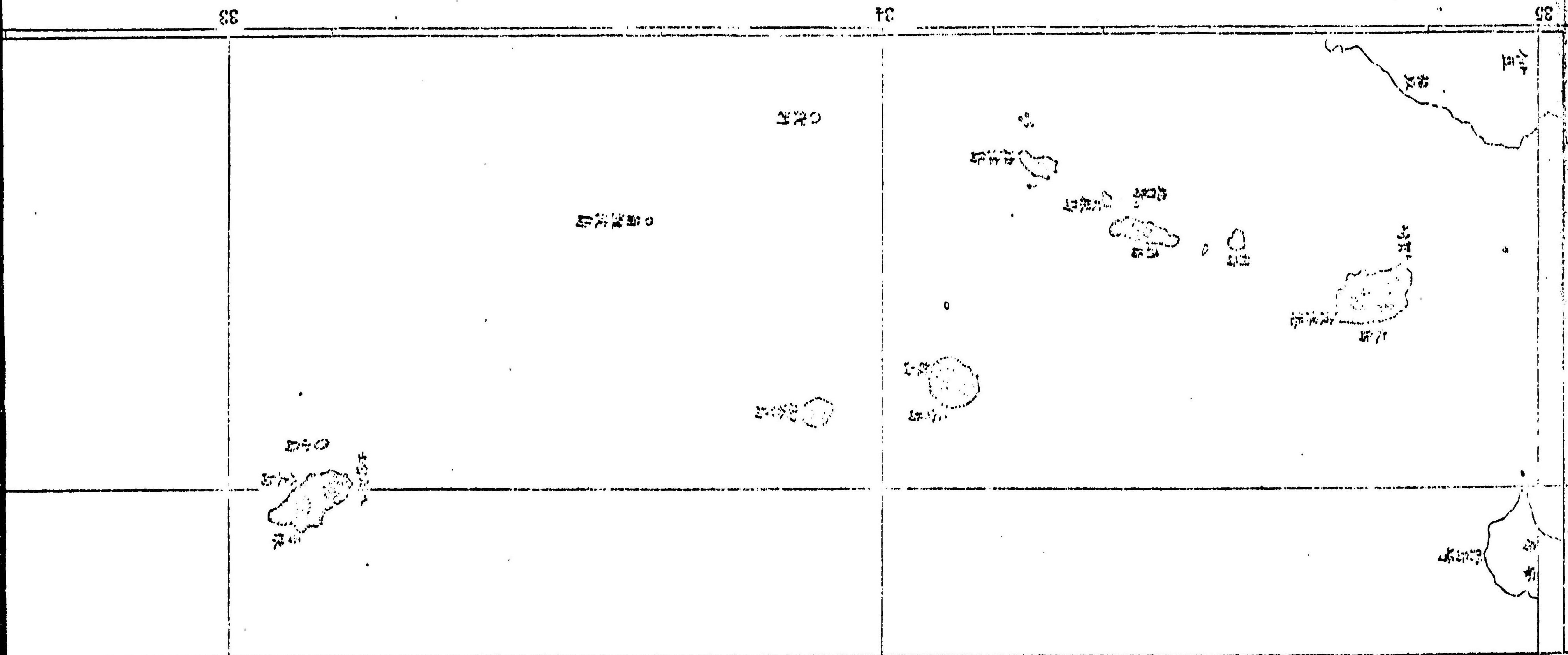
○第四 三宅島ノ碇泊

明治二十年十一月三日明治丸ハ昨夜横須賀港ヲ發航シ月ヲ踏テ(陰曆)日豆海ニ入リ今朝曉霧ヲ破リテ流苗嶽々三宅島ノ近海ニ近キ午前八時鐘ヲ伊ヶ谷村ノ沖合ニ投セリ實ニ本島ノ東南洋中ナリ元來七島中船舶ノ碇泊ニ便ナルノ地ハ大島ノ浮波港ヲ除クノ外又一ノ瓦港ナク

三宅島 碇泊 圖

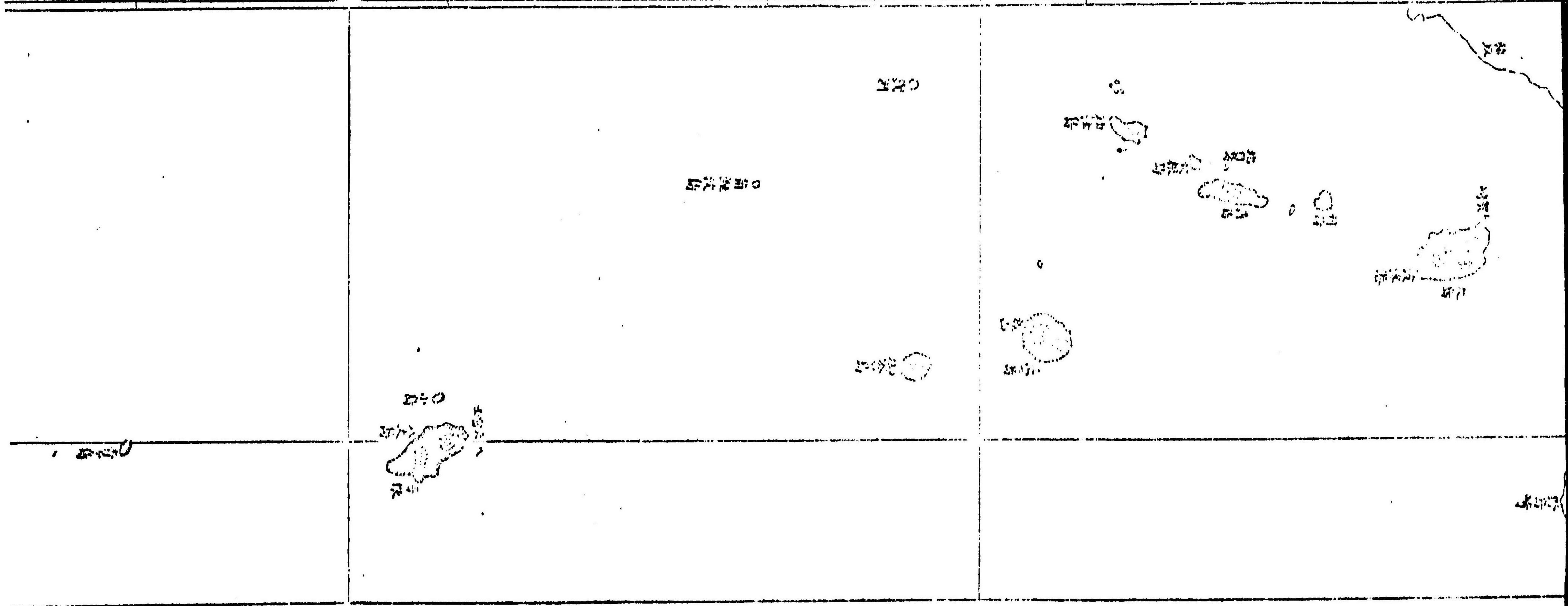
伊豆七島圖

140



88

78



2000

0 1000 2000

20

1000

1000

1000

1000

1000

1000

1000

1000

1000

1000

1000

而シテ全島ノ沿海ハ皆ナ斷崖絶壁ニシテ嵯峨タル巖礁其下ニ屏列シ  
縦令細小ノ漁舟ト雖モ容易ニ之ヲ泊シ難シ殊ニ各島ノ地勢灣形ヲナ  
スノ所ナク故ニ大船巨舶ノ暫クモ風波ヲ避クベキ所ナシ現ニ明治丸  
カ今回碇泊セル所ノ如キハ唯ク山陰ノ地ニ過キスシテ乃チ洋中ナリ  
若シ天氣忽然トシテ變レ風ニ加フルニ波ヲ以テセハ一刻一時モ其碇  
ヲ止ムル能ハサルナリ八丈島ノ碇泊所モ亦然リ古來日本船ノ品川灣  
ヲ發シテ南洋ニ向フモノ若シ幸コシテ近ク風波ニ遭遇セバ下田或ハ  
浮波港ニ其難ヲ避ケ得ヘキモ此港ヲ發シテ既ニ遠ク南方ニ進ミ而シ  
テ天荒レ波起ル時ハ終ニ一ノ避クヘキ所ナク偶々島影ヲ見ルモ船ヲ  
シテ之ニ寄スルハ却テ危險ノ恐アリ蓋シ岩礁多キヲ以テナリ既ニ此  
勢ニ至ルルハ唯船ヲ風潮ニ漂ハスヨリ他ニ求ムヘキノ策ナク終ニ不  
慮不知彼ノ恐ルヘキ黒潮ニ激流セラレ柁折レ楫碎ケ覆没ノ慘狀ニ陷

ルモノ又信ヨ已ムテ得サルナリ夫船舶ノハ之ヲ泊スルノ港灣ナカ  
 ルヘカウス既ニ港灣アリハ船舶ノ出入自在ニシテ從テ其地物貨ノ輸  
 出ト外産ノ輸入ト利スヘク於是其地方ノ富盛ヲ計ルヘシ近時港灣開  
 築或ハ修繕ノ論各地ニ起リ帆檣林立ノ區愈々多キク致セルモノ蓋シ  
 是ニ山ヲ然ルナリ昔ハ遠州洋ヲ航スルモノ志州島羽ヲ出レハ豆州下  
 田ニ至ルマテ寄ルヘキノ港灣ナシ故ニ遠州洋ハ航海者ノ尤モ難所ナ  
 リレカ近ク尾州半田港ノ開築アリ又特ニ長港ヲ東方ニ見ントス然ル  
 ニ近時南洋開物ノ論ヲ唱フル者多ク渡航スルモノ日ニ愈々増殖スル  
 ニ方リ航途中不意ノ風波ヲ避シヘキ一港灣ノ島中ニ無キトハ其不便  
 モ亦甚シト云フヘレ聞ク本年八月千歲丸ノ小笠原島ニ航スルニ方テ  
 ヤ三宅ヲ獲レテ黒瀬ノ潮流ニ入り遙ニ八丈ヲ望ムニ際シ風濤俄ニ起  
 リ又一步モ進航シ難ク帆ヲ破リ檣ヲ折キ辛クシテ數十里ヲ迂回シ下

田港ニ還レリト嗚呼南洋ノ物産素ヨリ起スヘシト雖も之ヲ起スノ路  
 ナラズメサルヘカウス之ヲ求メント欲スルニ方リテ尙斯ノ如キ不便ナ  
 ランニハ其目的ノ終ニ貫徹スヘキ理アラサルナリ南洋ノ航途中一長  
 港ヲ修築フルハ實ニ目下ノ急務ト云フモ敢テ過言ニアラサルヲ信ス  
 當路者少シシ猛省セヨ々々々々

○第五 黒瀬川夢物語

三宅ノ南八丈ノ北廣袤數里ノ間一條ノ黒潮急激瀬ヲナシ遠ク熱帶ニ  
 リ流レ來ル人呼テ之ヲ黒瀬川ト稱ス蓋シ潮流墨ノ如ク而シテ急流川  
 ノ如キヲ謂フナリ黒瀬ハ沙漠タル洋中其流ノ廣狹及緩急四時同シカ  
 ラス又東西其處ニヨリテ各異同アリ古來日本船ノ最モ難所トスル航  
 途ニシテ往々漁舟ノ西南海ニ漂流セラル、モノ概シテ此潮流ニ入

ラサルハナレ漂流船ノ幸フレテ八丈其他ノ諸島ニ到着スルモノ多キ  
 ハ要スルニ此ニ由ラ然ルナリ予輩ハ實ニ本年十一月三日ノ夕涼船明  
 治丸ヲ以テ此潮流ニ入ル此夜月光明カニテ金龍黒波ニ臨リ渺々  
 ル南洋中船揚々艦ヲ上リ風颯々衣ヲ吹キ神氣恍惚トシテ愉快云フヘ  
 カラズ同船ノ諸友ト相携ヘテ甲板上ニ逍遙シ相謂テ曰ク此良夜ヲ如  
 何ヒン彼ノ月ト水トハ蘇子カ所謂無齒蕪ナルカト談笑激烈艦邊ノ時  
 辰鐘既ニ三更ヲ報スルニ及ヒ相伴テ寢室ニ入レリ少焉窓外波浪ノ聲  
 高ク疾風窓口ニ入り室内ノ燈光滅シテ暗如タリ怪ムベレ眼邊燐火ノ  
 點々上下スルト同時ニ悲哀ノ聲近ク聞ユ予輩吃驚狼狽其何ノ故ナル  
 ヲ知ラス疾呼大聲「ゴート」云ハントメレ口塞リテ語出アス偶々悲  
 哀ノ聲ヲ發シ飲々トシテ予輩ニ語ルモノアリ曰ク

我等一同ハ皆是れ日本船船の頭及ひ水手舵取の身ホテ素より船

乗の業お熟せざるよとあらねど不幸も激浪怒濤よ出會ひ舵を折  
 り櫓を流し數月間の久き万里渺茫たる波上よ漂ひ食料の勿論飲  
 料の水さへ尽て力なく飢餓よ迫りて夫れか爲め心亂れ氣狂ふて自  
 ら海中よ投身し大魚の餌食となるもあり又辛ふして玉の緒の斷え  
 なんとする細き命を覺束なくも繋ぎ留めこの潮流よをいながらされ  
 婦人や遙よ島影を認めて僅よ力を得船腹よそがりて彼方へと泳き  
 つきしも奈何せん見上るをかりの斷崖絶壁錐を立たる如くよて蟻  
 ち登るよ便宜なく兎角をるうち山なほ浪よ捲込れ既よ破れし船は  
 尙は散々よ打ち碎け身も亦た微塵と成の果船幽靈と消え失せて怨  
 魂永く此海に迷へり熟々惟ふよ繼新このかた外國交通の道開けて  
 船乗る業も開けたれど取分け船造る術の日よ月よ進みてより如何  
 なる大浪暴風も容易よ之を凌ぎ得べく航海者の上よ取りて此上も

幸<sup>しやわ</sup>を得たる事こそ羨ましかれ昔の日本形は船<sup>ふね</sup>をな遠き  
 航路<sup>かうろ</sup>の出<sup>い</sup>来<sup>き</sup>ぬやうわざと幕府より仕置<sup>か</sup>りため船造る業も次第<sup>しだい</sup>は  
 拙<sup>ち</sup>なく木葉<sup>きは</sup>は均<sup>ひら</sup>しき小舟<sup>こふね</sup>にて大海原<sup>おほうみ</sup>を往<sup>ゆ</sup>くことありしがゆゑは我  
 らもこの衰<sup>おとろ</sup>れなる境遇<sup>きんぐい</sup>に陥<sup>お</sup>りたる次第<sup>しだい</sup>なれされと退<sup>ひ</sup>いて考<sup>か</sup>ふるは  
 我邦<sup>わがくに</sup>遠洋<sup>えんやう</sup>渡航<sup>ぶたう</sup>の事久し天慶<sup>てんけい</sup>の間志士<sup>しし</sup>買人<sup>かひにん</sup>の遠く海外<sup>かいがい</sup>に出<sup>い</sup>て生計<sup>せいけい</sup>を  
 營<sup>か</sup>み貿易<sup>ぼうえき</sup>を謀<sup>はか</sup>る者當時<sup>たうじ</sup>陸路<sup>りくろ</sup>跡<sup>あと</sup>を絶<sup>た</sup>たず西方<sup>せいほう</sup>より福建<sup>ふくけん</sup>廣東<sup>くわんどう</sup>呂宋<sup>りょもう</sup>爪哇<sup>つわい</sup>  
 安南<sup>あんなん</sup>暹羅<sup>えんら</sup>等<sup>ら</sup>に往<sup>ゆ</sup>く者あり東方<sup>とうほう</sup>より太平洋<sup>たいへいやう</sup>群島<sup>ぐんとう</sup>を経て南亞<sup>なんあ</sup>米利加<sup>めいりか</sup>に  
 赴<sup>おもむ</sup>く者あり近く老饒<sup>らうじょう</sup>屋<sup>い</sup>五兵衛<sup>ごべゑ</sup>の三宅<sup>みやけ</sup>島<sup>しま</sup>に航<sup>かう</sup>して土人<sup>どにん</sup>と貿易<sup>ぼうえき</sup>を試<sup>こ</sup>み  
 進<sup>すす</sup>んで八丈<sup>はちぢょう</sup>島<sup>しま</sup>無人<sup>むにん</sup>島<sup>しま</sup>(小笠原)及びエゾ<sup>エゾ</sup>ゾツ<sup>ゾツ</sup>まで遠航<sup>えんかう</sup>し漸次<sup>せんじ</sup>朝鮮<sup>ちやうせん</sup>魯  
 西亞<sup>ろしや</sup>米國<sup>めいこく</sup>等の諸國<sup>しよこく</sup>に至<sup>いた</sup>り自由<sup>じゆうゆ</sup>に貿易<sup>ぼうえき</sup>して必<sup>かな</sup>ず大利<sup>たいり</sup>を占<sup>め</sup>め今日  
 は在<sup>あ</sup>りて老<sup>らう</sup>眞<sup>しん</sup>の文明<sup>ぶんめい</sup>開化<sup>かいけ</sup>は率<sup>す</sup>先<sup>せん</sup>者<sup>しや</sup>ありと賞<sup>しょう</sup>讃<sup>さん</sup>せられて其名<sup>な</sup>を後世<sup>こうせい</sup>  
 に傳<sup>つた</sup>へしは當時<sup>たうじ</sup>鎖國<sup>さこく</sup>の制度<sup>せいど</sup>に觸<sup>ふ</sup>れ事<sup>こと</sup>發<sup>はつ</sup>覺<sup>かく</sup>て殊<sup>ことごと</sup>せられ其<sup>その</sup>所有<sup>しゆうゆう</sup>地<sup>ち</sup>所<sup>じよ</sup>八

万五千三百石并大判千四百八十五枚小判二千六百六十六兩古金  
 三万六千六百兩瓜朱金十六万五千三百貳十兩二分判五千三百二十  
 兩天保銀五百三十二貫文銀千六百六十貫文藩札七十貫五百貳拾目  
 現米三万五千四百石船大小數十艘倉庫八十一棟諸方へ貸付金高貳  
 拾七万五千三百兩の世産と悉皆官沒されしが如き又寛政年間幕府  
 蝦夷を招撫せんと謀り南部津輕二侯を令し成卒を發して邊警を備  
 へしむるお世り能く北海に航する者を募るお際し兵庫の廻漕業高  
 田屋嘉兵衛が慨然として其募る應じ巨船を發して先づクナレリよ  
 至り尙進んでエトロフ島に航し海畔を檢して漁場十七所を開き漁  
 具及び衣食を給して夷民を悦服せしめ遠く阿島を我が所屬としエ  
 トロフ諸島に向ひ始めし海路を通りたる等其例少からず賦税も附  
 したる我々も數はれぬ航海者遇拙なくして此海の船曲盡とい



成り果て、當時堅艦の駕すべきなく又海路の據るべきなく唯光星  
 を見て行き日を指して進む其豪膽勇決のわかれ今の世の人をして  
 肝膽を寒からしめん之を現時の航海無比をれば其難易の經庭何そ  
 嘗奪壞のみならんや然り而して獨り怪むべきを今日我邦人よして  
 我よ近接せる此南方諸島國に向つて遠航貿易の事を議するものな  
 きハ何ぞや前人志勇よして今人怯なるか嗚呼、

ト辟氣始メハ弱クシテ退々ニ銳トク其聲宛モ怨ムカ如ク又泣クカ如  
 ク訴フルカ如ク慨クカ如ク哀レムカ如ク予輩此言ヲ聞テ怪訝ニ堪ヘ  
 ス乞然トシテ身ヲ起セハ機關運轉ノ音響々トシテ耳ニ轟キ甲板上水  
 夫カ來往ノ靴聲頭腦ニ響キク喧々タリ唯々知レ彼ノ幽魂ハ是レ長途  
 ノ航海ニ身神漸ク疲勞シテ睡魔ノ侵入シタルニ由ルヲ於是始メテ全  
 身ノ冷汗ヲ拭ヒ長大息スルヲ數次ナリキ

予輩之ヲ聞ク往時日本ノ船舶ハ商船ニ漁舟ニ其構造堅固ニシテ速ク  
 洋波ヲ凌キ我商船ノ海外ニ航スルカ如キハ珍シカラサリト而シテ  
 當時ハ人民ノ海外ニ渡航スル者多ク天慶寛政ノ間ニハ後印度地方ニ  
 來往シ暹羅ノ日本町ニハ日本ノ男女三千人居住セリト云フ此人々ハ  
 果シテ日本船舶ニ駕シテ渡航セシヤ否ハ詳ナラズト雖モ兎モ角今日  
 ニ比スレハ人々遠征ノ勞ヲ厭ハサリシナルヘシ然ルニ徳川氏カ鎖國  
 ノ制ヲ執リ殊ニ天主教ヲ忌ムノ餘リ人ノ海外ニ渡航スルヲ嚴禁シ猶  
 私カニ船舶ノ構造ニ干涉シテ終ニ軟弱ナル組織トナシ遠航ニ耐ヘサ  
 ラレムルニ至レリ是レ實ニ本邦航海術ノ退歩セシ一原因ニシテ之カ  
 爲メ人々漸ク海上ノ旅行ヲ厭ヒ終ニ我カ商工業ノ不振ヲ來レル所  
 以今日之ヲ思ヘハ實ニ慨嘆ニ堪ヘサルナリ往時八丈島ニ航スル者ハ  
 天氣清明ノ日ト雖モ猶且戰々慄々トシテ覆船ノ患ナカラントテ恐レ

黒瀬川ヲ過ル恰モ死地ニ入ルト一般故ニ是ヨリ南方ノ洋中ニ至リテハ我船船ノ來往甚ク少ク其小笠原島ニ通航セシ如キハ僅々數フルニ足ルノミ必覺南漢ノ風濤荒シト雖モ船船ハ排遣軟弱ナルニヨリ殊ニ覆没破船ノ患アリテ自ラ航海者ノ畏懼心ヲ惹起シタル所以ナリ日本南洋ノ遺利當時ヨリテ之ヲ拾ハス樂テ今日ニ及フモノ果シテ夫誰レノ罪ツヤ嗚呼夫レ誰レノ罪ツヤ

○第六 鳥も通ハヌ八丈島ノ誤解

鳥も通之ぬ八丈島へ何を目當ふ通ふやら是レ内地人カ酒酣ニ耳熱ニ大聲口吟スル處ノ但諾ニシテ能ク人口ニ膾炙ス其意蓋レ八丈島ハ古來人ノ往來セサル絶海ノ一孤島ナルカ故ニ遠國ノ意ヲ代表シ天涯ニ漫遊スル旅客ニ飄スルノ作ナルカ如レ八丈島ニテハ鳥も通之ぬ八丈

ヶ島へ誰がさそふて通之せたト諾ヒ其意稍異ナレリ而シテ内地人ハ此一片ノ但諾ニヨリ八丈島ハ恰モ月世界ノ如キ思ヒテナレ容易ニ渡ルヘカラサルモノトシ維新ノ後ニ至ルマテ猶且此島ニ渡航スルモノ種ナリ予等今回歸航ノ後八丈島ノ實況ヲ新聞紙上ニ掲出スルニ當テヤ世人ハ歐米諸洲ノ實況ヲ聞シヨリモ一層ノ愉快ヲ感シ爭フテ之ヲ購ヒ之ヲ看ルモノ、如シ嗚呼又何等ノ戯レテヤ要スルニ但諾深ク腦髓ニ染浸セルニ依ルナルベシ八丈ノ島決シテ飛鳥通ハタルノ地ニアラス東京ヨリ船レテ六拾里ヲ航シ三宅島ニ到レハ遙ニ渺々漠々タル黒潮波上ニ其島影ヲ認メ得ベシ帆船ニテ直航三日漑船ナレハ一晝夜半ヲ費セハ早ク既ニ異様ナル八丈婦人ニ親炙シ幾多ノ窟子（盆踊ノ窟ハ情人ニ寄贈ト名産ノ絹布ヲ惠與セツルナルヘレ八丈島ニ客遊スル何ソ目的ナカランヤ請フ八丈ノ名産ヲ見ヨ）

八丈島ノ名産トハ何ソヤ乃チ汝カ惠與セラレタル絹布ナリ八丈ノ地  
 絶海ノ一孤島ニレテ其島民ハ皆是野蠻蒙昧ノ域ヲ脱セスト雖モ而カ  
 モ斯ノ如キ華美艶麗ナル絹布ヲ織リ出サントハ實ニ其島ニ遊フノ人  
 ハ意外ノ一驚ヲ吃スルナラン予等此島ニ上陸スルヤ先ツ此美術ヲ探  
 ラント欲レ機杼ノ聲ヲ聞ケハ恐シ其家ニ入り之ヲ熟視レ就テ又蠶業  
 ノ事ヲモ調査シタルニ非常ニ其術ノ進歩セルニ驚ケリ加ルニ此島ニ  
 アリテハ此織物ヲ染ムヘキ貴重ノ染料搗梅皮、椎皮、カリヤス、及黒田土  
 等アリテ此等良好ノ染料特ニ此島ニ多キハ是實ニ至大ノ天幸ト謂フ  
 ヘキナリ八丈ハ絹布其價廉ハ小芙蓉、峯上、昇、ランハ並ニ遠キハ非キ  
 ハハハ八丈ハ婦女夫之ヲ勉メヨ

○第七 接メハ都

人誰カ我カ墳墓ノ地ヲ愛セサランヤ愛郷ノ心ナキモノハ人コレテ人  
 ニ非サルナリ野蠻蒙昧ノ民ト雖モ我カ生地ヲ慕ハサルモノナレ亞非  
 利加ノ黒奴カ奴隸市場ニ啼泣スルモノハ其勞働ノ艱苦ヲ思フテ愁ム  
 ニアラスシテ特リ其郷土ヲ懷ル、忍ヒサルヲ愛テナリ如何ナル山  
 間僻地ニ住ハルモノト雖モ突然之ニ勸ムルニ熱心ナル王城ノ下ニ到  
 ランテ以テアセハ其人喜ンテ之ニ應スルハ稀レナリ唯華美贅澤ナル  
 都人士カ始メテ此山間僻處ノ孤村ニ入ル片ハ殆ト世上ノ快樂ヲ求ム  
 ルニ由ナキヲ感シ村民ノ爲メニ其不遇ヲ憐ミ之ヲシテ直ニ都下ノ繁  
 華ヲ見セシメントテ思ヒ同遊ヲ促スノ心事ヲ惹起スルナルヘシ然レ  
 モ村民ハ繁雜ナル都市ニ出テ都人士カ華美ノ風俗ヲ見ノヨリハ寧ロ  
 氣樂ナル山間ニ閑居シ天然ノ風流ヲ愛スルノ勝レルニ如カヌ是レ但

陸ニ所謂樓メハ都ニシテ愛郷心ヨリ發スル所ハ眞情ナリ今豆海七島  
 ノ地ヲ見ルニ皆是レ彈丸黒子ノ一小嶼ニシテ煙波渺茫ノ中ニ甚微レ  
 殊ニ島中平地ニ乏シク屈ヲナスモノ多クハ斷崖絶壁ノ地ニアラス  
 ハ僅ニ溪間ノ一片地ニアリ而シテ其島地ハ皆ナコソ火山の構造ニ  
 ナルカ故ニ土質貧瘠ニシテ穀菜ノ耕作ニ適セス甚レキニ至リテハ一  
 脚一木ヲ見ル能ハス隨テ其水ニ乏シキハ實ニ島民ノ一大患トスル所  
 ナリ今先ツ噴火ノ慘狀ト濁水ノ患害トヲ言ハ、人雖レカ此孤島ニ生  
 息スルヲ欲センヤ之ヲ聞クモ猶且暇々傑々湧氷ヲ踏ムト一同般ノ思  
 フナキレムヘシ大島ノ噴火山ハ往昔ヨリ屢々猛烈ナル噴火アリシ  
 ハ舊記ニ見ユ日本紀ニ曰ク

天武天皇十二年十月壬辰夕有鳴聲如鼓聞于東方有人曰伊豆島即大  
 西北二面自然增益三百餘丈云々

按スルニ大島中今ノ新島村ノ地ハ當時之ヲ爲メニ海面ニ噴起セラレ  
 テ一小島トナリ後終ニ本島ニ連接セルモノナラン竺仙錄ニ曰ク

日本國伊豆州海中有一坐山名曰大島毎年三百六十日間日々火出自  
 然燃聲如雷雲烟焰漲天近日以來又復灰飛數百里夜間掃除天明復積

如霜雪云々

鎌倉大日記ニ曰ク

應永二十八年四月伊豆燒其響如雷海水如熱湯魚多死

又或說ニ貞享甲子正月十六日三原山自カラ燒ケ凡七年ニレテ止ムト  
 云フト元祿十六年十一月廿二日大島地大ニ震動シ海水陸地ニ汎溢シ  
 岡田村最ニ其害ヲ蒙リ廻船漁船十八艘男女五十六人家屋五十八戸皆  
 沈溺流沒スト云フ安永丁酉七月三原山復タ噴火シ凡ソ十五年間ヲ經  
 テ寬永壬子ノ秋ニ至リ始メテ熄ム當時地ニ上灰ヲ降シ積ムヲ四五尺ニ

連セリト云フ爾後久シク噴火セザリシカ今ヲ距ルヲ四十餘年前天保年間再ヒ噴出シ地震鳴動スルヲ雷ノ如ク硫黄氣四塞レ爲メニ植物ノ生育ヲ傷害セリ尋テ激烈緩緩常ナク凡ソ二十年間ヲ經テ熄滅シ爾來僅ニ噴烟ノ蒸騰飛散セルヲ見ルノミ其後明治三年ニ至リ俄然噴出セシカ僅ニ四日間ニシテ熄ム又全九年一月ヨリ烈シク噴出シ漸ク今日ニ至リ恰モ淡霧ノ環繞アルカ如キヲ見ルノミ大島ノ噴火其勢ノ猛烈ニシテ其恐ルヘキヲ概テ斯ノ如シ三宅島ヨ亦古來ヨリ屢次噴火ノ變動アリテ大ニ人物ノ盛衰ニ關係セリ舊記ニ據レハ今ヲ距ルヲ大凡二千年前八皇孝安天皇ノ御宇中燒出シタリト爾後噴火ノ年曆詳ナラスト雖モ八百餘年以後ニ係ルモノハ次ノ如シ

應德二年神火ニテ山燒 今ヲ距ルヲ 八百年  
 久壽元年十月大神火 全 七百十七年

寛永二十年二月十二日酉刻神火 全 二百四十五年  
 正徳元年十二月廿八日酉刻神火 全 百七十八年  
 寶曆十三年神火 全 百二十六年  
 文化八年正月三日子刻神火 全 七十九年  
 天保六年九月廿二日神火 全 五十三年  
 明治七年七月三日正午噴火 全 十四年

以上記スルカ如クナレバ久壽元年ヨリ寛永廿年ニ至ルノ間四百七十二年ニシテ一回ノ噴火アリシヲ載セサルモノハ蓋シ文書ノ散逸ニ由ルモノナラシカ然リ而シテ明治七年噴火ノ實況ヲ云ハンニ當日ニ至リ曉來數次地ハ震動シテ沸シカ如シ天ハ炎々トシテ灼クカ如ク實ニ其焦熱ニ堪ル能ハス唯ニ神怒アツノヲ恐懼スルノミ既ニシテ正午ニ至リ地底俄ニ鳴動シテ止マス其餘響數十里外ニ達シ轟々トシ

ア迅雷ノ鳴動スルカ如ク神若社ノ厨村東郷ノ山中深サ三拾餘尋ノ池  
 潭ヨリ噴火一發シシリシカ白烟忽チ天ニ漲リテ恰モ炭雲ノ勃起スル  
 カ如ク火焰赫々トシテ電光ノ激耀スルニ似タリ且高シ鑠礫熔石ヲ飛  
 騰レ或ハ低ク火漿ヲ流シテ人家ヲ埋没シ草木ヲ燒焚レ海水之カ爲ル  
 ニ沸涌レテ熱湯ノ如ク島地一里ノ外ニ溢レテ人物ヲ慘毒スルヲ實ニ  
 名狀スヘカラス今尙餘烟ヲ存スルヲ以テ島民寢食ヲ安セサルモ宜ナ  
 リ嗚呼島民カ其身ヲ處スル恰モ焦熱地獄ノ底ニ在ルト一般其危險モ  
 亦甚シト謂フベシ

〔各島又水ニ乏シク日常ノ飲料多クハ雨水ヲ用ニ偶天然ノ湧泉アリト  
 雖モ其水量ハ甚ム少クシテ特リ之ノミニ依リカクシ故ニ毎戸雨水ヲ  
 貯ヘ日常ノ飲料ニ供スルナリ之ヲ貯フルノ方法モ亦種々アリテ其水  
 ハ貯フルコト久シキニ涉レハ白ラ腐敗シ遂ニ子孓ノ類ヲ生レ其汚穢云

フヘカヲサハルモ島民ノ之ヲ貴重スルコト神泉靈液モ管ナラサルカ如シ  
 又以テ水ニ乏シキ苦ヲ知ルコト足ルベシ利島ハ尤モ甚シク島民ノ嬰兒  
 ナ鞠育スルヤ兒啼泣シテ休マサル片ハ其父母之ヲ慰諭シテ曰ク雨水  
 一杯ヲ與フヘシト然スレハ兒忽チ笑爾トシテ笑ヒ更ニ啼泣スルコトナ  
 シ其狀内地ノ嬰兒ニ與ツルニ糕餅ヲ以テアスルカ如シ又從來女子ノ嫁  
 スルニハ必ス多クノ水瓶ヲ携ヘ行クヲ以テ榮譽トセリ是レ土俗濁ヲ  
 防キ水ヲ貯フルヲ以テ保命ノ第一義トナスニアリテ然ルナリ又實ニ  
 一奇談ト云フベシ然レトモ人ノ食ニ饑ル事ハ水ニ渴スルノ苦キニ如  
 カス之ヲ思ヘハ島民ノ配慮モ亦宜ナルヲ知ルベシ  
 嗚呼其地ハ彈丸黑子ニシテ沙漠タル烟波ノ中ニアリ而レノ此ノ恐ル  
 ベキニ大患アリ其他些少ノ艱苦不便ヲ感スルニ至リテハ我々内地人  
 カ得テ知ルヘカヲサルモノアリ若シ内地人ヲシテ此地ニ在ラシメシ

\*常ニ暇々恐々トシテ身自ヲ踏ムノ思ヒアラシク然レモ從來慣レテ  
 之ニ住スルノ島民ニ至リテハ戀々トシテ其地ヲ愛レ其島ヲ離ルニ  
 忍ヒス親戚友人ノ他郷ニ出ルモノアラハ深ク其別ヲ惜ミ其去ルモノ  
 亦切ニ故天ヲ慕フノ情ハ内地人ノ比ニアラサルヘシ請フ見ヨ八丈  
 島ノ海邊斷崖絶壁ハ上焉様ナル八丈婦人カ其頭ニ簪ラス所ノ重箱ヲ  
 開イテ知人ノ行ヲ送ルヲ其親切撫スヘシ而レテ其人ハ將ニ島ヲ去ラ  
 ントスルヤ一聲啼泣レテ別ヲ惜ムハ切ナルヲ予之ヲ觀テ私カニ抱腹  
 ニ耐ヘカリシト雖モ亦其親情ノ濃厚ナルヲ感セリ惟フニ愛郷ノ心ハ  
 人々無ルヘカラス此島民カ此大患ニ處レテ尙且郷ヲ愛スルモノハ所  
 謂接メハ都ニシテ彼ノ夫レ繁雜ナル都下ニアランヨリハ寧ロ反テソ  
 ハ氣樂ナルヲ感スレハナリ今ヨリ各島ノ爲メニ附ルニハ宜ク是等ノ  
 土着人ヲ保護愛育シ況ク教化ヲ加ヘテ其知見ヲ開キ而シテ勸ムルニ  
 殖産ノ事ヲ以テセンニハ大ニ島地ノ而目ヲ改ムルニ至ルヘシ内地人  
 ヲ驅テ而シテ之ヲ開カントスルカ如キハ大ニ策ノ得タルモノアラ  
 サルナリ嗚呼南洋中無人ノ島嶼多シ先レテ之ヲ開カハ我が有ナリ之  
 ヲ開カレムルニハ實ニ七島ノ人ヲ除テ他ニ在ルヲ見ス蓋シ島地ノ  
 患苦ヲ知ツ之ニ處スル事ニ然スレハナリ七島ノ人愚ナリト雖モ豈ニ  
 何ツ捨ツヘケンヤ

○第八 伊豆海中ニ女護島アリ

予輩之ヲ古老ニ聞ク日本ノ南洋中ニ一島アリ女護島ト名ク蓋シ島民  
 多クハ女子タルヲ以テナリト而シテ一夜濱行ニ出テ袋ヲ掲ケテ南風  
 ニ浴スル時ハ女皆テ孕ムト予之ヲ聞ケトモ其地ノ何レタルヲ知ラス  
 或ハ琉球ニ其島アリト云フ然ルニ今回幸ニ便ヲ得テ南洋ニ航シ其所

謂女護島ノ近ク伊豆海中ニアフントハ實ニ意外ナルニ驚ケリ予輩始  
 メ三宅島ニ上陸シ次ア八丈島ニ上陸シ親シク島民男女ノ容貌骨格ヲ  
 見又男女勞働ノ實況ヲ探リ併シテ其人口ノ比較ヲモ調査セラルニ特  
 ニ自ラ疑感ニ堪ヘサルモノアリタリ然ルニ歸島ノ後深ク之ヲ研究ニ  
 從事シ又他島ノ景況ヲモ調査セシムルニ始メテ我カ伊豆ノ七島ハ是レ  
 古老カ所謂女護島ナランコト悟リ疑團忽焉トシテ氷解スルヲ得タリ  
 今先ツ各島ノ人口ヲ調査シ男女ノ比較ヲ明ラカスヘシ

大島ハ人口四千六百三拾五人(明治十三年ノ調査ニ依ル)内男二千  
 百三十三人女二千五百〇二人ニシテ女ノ男ニ超過スルコト三百六十  
 九人ナリ

利島ハ人口二百四十八人内男百二十一一人女百二十七人ニシテ女ノ  
 男ニ超過スルコト六人ナリ

新島ハ人口二千六百四十二人内男千九百九十九人女千四百四十三人  
 ニシテ女ノ男ニ超過スルコト二百四十四人ナリ

神津島ハ人口千四百四十一人内男五百九十七人女八百四十四人ニ  
 シテ女ノ男ニ超過スルコト二百四十七人ナリ

三宅島ハ人口二千八百八十九人内男千三百〇五人女千五百八十四  
 人ニシテ女ノ男ニ超過スルコト二百七十九人ナリ

御倉島ハ人口二百五十七人内男百二十一一人女百三十六人ニシテ女  
 ノ男ニ超過スルコト拾五人ナリ

八丈島ハ人口八千八百三十八人(近年ノ調査)内男四千二百五十六人女四  
 千五百八十二人ニシテ女ノ男ニ超過スルコト三百二十六人ナリ  
 以上列記スル如クニシテ七島共ニ女ノ數ハ常ニ男ノ數ニ倍スルコト殆  
 ハト一割強ニシテ殊ニ島民中男子ノ身體骨格及容貌ヲ熟視スルニ頗



虚弱ニシテ顔色憔悴レ更ニ剛勇ノ氣象ナシ之ニ反シテ婦人ハ活潑  
 ナルト男子ニ優リ且能ク力役ニ堪ヘ産業ヲ勉メテ日夜忘ラス物貨ヲ  
 運搬スルニ至リテハ男子ハ僅ニ七八貫ノ物ヲ荷フテ頗ル艱苦スレト  
 モ女子ハ大約二拾貫目乃至二十二三貫目ノ物ヲ頂上ニ載キ峻坂危岸  
 ヲ快歩スルモ曾テ困苦ノ色ナレ肥料ヲ田圃ニ輸タスモ其桶ヲ頂上ニ  
 載キ取テ慮トセヌ加ルニ女子ハ男子ニ比スレハ最モ粗食ヲナレテ生  
 活スルト各島一般ニシテ男子ハ米食ヲナスモ女子ハ常ニ甘藷ヲ食ト  
 スト云フ而レテ男子ハ雇賃ハ一日大約十二三錢ナレトモ女子ハ僅ニ  
 五六錢トス其勞働ノ結果ヲ云フニ實ニ男子ハ利スル所ニ倍スルハ  
 益アリト聞ケリ  
 之ヲ以テ七島中各家ノ經濟ハ概テ婦女ノ頼ルカ如シ男子ハ僅ニ其幾  
 分ヲ補フニ過キサナリ殊ニ八丈島ノ如キハ彼ノ有名ナル絹布ヲ製

スル總テ婦女ノ手ニ成レルカ故ニ一戸ノ經濟ハ勿論租税ノ如キモ亦  
 皆婦女ノ力ニ據リテ支辨シ男子ハ更ニ之ニ關セサルナリ予嘗テ郷里  
 ニシテノ日或レ海邊ノ山村ニ遊フ此邊ノ女子勞働尤モ強ク嘗云フ馬  
 一匹ト亭主一人ヲ獲ヒ得ルモノハ女ニアラスト予當時之ヲ聞テ頗  
 ル其奇風ヲ感ヒシカ今此島ニ遊ヒ此風俗ノ珍シカラサルヲ知レリ嗚  
 呼七島ハ實ニ女人島ニシテ七島ノ經濟ハ眞ニ女子ノ手ニ在リ今日リ  
 後此女子等カ幾層ノ稱譽ヲ以テ陸ニ或ハ獲瀝製糸ノ業ヲ開キ而レテ  
 益機杼ノ業ヲ起シ男子ヲシテ海ニ漁業採藻ノ業ヲ興サシメナハ日ナ  
 ラスレテ我南洋ニ一大富源ヲ開クニ至ルヘシ女護島豈夫忽ニ視ルヘ  
 ケンヤ女護島豈夫忽ニ視ルヘケンヤ

○第九 七島ハ既ニ洗罪ノ地ニアラス

伊豆海中ニ星羅棋布スル所ノ七嶋ノ地ニ人民初メテ移住セシコハ其年曆遼乎トシテ詳カナラズト雖モ島中耆老ノ説ニ依レハ往昔伊豆天皇ノ御宇ニ當リ此ニ移住シタルモノナルカ如シ而シテ往昔ヨリ罪人ヲ遷補スルノ地ト定メラレタルノ事實ハ更ニ疑ヲ容ルヘカラス現ニ維新ノ際迄ハ數千ノ罪人各島ニ散居セリト云フ是ヲ以テ人々伊豆七嶋ヲ見テ單ニ罪人ノ配所トナシ更ニ日本々土ノ經濟ニ關係ナキ一般士ノ如ク妄想シ乘テ之ヲ顧ミルモノアラス必竟其地ノ實況ニ暗キハ致ス處ナリト雖モ亦人々利用厚生ノ大計ヲ知ラス爰如トシテ唯己ヲ利スルニ汲々タルヨリシノミ嘆スヘキハ極ト云フヘシ

古史ニ據ルニ七嶋ノ地古來人民割據シテ交通セス然レモ北條氏ノ相州小田原ニ起リ漸ク威ヲ關東ニ振フニ及テヤ終ニ伊豆ノ屬島トナリ爾後徳川氏ノ關東ヲ領シ漸ク愷柔ノ政ヲ布クニ及ンテ屢々諸島ノ風

俗ヲ巡視シ疾苦ヲ訪問シ務メテ救恤ノ法ヲ施シ以テ財ヲ興ヘ穀ヲ足シ且殖産ノ道ヲ論シ又屢々良材ノ種苗及穀采ノ種子ヲ栽培シ牛馬山羊ヲ放牧セシメ以テ産業ヲ勸誘スト雖モ各島積水相互ニ交通セス江戸ニ於テ一ノ島會所ヲ設ケテ各種ノ物産ヲ會市シ以テ之ヲ統治セシム而シテ大政一新ノ後始メテ自由交通ヲ許サレ足柄縣ノ所轄トナリ尋テ靜岡縣ニ屬シ航路漸ク開ケ隣交自由ナラサルコトアラスト雖モ島民ノ諸物貨ヲ販賣スルハ直ニ東京ニ至ルヲ以テ便益ヲ得ルコト多キカ故ニ遂ニ又東京府ノ所屬トナレリ因テ屢々勸業課員ヲシテ各島ヲ巡視シシメ專ラ島民ヲ諭シ以テ水陸ノ物産ヲ増殖セシメシカ爲メニ家畜及良樹ノ種苗ヲ移植セシメタリ

今七嶋ノ物産ヲ分テ海陸ノ二部ト定メ各島ニ於テ天賦固有ノ物産ヲ比較セハ即チ大島利島御倉八丈ノ諸島ハ陸産ニ適シ新島神津三宅ノ

三島ハ陸産ニ乏シシテ海産ニ富メリ但シ陸産ハ昔山林ニ生スル所  
 ノモノコレヲ耕地ニ産スル所ノ米穀ハ甚ク僅少ナリ故ニ米麥ノ如キ  
 ハ悉ク之ヲ内地ニ仰カサルヲ得ス今予輩ハ各島山林ノ土質及地勢ヲ  
 觀察スルニ專ラ樹木ヲ栽培スルニ利アリテ爾水禾穀ヲ耕種スルニ適  
 セサルモノ、如シ要スルニ其土質ハ概テ火山石火山灰ノ混化シタル  
 モノ、ミニテ有機物ニ乏シシ養土ノ化熟スルニ至ルハ幾多ノ歲月ヲ  
 要スルヲ以テ縱令樹木ノ栽培ニ利アルモ未タ米穀ヲ耕作スルノ度ニ  
 適セサルニヨルナリ故ニ諸島ノ爲メニ計ルニ務メテ有用ノ樹木ヲ  
 栽ニ漸次養土ヲ増殖ヒシハ而後稔穡ヲ施スニ非レハ終ニ完全ノ收穫  
 ナ得ルヲ能ハサルハ實ニ灼乎トシテ明了ナリ

海産ハ魚類及海草ノ二種ニシテ諸島ノ沿海皆ナ之アリト雖居悉ク之  
 ナ産出スルニニアラス其事ヲ此ヲ以テ主トスル所ハ新島神津ノ二島ニ

在リ是レ其地タル耕地山林以テ衣食ヲ謀ルニ足ラス唯海濱漁釣ノ生  
 計ヲ營ムヘキモノアレハナリ然レトモ大島利島三宅御倉八丈ノ五島  
 ノ如キハ常ニ農耕山林ノ業務ヲ事トシ僅ニ其餘力ヲ以テ自家ノ食料  
 ナ得ルニ過キス之ヲ要スルニ七島ノ海中求ムヘキ漁利ナキニアラス  
 收ムヘキノ收穫ナキニアラサルナリ唯之ヲ務メサルニヨリテ得ル所  
 ナキナリ若シ之ヲ務ムルニ於テハ七島ノ經濟隘然トシテ立テ縱令絶  
 海ニ孤立スルトモ晏然トシテ更ニ患ナカルヘシ決シテ又流罪ノ地ニ  
 アラサルヲ信スルナリ海島ノ男女夫レ之ヲ勉メ日夫レ之ヲ勉メ日

○第十 鳥島ノ移住ニ感アリ

明治九ハ既ニ伊豆七島ノ洋中ヲ過キ去リ針路ヲ正南ニ取リ夜半青ケ  
 島ヲ傍觀シ渺々タル南洋ニ入ル實ニ明治二十年十一月五日ナリ此日

天氣清明風濤穩ニシテ正午ヲ報スルノ頃ヨリ一種ノ水禽群飛レ來  
 テ船楫ヲ掠メ去ル共數幾百ナルヲ知ラス忽チ見ル前路遙ニ島影ノ茫  
 ヲルヲ船ノ進ムニ從ヒ山色愈々明カナリ午後三時ニ至リ其島邊ニ  
 近キ洋中ニ鎖ヲ投セリ予等甲板上ヨリ之ヲ遠望スルニ唯ク是一塊ノ  
 島阿周六出餘山ニ樹木少ナク僅ニ矮草短茅ヲ生スルニ而シテ淺谷  
 平原ヲ見ス加フルニ海岸ハ千尺ノ斷崖ニシテ奇石怪巖一面ニ起伏レ  
 泊船ノ便更ニナキカ如シ唯無數ノ白信天翁ハ山上山下處トシテ巢棲  
 セサルハナク遠ク之ヲ望メハ霜雪ノ如ク悲鳴セテ天ニ翔ルモノハ恰  
 如衆蚊ニ似テ是乃チ島島ナリ明治丸ノ茲ニ碇泊スルモノハ東京ノ  
 人玉置半右衛門氏ハ丈島ノ云フノ一行此島開拓ノ志アルカ爲メナリ日  
 西天ニ没スルノ頃一行十一人漸クニ上陸シ船舟本船ニ歸ル寂寂  
 ナル島中炬火暗々滅セテ又明カナリ蓋シ怒濤ノ浮沈其火光ヲ隱顯ス

ルニ依ル予輩之ヲ觀テ感嘆數次徐々室ニ下レハ乘客ノ評判區々ニシ  
 テ殊ニ皆該島移住ノ望少ナキヲ憂ヘサルモノナシ於是予輩私カニ意  
 ヘラク事ノ成敗ハ豫メ論スヘキニアラス語ニ曰ク精神一到何事不成  
 又曰人事蓋棺而定ト移住ノ結果如何ニ至リアハ余輩白面ノ書生敢テ  
 容喙スヘキニアラス唯感ス此一行カ銳意斷行此寂寥タル無人ノ島  
 嶼ニ移住シ以テ成ス所アラントハ請フ夫レ之ヲ思ヘ屋ヲ造ルヘキハ  
 木材ナク食フヘキハ穀果ナク炊クヘキハ薪炭ナク唯ク一岩洞ノ  
 在ルアリテ僅ニ豎風蠻雨ヲ防クニ足リ信天翁ト其卵ヲ拾ヒ魚類ヲ捕  
 ヘテ漸ク鐵鍋ヲ鑿スルニ足ルト其艱難ニ處スルノ心事察スルニ堪ヘ  
 たり思フテ茲ニ至レハ誰カ啼泣ニ堪ヘサラン知ラズ王城ノ下金殿五  
 樓ニ起臥シ美酒佳肴ニ飽キ醉フテ美人ノ膝ニ眠リ懼メテハ車馬ニ  
 鞭チ東西ニ風流ヲ尋テ更ニ他ノ疾苦ト痛痒ヲ知ラサルモノト比セハ

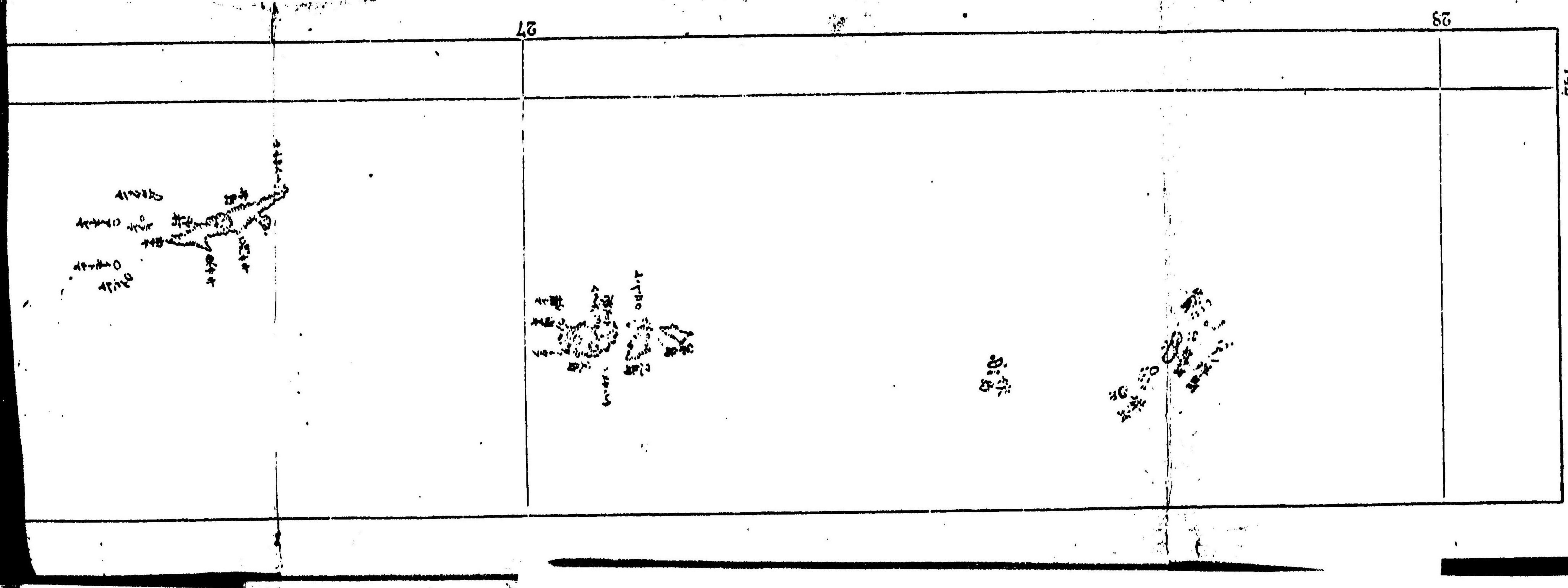
其世ニ遊スルノ經庭果シテ如何シヤ人生ノ幸不幸固ヨリ己ムヘカラ  
スト雖モ若シ此輩ヲレテ子輩ト行ク同シ而シテ之ヲ見レシメナハ將  
亦如何ナル感情ヲ惹起スルカ心ヲランモノハ必ス羞死スヘキナリ心  
ヲランモノハ必ス羞死スヘキナリ

因ニ云十二月下旬玉置氏歸ルニ及ヒ之ヲ聞クニ最初ノ艱難ハ兼ヨ  
リ名狀スヘカラス然レモ幸ニシテ船ヲ泊スヘキ港灣アリ耕スヘキ  
平地アリ且鰯魚及魚類多ク自信天壽ヲ食フヘシ爲メニ大ニ一行ヲ  
慰ムルヲ得タリト同氏ノ爲メ大賀スヘキナリ

○第十一 小笠原群島ノ地形

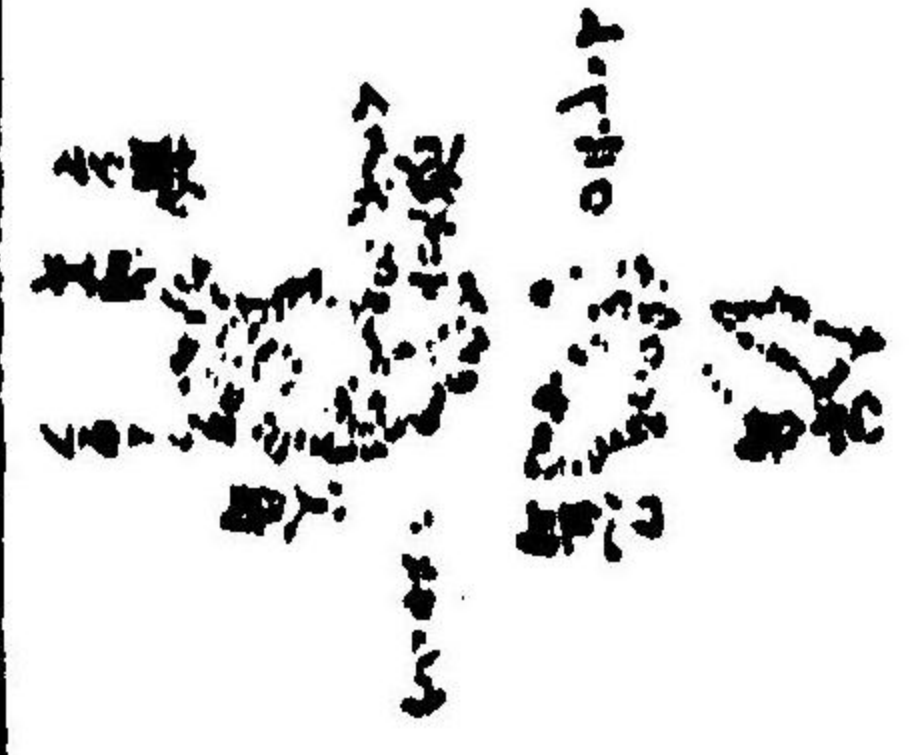
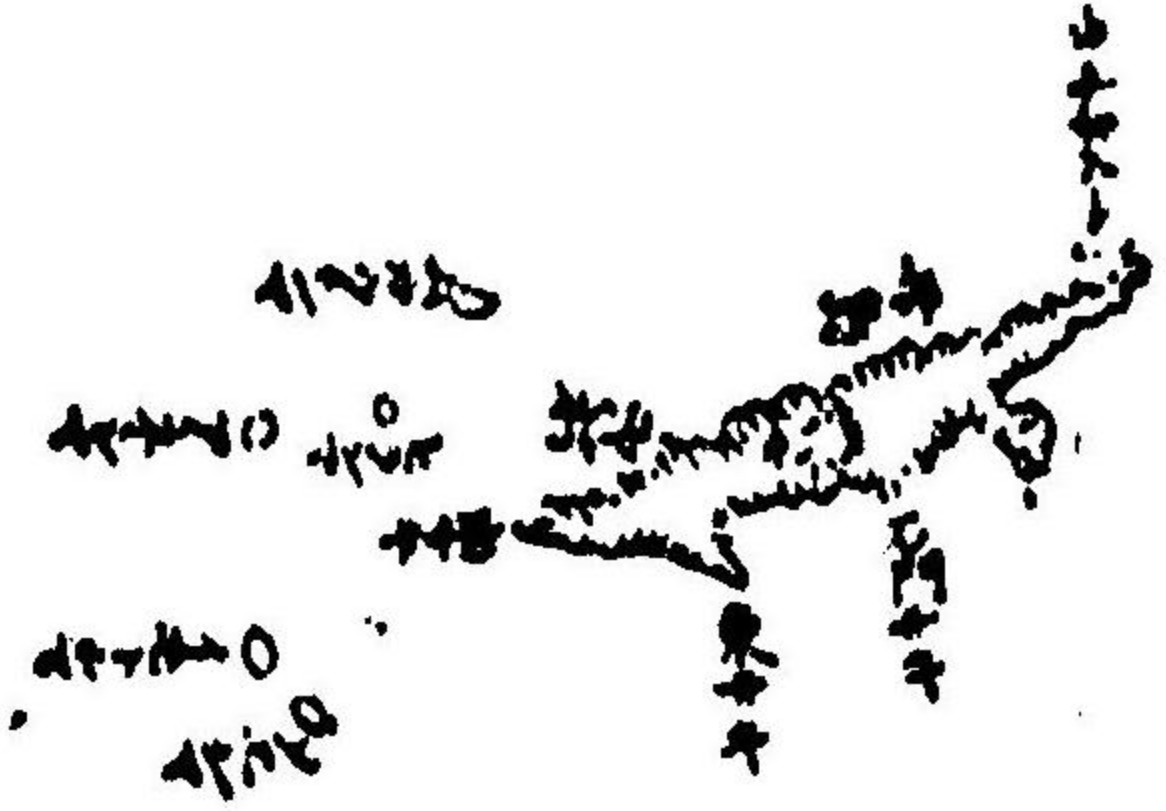
小笠原群島ハ北大平洋伊豆八丈島ノ南微東ニ方リ海路三百八十二哩  
内地東京品川灣ヨリ五百三十有餘哩ヲ距ツ北緯廿六度三十分ニ起リ

142 小笠原島界圖



27

28



SH



廿七度四十五分ニ到リ東經百四十二度ニ起リ同度廿分ノ間ニ散布スル群島ノ總稱ナリ諸島南北ニ亘リ大小二十餘島アリ其最大ナルモノヲ父母兩島トス兄弟姉妹諸島ト數多ノ小島ヲ含有ス之ヲ別テ父母母島姉島ノ三群嶋トス

父島群嶋 三群嶋ノ中央ニ在リ父島南ニ位レ兄弟島ノ二島其北ニ在リ其他東島西島南島北島等周邊ノ數小嶋ヲ併セテ之ヲ此諸島ノ本部トス

父島 又本島或ハ北島此島ノ南島ト稱スルトモ呼ヘリ洋人ハ之ヲピールト稱ス北緯二十七度〇五分東經百四十二度十八分ニ位レ南北二里弱東西一里十町周回十五里半強アリ此群島中主眼ノ島ナリ島ノ西北隅ニ一大良港アリ之ヲ大港又二見港ト名ク此全島貴重ノ用ヲナスハ蓋シ此良港アルカ故ナリ



村落 大村ハ港ノ西北岸ニアル平地ニシテ近年茲ニ島廳ヲ設ケ  
 各種ノ官舎アリテ人戸モ亦少ナク殊ニ海岸ニハ波止場ヲ築  
 キ貨物ノ出入ヲ便ス岸ニ樹木繁茂シ歸化人ノ家アリ園圃少カラ  
 ス濱汀平沙ニシテ植樹ノ波濤ニ打揚ケラル、モノ多シ○扇浦ハ  
 港ノ東南隅ニ在ル灣ニシテ島ノ中央ニ位ス岸前ノ海中ニ要岩アリ  
 リ扇浦要岩皆形ヲ以テ名ク文久巡視ノ時依役所及人家ヲ創設セ  
 レ地ニシテ傍ノ丘上ニ其頃ノ開拓碑アリ明治九年内務省出張所  
 及官舎ヲ建テ所ノ地ニシテ戸口今ニ楯比セリ○境浦ハ港ノ東  
 岸ナリ與村洲崎ノ境ナルヲ以テ名ク歸化人ノ家アリ○與村ハ港  
 ノ東北隅ニアリ平坦ニシテ歸化人ノ家アリ岸ニ一列ノ樹陰アリ  
 テ前岸ハ淺斥ナリ○清瀬ハ大村ノ東一丘ヲ隔ツ川流アリ清冽ニ  
 シテ飲用スヘレ故ニ名ク人家アリ曾テ米國使節彼理氏カ船舶碇

泊ノ爲メ擇ヒタル地ナリト云フ○洲崎ハ港ノ南端ニシテ砂濱廣  
 レ西面野羊島ニ連リ左右大洋ニ向テ人家アリ○北袋澤 ハ扇浦  
 ノ南ニアリ東西十二三町南北五六町ノ平地ニシテ三面山ヲ帯ヒ  
 西縦ニ海ニ接レ地勢袋ノ如ク故ニ名ク中央ニ八條ノ溪流會注ス  
 ル一川アリ八瀬川ト名ク本島中最モ平坦ノ地多クシテ地味肥沃  
 園圃最多シ○南袋澤 ハ北袋澤ノ南一岩山ヲ隔テ、アリ地勢相  
 似テ山間ニ狭レル平地ナリ小流アリ海邊ニハ歸化人ノ家アリ○  
 南崎 ハ本島西南ノ端ナリ脚ノ北岸ヲ南崎村トス人家アリ近頃  
 牧場ヲ此ニ開ク○二子村 ハ二子山ニ在リ○初寐浦 ハ父島東  
 岸ノ小灣ニシテ文久測量ノ士官始メテ露宿セシカ故ニ名トス  
 山嶽 旭山ハ與村ノ南ニアリ島中第一ノ高山ニシテ高サ百十丈ア  
 リ文久年中幕府ノ海船威陽丸若港ノ日首ノテ日本ノ國旗ヲ此嶽

樹ツ故ニ名トス○初寐山夜明山 ハ扇浦ノ北初寐浦ノ背ニア  
 リア東丸山ニ對ス○振分山 ハ扇浦ノ西南ニアリ扇浦洲崎袋澤  
 ノ路此麓ニテ分ル故ニ名トス二見港ノ全景ヲ望ミ眺望尤モ絶美  
 ナリ○高山 ハ南袋澤ノ南方ニアリ○大村山 ハ大村ノ背ニ在  
 リ又大根山三日月山ノ稱アリ○鎗山 ハ旭山ノ南ニアリテ高サ  
 相伯仲ス亦形ヲ以テ名シ丸山吹割山其南ニ連レリ○納涼山 ハ  
 扇浦連樹谷ノ傍ニアリ上ニ明治十年建ル所ノ開拓碑及氣象臺等  
 アリ○二子山 ハ扇浦ノ西四町余ノ處ニアリ○棚挽山 ハ二子  
 山ニ列リ今多ク咖啡樹ヲ栽植ス○桑ノ木山 ハ初寐山ノ傍ニア  
 リ桑樹多シ故ニ名トス○丈蘭山 ハ扇浦ノ西北ニアリ多ク丈蘭  
 ヲ生ス故ニ此名アリ○晴雨山 ハ時雨瀧ノ上ニアリ

河渠 八瀬川ハ源ヲ布瀧ニ發シ北袋澤ノ中央ヲ流ル、一川ニシテ

八條ノ溪流此ニ會注ス故ニ名トス本島第一ノ川流ニシテ幅十四  
 間深サ小舟ヲ通スヘシ水流甚タ屈曲シ西海口ノ沙中ニ伏流ス此  
 海口ヲ小港ト唱マ○南袋澤川 ハ南袋澤ニアリ西北ニ流レテ海  
 ニ入ル○扇浦川 ハ源ヲ連樹谷ニ發シ扇浦ヲ東流シテ海ニ注入  
 ス○清瀬川 ハ大村ノ東ニ一岡ヲ隔テ、流ル、川ニシテ清冽飲  
 用スルニ足ルヘシ故ニ名トス

瀑布 屏風瀧ハ旭山ノ東南ノ麓ニアリ○時雨瀧 ハ大蝠嶋谷ニア  
 リ高サ六丈幅六間直下織絲ノ如ク飛沫人衣ヲ濡ス故ニ此名アリ  
 ○常世瀧 ハ北袋澤ノ東南ニアリ傍ニ黎欒樹アルヲ以テ名シト  
 云フ○布瀧 ハ時雨瀧ヲ距ル數十歩ニアリ高サ六丈一條ニ注下  
 ス八瀬川ノ源ナリ○初寐瀧 ハ初寐山ニアリ○連樹瀧 ハ連樹  
 谷ニアリ

港灣 二見港(又大)ハ島ノ西北隅ニ在ル一大港ナリ港内ノ北岸清瀬  
 ノ前コニ尖岩アリ頗ル伊勢ノ二見浦ノ岩ニ似タルヲ以テ此名ア  
 リ北ニ一岬ヲ廻ラシ灣ヲナス東西凡ソ廿町南北凡ソ廿五町港口  
 西ニ向ヒ廣サ拾町深サ廿余尋アリ港口ノ中間ニ暗礁アリテ船舶  
 ノ出入ニ障害ナルヲ少ナカラヌ南方野羊山ニ沿フテ入港スレハ  
 危険ナシトス此礁ノ西海深ク風波極メテ穩カナルヲ以テ此港碇  
 泊ノ最ヤ好處トス灣ノ北端ヲ大村トレ南端ヲ洲崎村トス西南ノ  
 海中ニ大巖アリ形ヲ以テ烏帽子岩ト名ク○宮ノ濱 ハ大村ノ山  
 背ニアリ北向ノ一小灣ニシテ平岡沙濱ナリ延寶中島谷氏大神宮  
 ヲ祭リシ地トテ此名アリ宮ノ濱ノ東ニ釣濱アリ○巖港(又巖)  
 ハ島ノ東南巖岬ノ北ニアリ一岬東北ニ出テ灣ヲナシ灣内深ク東  
 西凡ソ九町東風ノ外波高カラサレテ周邊皆斷岸ナリ港口南ニ向

ヒ廣サ三町アリ

岬角 巖崎ハ島ノ東南端巖港ノ南ニアリ斷岸聳立テ邊海狂浪怒濤  
 常ナク頗ル險惡ナリ○南崎 ハ島ノ西南端ニアリ西ニ南島ヲ見  
 遙ニ母島ト相望ム邊海中無數ノ岩礁聳立テ其狀或チ東スルカ如  
 シ○象ヶ鼻崎 ハ小港ノ北ニアリ鰻頭ヶ崎ハ南ニアリ  
 屬島 兄島ハ宮ノ濱ノ北ニ接シ長サ一里七町幅一里四丁周回四里  
 五町ナリ父島ト海峽僅ニ七八町ヲ隔ツ海流最モ深クシテ樹木稍  
 ヤ少ク西背ニ見返リ山アリ島中ノ高山ナリ父島ヲ一望スヘシ故  
 ニ名クト云フ其他北見山頂平山乾山等アリ東南岸ニ沙濱アリ野  
 陣ヶ濱ト稱ス文久巡視ノ時野陣セシ處ナリ流水ノリ人住スヘシ  
 ト雖モ船舶入レク泊シ難シ西岸ニ池ノ浦アリ周邊皆山ニテ小岬  
 東南ニ出テ灣内水深ク崖間ニ滑列ナル瀑布アリ海ニ落ツ故ニ名

○弟島 ハ父島ノ北ニ接レ長サ一里余幅二十町周回三里アリ  
 四而絶壁巖ツヘカラス鹿多シ山嶽ニハ野陣ヶ嶽港灣ニハ野陣ヶ  
 岡アリ○東島 ハ父島初寐浦ノ東微北拾八町ニアリ周回三拾町  
 全島懸崖ニシテ近ツキ難シ○西島 ハ父島ノ東北貳拾町兄島ノ  
 西拾四町ニアリテ周回二十八町アリ島上ニ赤土ノ平地アリ父島  
 ノ人嘗テ圃ヲ試ミシテアリト云フ○南島 ハ古名ツ袋港島ト稱  
 ス父島南崎ノ西八町ニアリ周回廿五町許アリ全島皆鹿角狀ノ岩  
 石アリ草木生サス島上沙地中ニ池アリ一ハ潮水ニ通シ一ハ平  
 潭ナリ池邊ノ沙石極メテ潔白ナリ港灣アリ袋港ト名シ島ノ南端  
 ニアリ口狭シ古時一池ノ裂ケテ海ニ通セシモノナラント云フ○  
 北島 ハ弟島ノ東北ニ在リ周回十町許亦斷岸ナリ○野羊島 ハ  
 父島洲崎村ノ西一町ニアリ淺沙ヲ距テ、本村ト相連ル全地石嶽

ナリ曾テ多ク野羊ヲ棲シム故ニ名ク今全ク棲息スルモノナシ東  
 ニ聯リテ飯盛山アリ其山高カラスト雖ハ尖圓形ヲナシ入港船舶  
 ノ標準トナスヘシ○孤島 ハ兄島瀧ノ浦ノ西北ニ在ル小島ナリ  
 形ヲ以テ名ク

母島群嶼 三群嶼ノ南部ヲ占メ父島ノ南微西十三里餘ニ在リテ遙  
 ニ相望ムヘシ母島北ニ居リ姉島妹島姪島等ノ數小島其南方ニ散  
 布シ一群嶼ヲナス

母島 或ハ南島ト稱ス洋人ハ之ヲトリスボロウト名ク北緯二十六  
 度三十七分東經百四拾二度廿分ノ間ニアリ南北四里東西二十七  
 町周回十里許アリ全島甚シキ絶壁ニシテ東岸ハ殊ニ懸崖多シ地  
 味父島ニ比スレハ肥沃氣候更ニ温暖ニシテ草木ヨク繁茂シ山中  
 樹木鬱蒼タリ然レモ長港ナキヲ以テ全島ノ用途ニ父島ニ劣リ住

尺モ亦少ナレ父島ヲ距ツルヲ十三里餘ナリト云

村落 沖村 ハ沖村港ノ北岸ニ在リ乳房劔先岡山ノ谷ニシテ一川  
アリテ海ニ入ル全島人ノ居住シテ耕作スルノ地ハ概テ此地ニレ  
テ此地モ古時我國人大神宮ヲ祀レリト云フ○脇濱 ハ沖村ノ西  
脇ニ在リ鮫魚多キカ故ニ又鮫浦ト名ツク山麓ニ平地アリ○南崎  
ハ島南ノ極端ニシテ沖村港ヲ抱キ少ク西ニ向フ近年茲ニ居  
ヲ營ムモノアリ

山嶽 乳房山 ハ沖村ノ北ニアリ草樹繁茂シ山形四望皆同シク乳  
房ノ狀ニ似テ高キ四十二丈六尺アリ島中ノ高山トス○劔先山  
ハ乳房山ノ南ニ在テ沖村ニ近シ乳房山ニ次キ高峻ニシテ登ル  
ヘカラス劔尖ノ狀ニ似テ○小富士山 ハ南浦ノ東北ニアリ形  
粗富士山ニ似テ

河渠 沖村ニ一流アリ海ニ入ル島中ノ大川ナリ

港灣 沖村港 ハ島ノ西南隅ニ在ル小灣ナリ東西凡六町南北拾町  
餘深サ五尋アリ港内靜波ナレハ大船ハ入り難シ常ニ港外南方六  
七町ニ投錨ス然レモ亦久レク泊レ難シ○東港 古名 ハ東北隅ニ  
シテ石門岬ト北隅一岬トノ間ニアリ灣内波高シ南方ハ皆懸崖ナ  
レハ北方ハ稍ヤ平ナリ暗礁多クシテ船泊スヘカラス○北港 ハ  
島ノ北隅ニ在リ灣口西北ニ向ヒ恰モ父島南崎ト相對ス灣内波荒  
ク大船泊レ難シ

岬角 戊亥崎 又北 ハ島ノ西北端ニシテ北港ヲ擁シ海ニ斗山スル  
十町餘兩岸斷崖ナリ岬頭ニ兜岩アリ形ヲ以テ名ク○南崎 ハ島  
南ノ盡頭ニシテ沖村港ヲ抱キ少ク西ニ向フ渤溟極メテ險惡ナ  
リ○東崎 ハ島ノ東端ニシテ石門崎ト南北相對シ共間一大灣ヲ

ナス絶壁ニシテ船舶近ツキ難ク石門崎ハ島ノ東岸東港ノ南端ニ  
 アリ三石門アリテ海潮ヲ通ス頗ル奇觀ナリ  
 屬島 姉島 ハ平島ノ南半里ニ在リ周圍十二町○妹島 ハ姉島ノ  
 東一里餘ニアリ周圍一里五町○姪島 ハ妹島ノ東北十町ニアリ  
 周圍三十五町以上三島皆四面絶壁ニシテ樹木繁茂セリ○向島  
 ハ沖村ノ西南一里餘ニアリト相對ス周圍一里十町アリ全島大半  
 秃ニシテ絶壁ナリ○平島 ハ沖村ノ南一里十四丁ニアリ此間鯨  
 鯨來往最モ多シ周圍三十町稍平坦ニシテ耕地トナスヘレ其東北  
 ニ接シテ二子島丸島アリ

婿島群嶼 洋人バアレ草島ト稱ス父島ノ北十四里ニアリテ分明ニ  
 相望ムヘン北緯二十七度二十九分ヨリ起リ同度四十五分ニ至リ  
 東經百四十二度十五分ヨリ同度二十分ノ間ニアリ本島ヲ婿島

ト云ヒ洋人之ヲケイター島ト稱ス長サ一里余岩島ニシテ近傍  
 ニ小岩礁多シ其東南ニ嫁島アリ亦一岩島ナリ又媒島ト稱スルア

○第十二 全史記沿革

後陽成天皇ノ御宇文祿二年小笠原民部少輔貞頼ナルモノ南洋ニ航シ  
 始メテ此諸島ヲ檢出セリ貞頼ハ信濃深志ノ城主小笠原長時ノ曾孫ナ  
 リ長時天文ノ末武田信玄ニ被サレ貞頼其父長元ト共ニ織田豊臣徳川ノ三氏ニ歴任シ  
 屢戦功アリ文祿元年朝鮮ノ役ニ從ヒ軍檢使ナリ歸陣ノ後徳川家康ノ  
 命ニ貞頼屢戦功アレヒ未タ本地ニ歸ラス家從ヨリ其祿ニ不足ナルヘン  
 此度然ルヘキ島國アツハ手柄次第中立ツヘント證狀ヲ附セルニヨリ  
 文祿二年家康ニ從ヒ東歸ノ後南海ニ航シ伊豆八丈ノ南ニ沿テ三島ヲ

養見ノ巡檢セルニ土地廣ク人家ナレ開國最上ノ地タルニヨリ每島ニ  
 名稱ヲ付シ歸テ其地圖物産等ヲ獻セシカハ家康大ニ其功ヲ賞シ總稱  
 ヲ小笠原島ト賜ヒ永ク之ヲ領セシム後貞頼廢島中ニ來往レ物産ヲ收  
 ヲ又木標ヲニケ所ニ建ツ一ニ曰ク日本國天照皇太神宮地島長源家康  
 公幕下小笠原四位少將民部少輔源貞頼朝臣ト一ニ曰ク日本國天照皇  
 太神宮地島長登原將軍幕下小笠原民部少輔源貞頼朝臣ト以テ吾版  
 圖ヲ表ス貞頼ノ子民部長直ニ至リテモ尙渡海セシカ後病シテ流瀆シ  
 海路遠送險惡コレヲ且當時外交ノ禁嚴ナルヲ憚リ文祿二年ヨリ三十  
 三年ヲ歷寛永二年ニ至リテ渡海止ム後其島人跡無キヲ以テ之ヲ人無  
 島ト唱ヘ又内地ヨリ巽位ニ在ルヲ以テ巽無人島トモ呼ヘリ寛文九年  
 冬阿波淺川浦船頭勘左衛門等同時紀伊蜜柑船々頭長左衛門等各數人  
 此島ニ漂流ス後又延寶ノ初紀伊ノ蜜柑船遠江難ヨリ此島ニ漂流レ歸

ナ事ヲ官ニ白ス官將ニ之ヲ巡檢セントシ長崎奉行牛込忠左衛門隆鎮  
 ニ命レ清人ニ富國番船ト號スル五百石積ノモノヲ遣營セシメテ伊豆  
 ニ送リ長崎ノ人島谷市左衛門ヲ船長トシ其子太郎左衛門ヲ從ヘ中尾  
 莊左衛門ヲ監督トス三人皆天文地理航海ニ熟ス其他江戸小網町ノ松  
 大工八兵衛等三十八人童旅資糧ヲ賜ハリ延寶三年閏四月五日ニ下田  
 港ヲ出帆シ三宅八丈ヲ歷テ終ニ此ニ到リ諸島ノ大小度數ヲ測リ地名  
 ヲ附シ地圖ヲ製シ島中ニ天照太神八幡春日ノ三神ヲ勸請シ其社ニ大  
 日本ノ内ナリト記シ雖五隻ヲ放チ奇木異草珍禽怪麟ヲ收メ滯島一月  
 間ニシテ六月五日島ヲ發シ同月下旬下田ニ歸リ事由ヲ官ニ白ス將軍  
 命シテ其物産ヲ屏風ニ畫カレシムト云フ享保六年六月遠江荒井ノ船頭  
 善八等明年秋同左太夫等各數人此ニ漂到ス當時官再檢ノ說アリシニ  
 同十二年（寛永三年後）六月彼ノ長直ノ孫孤人宮内貞任ナルモノ老中松

平伊賀守ニ無人島ハ舊領ナルニ寛永二年ヨリ中絶ニツキ今度其地ハ  
 渡海申度旨ヲ乞フ町奉行大岡越前守吟味ノ上明年五月勝手次第ニ相  
 越スヘシ無人ニシテ開拓ニ便ナラスハ爲メニ人ヲ移スヘレト免許ヲ  
 得大坂ニテ三百石積ノ船ヲ支度レ同町奉行鈴木飛彈守ヘモ届ケ同十  
 五六年ノ頃出帆セリ貞任カ孫ヲ民部ト稱ス當時其談ニ四年ヲ歴レモ  
 歸ラスト蓋シ漂流セシナルヘシ此後渡海又止ム元文元年正月江戸據  
 町ノ船戸善助等同四年三月江戸堀江町ノ船頭富藏等天明五年正月土  
 佐赤岡浦船頭源右衛門等同八年十二月大坂北堀江ノ船頭備三郎等寛政  
 二年六月薩摩志布子浦ノ船頭榮右衛門等皆此島ニ漂流レ其中五六年  
 或ハ七八年或ハ廿年ノ久シキカ間滞留スルモノアリ或ハ死レ或ハ歸  
 ル凡ソ前後漂流スルモノ歸レハ必ス事ヲ官ニ白ス漂民ノ言皆大同小  
 異前後經庭アルナレ寛政年間官本草家田村元長ニ命レ藥草ヲ伊豆

七島ニ探ラシム時ニ老中松平越中守元長ニ内命レ八丈澤在中風浪ヲ  
 窺ヒ往テ此島ヲ探ラシム然レモ元長終ニ便宜ヲ得スレテ歸ル是ヨリ  
 先天明五年仙臺ノ林友直(平字)三國通覽ヲ著シ海防ヲ説キ末ニ此島ノ  
 事ヲ記シ開拓ノ利ヲ唱フ是當時此島ニ慷慨セシモノ、初メナリレカ  
 友直因テ禁錮ヒラル其後此島ノ事ヲ唱フル者ハ友直ト同時ニ高松ノ  
 平賀國倫(通稱)アリ天保九年羽倉外郎(號)伊豆七島ヲ巡回シ此島  
 ナ探ラントシテ果サス其明年田原ノ渡邊定靜(通稱)高野長英等モ此  
 島ノ事ヲ談シ併ヒテ海外ノ事ヲ言テ聞セラル同十三年東條信辨(號)  
 伊豆七島全圖ヲ著シ併ヒテ此島海防ノ事ヲ説キ亦之ニ依テ聞セラ  
 ル

歐米人ノ此島ヲ知リシハ七八十年前獨逸學士クラップロット佛國學士ア  
 ペルレムーサ等カ著書中ニ此島ノ事ニ就キ三國通覽等我國人ノ諸説



チ舉ケタルヲ其初トス其此ニ到リシ年月ノ詳ナルハ文政六年米國ノ  
 鯨船長コツプギンカ母島ニ來リ白ラ初發見トシテ其島及碇泊ノ港ニ  
 己ノ名ヲ命セルヲ初トス是ヨリ歐米人モ一般此島ヲ確知セリ同八年  
 英國ノ一鯨船スヅプライ號ニ見港ニ到リ一樹ニ一板ヲ釘シ來舶ノ事由  
 ヲ記シ去ル<sup>後</sup>之<sup>見</sup>出ス文政十年英國政府ノ測量船長ビ<sup>ト</sup>チ<sup>ニ</sup>此近海  
 ニ來テ此島ヲ探リ初メ母島ニ向ヒシカ風潮逆ナリシカハ父島ノ二見  
 港ヲ留テ彼六月九日此ニ泊シ遍テ諸島ヲ測量シ亦白ラ初發見トシ父  
 島辰巳島二見港兄島埴浦弟島等へ今ノ洋名ヲ付シ母島ハコッフィンノ  
 發見ヲ知レド未タ島名ヲ付セスト<sup>更ニ</sup>マ<sup>リ</sup>群島ト名ケ又北ナル  
 諸島ハバアレ、ク<sup>イ</sup>アル等ノ名ヲ命セテ<sup>リ</sup>皆當時有名ナル人物ノ名ニ  
 取レリ又此時人跡ナケレハ直ニ取テ英領トシ其事由ト年月ヲ銅版ニ  
 刻シ洲崎ノ一樹ニ貼付シ傍ニ國旗一旒ヲ置ケリ<sup>山版ハ今ニ歸化人之</sup>

ノ故ハ年久シクシテ風雨<sup>ビ</sup>チ<sup>ニ</sup>來舶ノ八月前ニ英國ノ一鯨船此島ニ  
 難破シ其水夫二人此ニ在レリト云フ<sup>ビ</sup>チ<sup>ニ</sup>ハ六月十五日二見港ヲ  
 發シ再ヒ母島ニ到ラントシカ風候亦惡シテ終ニ北方ノ群島ヲ測量  
 シテ去レリ其明年ニ魯國海軍船長ル<sup>ッ</sup>ケ<sup>ナ</sup>ル者亦此ニ到リ取テ魯領ト  
 命シ亦一樹ニ一板ヲ附シテ去ル而シテ西班牙、葡萄牙、和蘭等ノ航客ハ  
 己ニ之ニ先テ早ク此ニ到リレト見ヘタリ然レド未タ殖民セレモノナ  
 カリヤ此古來無人ノ島ニ人ノ初メテ移住セルハ實ニ天保元年ノ夏以  
 太利人マザ<sup>ロ</sup>ナルモノ頭人トナリ米人セ<sup>ー</sup>ホ<sup>リ</sup>、チ<sup>ヤ</sup>ヒ<sup>ン</sup>英人ミ<sup>ル</sup>シ  
 チ<sup>ヤ</sup>ム<sup>フ</sup>補人ワ<sup>ロ</sup>ン<sup>ソ</sup>ン等五人布哇島ヨリ其島人男女數人ヲ伴ヒ父  
 島ニ移ル是現在住民ノ始ナリ天保十年十一月陸奥氣仙郡小友浦ノ船  
 頭三之亟等數人鹿島島ヨリ漂流シ翌年正月二見港ニ着シ島人ノ恩遇  
 ナ得テ三月下總へ歸ル同十三年マ<sup>ゼ</sup>ロ再ヒ布哇島ニ往來シ開拓ノ事

ナ計ル時ニミルレテヤムフハ既ニシアマ島ニ移テ後他ハ皆死セリ  
 ホリ獨存セリ嘉永元年日本船兄島ニ漂到レ經過スル所ノ佛人其水夫  
 五人ヲ二見港ニ送り厚ク待テ内地ニ歸ラシムト同二年米國桑港ト  
 支那間ノ往復船屢此ニ泊シ其夏英使馬ノ旗ヲ掲ケタル岡梶船歐日此  
 ニ滞留シ島人セリボリヲ襲ヒ其金錢妻孥ヲ掠メ去ル此他嘉永年間英  
 米測量船屢此ニ至レリ嘉永六年米國使節彼理我日本ニ來ルノ前先ツ  
 琉球ニ泊シ更ニ此島ヲ探ラント自ラ漁船帆船二隻ヲ率ヒ二見港ニ到  
 リ彼七月十四日ヨリ四日間滞留シ暹ク父島兄島ヲ探リ碇泊ノ爲メ清  
 瀾ノ一地ヲ買ヒ牛羊ヲ放テ島人ニ租賃ヲ分與シ去ル同年十月彼理琉  
 球ヨリ再ヒ別將ケルリテ此島ニ遣ルケルリ先ツ父島ニ到リ島人ノ形  
 情ヲ究メ更ニ母島ニ行キ島位ヲ測量シ當時無人ナリシカハ彼理ノ命  
 ニ因リ取テ米領トシベリリノ名ヲ改メコップン群島トシ其母島沖村

群島向島姉島妹島等へ今ノ洋名ヲ附シ銅版ニ事ヲ記シテ沖村西北岬ノ  
 一樹ニ付シ更ニ一板ト一箇中ニ此島コップンノ發見ニ係レル實記ヲ納  
 レタルモノトヲ地中ニ埋メテ去ル此歲島人自ラビニ島殖民ト號シ  
 新ニ憲法ヲ製レセリボリヲ頭官トシマトレ及ヒニツナルモノヲ副官  
 トス蓋シ竊ニ彼理ノ授ケレモノナルヘシ然レモ此法後行レス此歲彼  
 理香港ニ在ル時香港總監ボンハム此島ヲ英領トシ彼理カ其地ヲ購ヘ  
 ルヲ請リシカ彼理其理ヲ述ヘテ之ヲ駁ヒリ明年彼理復テ江戸灣ヨリ  
 別將アブボットヲシテ此島ニ過キラシメ農具租賃等ヲ島人ニ分チ且書  
 テ送テ其島所屬未定ノコトヲ警告シ己レ此ニ心ヲ用ユルハ唯一般通商  
 ノ利ヲ計ルニ出ツトノ旨ヲ告ケ歸國セリ彼理歸國シテ尙ホ此島開殖  
 ノ事ヲ唱ヘシカ息ヲ遂ケス是皆政府ノ命ニアラサレハナリ安政元年  
 春艦四艘此ニ到リ明年米艦モ亦到ル安政ノ初メ英人ロビンソンナル

者父島ヨリ母島沖村ニ移レリ之ヲ母島殖民ノ初トス是ヨリ先弘化三年ヨリ幕府此島ヲ開クノ議起リシカ其後外國人來往スト聞キ終ニ文久元年九月ニ至リ外國奉行水野筑後守忠徳目附服部歸一常純等ニ命ジテ此島ヲ再拓セシムルニ際シ我屬島ナレバ久シク中絶シ且英米人等來往スト聞キ因テ十一月其旨ヲ英米公使ニ告ケレニ英公使ハルリシハ其旨ヲ本國ニ告ケン但住民ノ諸免許ハ保持センコトヲ乞フト答フ幕府モ亦安住セシムヘキヲ告ク英公使アリルコソシハ即時答ヘサリシカ明年十二月ニ到リ此島日本ノ發見ナレバ千八百廿七年英國之ヲ取リ明年魯人之ヲ取リ米國彼理モ其地ヲ買フ日本中絶シテ他人ノ開ク處トナレハ所有ノ權ナレ因テ共有地トナサント欲スト答フ(此議據ニ及ビテ幕府ヨリ在島島合ノ次各政府ノ命ヲ受クテ開クニアラスト告ケタリ)是ニ於テ忠徳等屬官三十人許ヲ率ヒテ十二月四日軍艦威臨丸ニ搭シ共十九日父島ニ着シ島人ヲ集

メテ開拓殖民ノ意ヲ諭シ物品種子等ヲ惠與ス島人皆欣然我政府ノ保護ヲ領受スヘキノ証書ヲ出ス依テ文久二年正月定書港規則等ヲ製シ英文ニ譯シテ島人ニ頒テリ其定書并ニ港則ヲ左ニ掲ク

定書

- 一 外國人共是迄切開キシ畑地ニ其儘安堵セシムヘシト雖モ自今ハ日本政府へ申立差圖ヲ受クヘキ事
- 但シ地所讓渡サントスル時ハ是又可受差圖事
- 一 漁業ノ場所ハ別段境界ヲ不設日本人ト打混シ可相稜事
- 一 山ニアル材木類日本役人ノ許ヲ得ルニアラサレハ伐取問數候事
- 但 礦石類ハ掘取ヘカササル事
- 一 山野ノ獸類食料ノ外不可獵取事
- 一 嫁娶死亡出生ノモノ一々日本役所へ可及届事

- 一 向後在島ノ者ニ便リ其本國又ハ他國ヨリ移住セシレ外國人アラハ日本役所へ訴出可受差圖事
  - 一 外國人其本國へ立歸リ又ハ他方へ轉住スルモノアラハ日本役所へ訴出可受差圖事
- 筑後守歸一定之者也

小笠原島港規則

- 一 諸國之商船鯨獵船等港内碇泊之節ハ其國名船號船長ノ名噸數乘組人數并ニ渡來之趣旨早速日本役所へ申立都テ其役人ノ差圖ニ從フヘキ事
- 一 諸國ノ船ニ出入港ノ船稅并ニ輸出ノ商稅ハ不及差出事
- 一 港内ニ碇泊ノ船ニハ漁業ニ妨アルヲ以テ不可發砲事
- 一 港内出入ノ船ニ水先案内ノ者定ノ賃銀可拂事

- 一 港内碇泊之船ニ乗組ノ者上陸ノ上遊獵シ田畑ヲ荒シ其外不法ノ者アラハ召捕其船ノ船長へ引渡相濟ノ通料ヲ可爲差出事
  - 一 乗組人ノ内當島へ在留致シ或ハ一時滞在スル事ヲ願フ者アラハ其段船長ヨリ申立役人ノ差圖ニ可從事
  - 一 渡來ノ船ニ便リ立退候在島ノ外國人ニ同斷ノ事
- 右之條々文久二年壬戌正月於小笠原島水野筑後守服部歸一定之者也

二月十二日忠徳等母島ニ到リ島人ヲ懷テ復父島ニ歸ル是ヨリ先屬浦ニ假役所ヲ建テ山ヲ開キ官舎倉庫等ヲ起レ又詳ニ各島ヲ測量レテ地圖ヲ製シ新ニ島名ヲ附ス又屬浦ニ大神宮ヲ祀リ開拓ノ碑ヲ建テ此般ノ事ヲ記ス新はり記是レナリ(碑文後)是ニ於テ諸島全ク我版圖ニ歸ス忠徳等依テ小花作之助ヲ留メテ在勤セシメ三月九日父島ヲ發シ其

廿八日江戸。歸帆セリ此歳八丈ヨリ農工鍛冶男女凡ッ四十人許ヲ移  
 シ扇浦ニ廿餘屋ヲ建ッ頗ル村落ヲ成シ島人ノ地ナト買入レ諸處ヲ開  
 拓ス此間我漁船初陽丸等來往糧食ヲ通スルヲ七回ニ及フ然ルニ文久  
 三年幕府攘夷ノ令決セシ時此島ノ守備キテ慮リ復朝陽丸ヲ送テ五月  
 十三日一旦其移住人ヲ歸載ス當時島人ハ我政府ノ管理ニ安シ我吏人  
 ノ去ルニ及ヒ頗ル哀ムノ狀アリト云フ鎖港ノ令止ムニ及ヒ人ヲ派  
 遣スヘキヲ爾後國事多端ニシテ復中止セリ此間鯨獵船屢此島ヲ歷テ  
 横濱ニ來ルモノアリ其後ハ島中ノ制度益々立サルニ苦ミ各其本國ニ  
 保護ヲ乞フニ至レリ明治二年ヨリ米人ビースナルモノ島ニ來往シ其  
 小船ヲ以テ屢横濱ニ來リ諸物ヲ交易ス同六年四月全島人ノ託ヲ受ケ  
 ヲリトテ米國公使ブロンク氏ニ就キ其所屬ヲ問ヒ且法令ナシ爭論屢  
 起ルヲ訴フアロンク氏其事情ヲ本國政府ニ通シシカ其政府此島人

保護ノ任ナレト答ヘ之ヲ見棄タリ(明治七年ビースニ見捕ニ其形跡)是  
 ヲリ先キ維新後明治二年外務省此島再拓ノ議ヲ發セシカ國家尙多事  
 ナルヲ以テ遷延セシカ其後ビース横濱ニ來往スルニ及ヒビース島中  
 ニ國旗ヲ建テ全島ニ據有セリトノ風聞中外ニ聞ニ又島人屢爭殺ノ事  
 ニ苦ミ英米佛等各其本國政府ニ保護ヲ訴フ且ツ諸外船モ往々同島ヘ  
 出帆免許ヲ我ニ乞フモノアリ各國公使モ我政府ニ此島ノ屬否ヲ詰問  
 スルアリ我政府常ニ我屬ヲ以テ之ニ答フ因テ各國人民相雜住スレハ  
 其管理モ困難ナレ元來我屬地ナレハ之ヲ管理セサルヘカラス是  
 ニ於テ明治六年大藏省嘗テ再拓ノ事ヲ建言シ其十二月太政官初テ數  
 省ニ令シテ意見ヲ述レム七年外務内務大藏海軍ノ四省合議セシカ尋  
 テ佐賀臺灣ノ役起リテ遷延シ八年六月ニ至テ文久ノ諸制ヲ斟酌シ島  
 人ヲ我政府ニ歸セシメ港ヲ開テ輸出入ヲ無稅トシ海軍ノ分屯ヲ設ケ

且ツ人民ヲ移殖スル等ノ議ニ一決セシカ島人ノ向背モ知レ難ク殊ニ當時ヒリス全島ニ據有スト中外ノ新聞紙ニ噴々タルニ因リ我政府再拓ノ舉起ルヲ聞キ英公使パークスヨリ復我所屬ヲ詰問アレハ斷然我屬ヲ以テ之ニ答フ依テ十月先ツ探偵トレテ吏員ヲ發スルニ決セリ是ニ於テ外務四等出任田邊太一租稅權助林正明地理七等出仕小花作助海軍大尉根津勢吉等命ヲ奉レ隨行若干人十一月廿一日瀧船明治丸ニ乘テ橫濱ヲ發レ廿四日二見港ニ着レ即日島人ヲ船ニ會レ全島再招ノ旨ヲ諭シ其巨口原籍ヲ亂シ又器什ヲ惠與ス是ニ於テ島人欣然命ヲ領シ尋テ皆我管理ニ歸スヘキ態狀ヲ出ヌ同時英領事ロバートソンモ亦英艦「カル」號ヲ以テ廿二日橫濱ヲ發レ廿六日二見港ニ會ス是レハ島人ノ事情ヲ探シシカ爲メ且米公使ノ依頼ニ因リヒリスノ事ヲ亂セレナリ其際英領事ノ說ニ英政府若シ此島ノ英人ヲ護ラハ此近傍諸島尙

幾多ノ英人ヲ護ラサルヘカヲス共ニ之ヲ棄ツルニ若カストテ全島我管理スルニ就テハ絶テ異論ナカリシレ而シテ英領事ハ十二月三日歸帆セリ(此時往年ビノチエリ收メテ去レリト云フ)其五日我官吏更ニ母島ニ到テ事ヲ了シ明日父島ニ歸リ十二日島ヲ發レ十六日歸着シテ其事ヲ復命ス是ニ於テカ全島開拓ノ事定リ内務省直轄ニ歸セリ九年内務權少丞小花作助此島在勤ノ命ヲ奉レ十二月廿二日屬官十數人ト共ニ出發シタリ全廿七日二見港ニ入津扇浦ニ上陸シ島民ヲ召集シ開拓ノ意ヲ諭シ扇浦ノ地ヲ明ケ渡サシメ假小屋ヲ建テ墾十年同所ニ内務省出張所ヲ設キテ傍ニ官舎倉庫等ヲ設ケ農工若干人ヲ移住セシメ薩處山野ヲ開拓シ民ヲシテ各其産ヲ得シメ同十一月開拓ノ碑ヲ納涼山ニ建ツ(碑文後)全十一年内務權大書記官田中芳男ノ獻議ニヨリ暖地植物ヲ栽植スルノ趣旨ニテ別ニ勸農局出張所ヲ北袋深ニ置キ其近傍

ヲ開墾シ一等屬武田昌次ヲ瓜哇ニ遣レ咖啡樹彈力護樹等ヲ得テ茲  
 ニ栽植シ其培養ノコトヲ負担セシム同十三年伊豆七島皆東京府ノ管轄  
 ニ歸スルニ際シ本島モ亦東京府ノ管轄ニ歸セリ同十五年悉ク該島居  
 留ノ外國人ヲ歸化セシメ内國人ノ籍ニ加ヘタリ而シテ南貞助立木兼  
 善ノ二氏相次テ所長トナリレカ明治十九年東京府出張所ヲ廢シ更ニ  
 小笠原島廳ヲ置クニ至リ立木氏島司トナリレカ幾クナラヌレテ小野  
 田元熙氏之レニ代リ現ニ其職ヲ奉ヒリ之ヨリ先キ同十八年島廳ヲ父  
 島大村ニ移轉シ官舎ヲ建テ倉庫ヲ設ケ人民モ亦此ニ移ルモノ多ク今  
 ハ扇浦ニ代テ該島ノ一聚落トナレリ

○第十三 扇浦文久開拓碑文

小笠原島新はりの記

伊豆の國八丈は島はみな北緯二十七度ふとのへはみやみのひんりし、  
 四度二十七分あふとてひろし、そまはくはしまゆりしを、東照を神ミ  
 をやのおん時、文祿のふたとせといふふ、小笠原民部少輔貞頼みゆるし  
 をかうふりて、包たりをたしより、此島長くあるべしとて、小笠原島とい  
 ふ名をもたまひたりたり、されと、波路のいとあらけれとよやゆりけむ  
 いつしか、渡りかよふことも、おくなりまたりしを、其後、享保十三年ふか  
 の貞頼の後裔りける、宮内貞任、せちよ申こひて、又さらよ、渡りたりしう  
 と、そのかまを、ねはやけさまよも、御こととさしけくや、おはしましけん  
 さして、さいくしだみさためも、あらてめんやみよし、ろもくかゝる  
 離れ島あはあれども、もどより、ひとのくおよしも、あらぬを、いたつらよ  
 さてのまあらんよ、風波とけしだわた中を、おきかふ、船路のたよりも  
 よろしからさめれい、いかて、この度、ねこたる事、おん新たりせよと、を

きてさせ給ひて水野筑後守忠徳のぬし服部一常總のぬしらよ、此事のをちくつかさどらせたまひぬ、しかあるよよりて、このみつかひの人とさるやむことなき仰ことをかして、いとそみやうよ、船よろひして、やかて、どもつなをとかふんとなり、かゝれど、このこと、いとなませ給ふためしを沖津島根の石あさみで、とこしなへよ、とよめたまひ、つたへたまこと、あること、のよしと、文久元年十二月のとしめよ、かゝこまど、うけたまはりて、黒川主人春樹あるを

○第十四 納涼山明治開拓碑文

開拓小笠原島之碑

明治中興革新諸政大拓疆域六年有大臣岩倉具視奉旨下小笠原島開拓職臣利通承乏内務卿與外務大藏海軍諸卿上方略制可乃遣外務省四等

出仕田邊太一等往視之太一還具狀以開九年命内務權少丞兼地理權助小花作助勘誘土民墾田栽樹捕魚牧牛以統轄全島初文祿二年小笠原貞頼始檢出此島建木標以表我版圖因名小笠原島經寶三年幕府遣島谷某巡視其地享保十二年貞頼曾孫貞任紹祖志自請而往漂流不還既而内民稍移住外人亦有來住者文久元年遣水野忠徳等撫輯居民頒布法令建碑記頼末而國家多故經營未周所以有待於今日之舉也蓋我邦之倚地海水四環伊豆東南北緯二十五六度至三十五六度屬島星羅而本島居其一甲斐伊豆之山脉蜿蜒起伏至於此而盡乃我南門也不假官司以致焉則居民不能安其業嗚呼民安其業更修其職庶幾不違新政拓疆之盛旨也歎

參議兼内務卿從三位勳一等大久保利通撰文并篆額

大政官大書記官從五位日下部東作書

大日本國紀元二千五百三十七年明治十一年十一月建



○第十五 移住人ト歸化人

此古來無人ノ島ニ人ノ始メテ移住セシハ實ニ天保元年ナリ此歳ノ夏以太利人マザロナルモノ頭人トナリ米人セーボリナヤヒン英人ミルチヤムア葡人ワロンソン等五人布哇島ヨリ其島人男女拾五人許ヲ伴ヒ父島ノ洲崎ニ移ル是現在住民ノ初メナリ後各島ニ分住レ爾來歐米人南洋島人等鯨船ニ乘來リ止マリ或ハ死レ或ハ去ル者アリ多クハ島中ノ布哇婦ヲ娶テ子ヲ生ム又母島ニ移ルモノモアリテ人口漸ク繁殖セリ然レモ之ヲ天保元年初度ノ時ヨリ調査スルコト敢テ多ク殖スルヲ見ス嘉永六年ノ夏父島ニ三十一人アリ皆大村洲崎奥村北袋深ニ住ス文久二年ハ父島ノ大村奥村境浦洲崎等ニ合計十戸四十一人アリ母島ハ沖村ニ英獨人各一人及其子女ト布哇人一戸十四人アリ明治六年ノ

春ハ父島ニ六十八人大半小兒ニテ内ニ米英佛人アリ其他母島ニ米人南洋人二人アリ同八年ノ冬ハ父島ノ大村奥村境浦洲崎北袋深南袋深南崎等合計十四戸七十一人アリ(男三十七人女三十四人)内ニ英佛獨葡各一人ニテ三十餘人ハ島内ニテ出生セシ小兒ナリ内ニ又内地ノ婦二人アリ島人ヲ夫トス是ハ明治六年ノ頃ヒースカ横濱ヨリ欺キ携ヘシ六人ノ内ニテ四人ハ歸レリ同時ニ母島ノ沖村ニ獨逸人ト布哇婦ト小兒ト一戸三人アリ明治十三年ニハ總計六十三人内英人男十一人女十人米人男四人女五人佛人男三人女一人葡人男五人女三人西人男七人女九人加那加人男二人女二人アリ本年ニ至リテハ八十五人アリテ内父島ニ住スルモノ七十六人母島ニアルモノ九人アリト云フ

布哇人(洋人加那加)ハ男女皮膚毛髮黒クシテ眼大ナリ白人ハ皆歐米人ニシテ多クハ加那加人ノ婦ヲ娶リ子ヲ生ムヲ以テ島中ニ出生ノモノ

ハ多クハ雜種ナリ又兄弟中ニテモ兄ハ白人種ナルモ弟ハ南洋人種ナルモノアリ故ニ白人ノ子女モ其體格南洋人ニ類セリ而シテ南洋人ニハ面部并ニ手ニ黧スルモノモアリ率テ無賴ノ徒多ク徒爲コ日ヲ送ルカ故ニ齊愚且ツ懶惰ナリ一般ニ英辭ヲ用ユレモ文字ヲ知ラズ概シテ自ラ姓名ヲ記スル能ハズ近來小學校ノ設アルニ依リ少年ハ略ニ就キ文字ヲ習フモノアリ

歸化人ノ家屋ハ皆島中噉尺ヲ堀リ柱ヲ建テ棟桁等ヲ組ミ屋上ヲ葺クニ總テ蒲葵葉ヲ以テシ周邊モ亦概テ蒲葵葉ヲ以テス家屋ヲ住室觀室ノ二區トシ府庫皆屋ヲ別ニス什器ハ略歐洲風ヨシテ毎家地板ヲ低フレ椅子高案ヲ備フ但シ布哇人ハ盤坐ス衣服ハ男子綿毛袴ノ概衣ト狹袴ノミヲ着ケ草帽ヲ戴ク婦人ハ歐裝ヨク髪ヲ結ヒ大櫛ヲ挿ミ巾ヲ被ル男女多クハ跣足ナリ率テ勞力ヲ厭ヒ定マレル職業ナク地ヲ耕シ

テ穀菜ヲ作り牛豚山羊家禽ヲ蓄ヒ蠶繭ヲ捕ヘテ鹽藏シ或ハ池中ニ蓄フテ終歲自家ノ食トナスノミ或ハ年期ヲ定メ獵虎船及鯨船ニ雇ハレ勞力シテ賃銀ヲ得ルモノアリ鯨船常ニ出入スルカ故ニ之ニ就キ野菜雜豚蠶繭ノ甲等ヲ以テ衣服器什等必用ノ物ト交易ス就中酒類ヲ要望ス唯氣候ノ健康ニ好キト沃土勞少シテ食ヲ得ルニ安シテ敢テ其地ヲ去ルヲ欲セス又多年交易ノ利ニ若干金ヲ積ムモノアリ婦人ハ林業ヲ以テ席ヲ織ル「アンペラ」ノ粗ナルモノ、如シ此等土著ノ外國人皆明治十五年歸化シテ日本ノ籍ニ入りタリ此際東京府ヨリ歸化人男一人ニ付旅費トシテ金七十五圓ヲ給ヒリ而シテ歸化人中年長コレヲ名留アルヲ以テツヨルロゴンソナアロスバ、レスツノ二人ヲ歸化人ノ世話掛トシ俸金ヲ給セリ

內國人ノ此ニ移住セシハ實ニ文久二年ニシテ八丈島ヨリ男女凡ソ四

十八昨ヲ移セシテ始トス然レモ内政多故此島ノ守リ難キヨヨリ文久三年五月一日其移住人ヲ歸職セリ今ノ移民ハ皆維新後明治九年此島再拓以來漸次ニ移住スル所ナリ明治十三年ノ調査ニ因ルニ在島内國人口三百十九人アリ内移住人男九十八人女六十九人滞在男五十九人女廿六人寄留男四十一人女九人内人民職業ハ農漁五十八人工十人商六人雜業男五十二人女四人ナリ官員并ニ其家族僕婢男十五人女十人アリ本年ノ調査ニテハ内國人口總テ一千三十七人ニテ内父島ニ住スルモノ七百四十七人母島ニアルモノ二百九十八ナリト云フ而レテ此等ノ移住人ハ半チ八丈島伊豆諸島邊ノモノ多ク其他ハ内地ニテ破産失敗ノ徒ニシテ永久不拔ノ卓見ヲ以テ此島開拓ノ基業ヲ謀ルモノハ甚ク少ナク營々トシテ目前ノ浮利ヲ謀ルモノ多ク故ニ目今移民中眞ニ開拓殖産ノ道ヲ營ミ永遠ノ希望アルモノト眼前ノ浮利ヲ謀ルモノト

二派ニ分レリ其居宅ハ皆外國人ノ風ニ習ヒ堀建小屋ニシテ蒲葵葉ヲ以テ屋ヲ葺ケリ然レモ地振ヲ張り疊席ヲ敷ク等ハ内國風ヲ折衷スルモノ、如シ而レテ人氣ハ頗ル輕薄ニシテ懶惰ナリ氣候温暖ニシテ衣服多キヲ要セス食物ハ米穀ノミ充足セハ其他ノ魚類蔬品ノ如キ些少ノ努力ヲ以テ自ラ漁シ自ラ耕シテ自家ノ需要ニ供スルニ足ルヘキヲ以テ其他ヲ謀ラス唯偶々内地人等來リテ島内ノ物産ヲ需求スルニ際シテハ一舉ニ利ヲ占メント欲レテ高價ヲ賣リ其過當ナルヲ詰レハ賣ルヲ欲セス質銀ノ如キモ略定メアレモ必要ノ件アルニ乘レテハ過當ノ高價ヲ賣リ之ヲ賣ムレハ使役ニ應ジス(其銀或タ高價ニシテ普通船中人ト云フ)然レモ門戸夜鎖ササルモ竊盜ノ患ナシ是世ノ民タルニヨリ然ルニアラス大洋中ノ一孤島ニシテ船便數回ニ過キス人口僅々ナレハ禍心ヲ懷シモ直ニ其罪ノ露顯センコトヲ恐レテナリ

予輩ハ今回ノ渡航ヨリ親シク彼此島民實地ノ狀況ヲ目撃シ聊カ感  
 慨ナキ能ハス素ヨリ歸化人移住人ノ別ナク氣候風土ノ暮シ易キニ慣  
 レ其性質一般怠惰ノ風アリト雖モ然レモ之レカ衣食住ト職業財產等  
 ノ事ヨリ觀察ナ下スルハ尙ホ歸化人ノ處世移住人ニ優ル歟等ナルヲ  
 知ラス元來此移住人中多數ヲ占ムル所ノ八丈島人ノ如キハ我國人中  
 最モ文化ニ感ヒサル所謂賤味ノ種族ニシテ殊ニ其中ニアリテ懶惰ニ日  
 ヲ送り終ニ口腹ニ顧スルモノ相伴テ移住スルモノナレハ更ラニ將  
 來ノ大計ニ注目セスレテ唯目前ノ射利ニ汲々アリ其他内地ヨリスル  
 モノハ多クハ破産失敗ノ餘党ロシテ概テ無賴ノ徒ニ過キス故ニ一錢  
 ヲ得レハ直ニ之ヲ浪費シテ顧ミルモノナク予現ニ驚キヌル一事アリ  
 此島香蕉樹多ク家トシテ之ヲ栽ヘサルナク四時花咲ヒ果熟ス採テ之  
 ヲ食ヒ又釀シテ酒トナス之ヲ香蕉酒ト云フ一瓶ノ價十五錢ナリ日々

下等ノ職人之ヲ購ヒ酔臥日ヲ送レリ元來職人ノ賃銀非常ニ高直ナル  
 カ故ニ此等ノ餘裕アルヤ素ヨリ知ルヘカラスト雖モ掌大ノ島嶼日ト  
 レテ職人ヲ要スルカ如キヲナク是レ僅ニ便船渡來ノ小日數間ニ過キ  
 サルヲ知ルナリ要スルニ斯ル無賴ノ徒ナルヲ以テ單ニ今日ヲ計テ又  
 明日ヲ知ラス所謂遊々閑々日ヲ消スルモノナレバ移住人カ産ヲ積ミ  
 實ヲ蓄ムルモノアルヲ聞カス偶之レアレハ其人ハ乃チ一意開拓殖産  
 ニ熱心シル真正ナル移住者ニ過キスレテ是等ハ島中ヲ穿テ僅ニ數フ  
 ルニ足ルヘキニ然ルニ歸化人ハ其衣食住ニ於ケル其職業ニ於ケル  
 遙カニ移住人ノ上ニアリ生計ノ狀秩然トシテ稍盤詰シ海ニ入テハ蠅  
 蠅魚類ヲ捕ヘ之ヲ終歲ノ食餌ニ充テ或ハ鬻賣シテ奇利ヲ占メ野ニ出  
 テハ殺猪ヲ耕シ牛豚ヲ牧シ米麥ヲ養ヒ或ハ食ヒ或ハ賣リ殊ニ鯨船  
 等ノ入港スルニ際シテハ之ヲ以テ他ノ物品ト交易シ而シテ幾分ノ利

益ヲ得ルカ如キ其生計ノ度移住人ノ及フ所ニアラサルナリ就中此等ノ歸化人ハ我移住人ニ先ンシ此島ニ渡來セシカ故ニ其住所ニ其耕地ニ皆是レ島中主要ナル部分ヲ占有シタレハ其生計ノ自然ト相異ナルヲ得サル所以ナリ本年ノ調査ニテハ父島開墾地四十二町九反一畝歩母島開墾地百十一町四反八畝ナリ然ルニ此三分一ハ沃土ハ僅々カニ歸化人ハ占ムル所ニシテ我移住人ノ多數ナルモ僅ニ其他ヲ有スルニ過キサルナリ嗚呼此島ノ前途唯恐ルヘキハ此歸化人ニアルナリ移住人ニシテ今ヨリ之ヲ戒メ而シテ勉メスンハ終ニ彼レカ奴僕タルヲ免レサルヘレ戒メサルヘケンヤ勉メサルヘケンヤ

○第十六 二見港ノ碇泊

本年十一月五日我明治丸ハ島島ヲ發シ南ニ馳ス七二百余哩翌六日午

後ニ及ヒ前途遙ニ蟹島群嶼ヲ望ム落日天涯觀畫圖ニ似タリ夜ニ入リテ漸ク父島ニ近ク然ルニ二見港口危險ニシテ暗夜容易ニ入港シ難シトノコトヲ月明ヲ待テ漸ク此ニ入ルコトヲ得タリ二見港ハ又大港ト稱ス洋人ハホルト、ロイドト呼フ父島ノ西北ニ在ル長港ニテ北ニ一岬ヲ回クシ灣ヲナス港内南北廿町東西之ニ半シ港口西ニ向ヒ廣十町許大船ハ南方野羊島ニ沿ヒ出入ス港内ノ北岸清瀬ノ前ニ珊瑚礁アリテ海ニ出テ其端ニ二尖巖アリ伊勢二見浦ノ夫婦岩ニ似タリ港名ノ起ル所ナリ此礁ノ西海深ク風波極メテ穩ニ是ヲ此港碇泊ノ最好處トシ英人ピーチー曾テ十餘年ト名ツク此處北緯廿七度五分三十五秒東經百四十二度十六分三十秒ナリ此ヨリ港口ニ向ヒ水俄ニ深ク最深キハ廿餘尋ニ至レリ此港ハ實ニ我南洋ノ一大良港ニシテ小笠原島ノ將來ニ見込アルニ至レルモノハ主トシテ此一好港アルカ爲メナリ母島ノ如

キ其地父島ニ比スレハ肥沃ニシテ海陸ノ物産モ亦多シト雖モ唯唯沖村  
 港ノ碇泊ニ便ナラサルカ爲メニ其用少ナキ所以ナリ内地伊豆ノ下田  
 港ヲ發シテヨリ海路四五百里茫々タル洋中星列甚散ノ島嶼多シト雖  
 モ若シ一朝風濤險惡ニシテ進航難澁ナル場合ニ際スルモ一モ其船ヲ  
 泊シ難ク避クヘキノ港灣ヲ見ス南洋ニ渡航スル船舶ノ憂慮實ニ此ニ  
 アリ然ルニ小笠原島ニ近ツクニ至リテハ乃チ二見港ハアルアリ航客  
 ノ便利察スルニ堪ヘタリ實ニコレ内地ヨリスルモノ而已ナラス米國  
 ヨリシ布哇ヨリシ其他南洋群島ヨリスルモノ此一港ニヨリ其利ヲ受  
 ケルモノ決シテ少小ニアラス古來海外ノ軍艦或ハ鯨船ノ來テ薪水ヲ  
 求ムルモノアルヲ見テ以テ知ルニ足ルヘシ嗚呼該島ノ用ハ一ニ二見  
 港アルニヨルナリ若シ此港ナカリセハ我南洋ノ諸島ハ終ニ無用ノ廣  
 島ニ歸セシモ亦知ルヘカラス港灣ノ用益ニ大ナリト云フヘシ

予等ヲ載スル所ノ明治丸ハ此夜僅ニ月光ヲカリ野羊山ニ沿フテ入港  
 シ大村ノ沖合ニ投錨セリ大村ニハ近時海岸ニ波止テ築キ懸客貨物ノ  
 出入ヲ利シ往時(明治八年)此明治丸カ此島ニ入港セシ時ナドニ比スレハ其  
 便其利一層ノコナリト云フヘシ然ルニ茲ニ初メテ此港ニ入ルヘキ船  
 舶ノ大ニ戒ムヘキコトアリ港口ノ暗礁ニ觸レシ是レナリ今小花作助  
 翁ノ小笠原島略記ヲ見ルニ左ノ記アリ録レテ航客ノ參考ニ供スヘシ  
 小笠原島父島ニ入ラントスル船ハ第一ニ心得ヘキハ港口ノ暗礁ナ  
 リコレ港口中間ニ在リ于潮コシテ風浪アル時ハ浪々ヘテ白ク見  
 ヲレモ滿潮ニテ風穏カナルハ見ル能ヘスヨクノ心ヲ用ユヘシ  
 港口西ニ向ヘハ其南方野羊島ト唱フル所岸深ナレハ接近シテ入港  
 スヘシ中央ヨリ北ノ方ハ暗礁多シ且又港内碇泊ノ場所モ忽チ碇鎖  
 ヲ切ル所アリコレ港内中央ヨリ南岸ノ方ナリ北岸ニテ大村ト云フ

沙濱ヲ距ル<sub>二</sub>町程ノ所<sub>一</sub>ヲ可成丈港ノ奥ヘ入リテ碇泊セハ其患  
ナカルヘシ既<sub>ニ</sub>初メテ渡島セシ我成陸艦モ碇泊セシ當夜半鎖ヲ切  
リ碇ヲ失セレノミナラス大ヒニ危キ事アリシ又嘉永六丑年亞國ノ  
水師提督彼理ノ乘リシ軍艦モ此港ニ來リテ碇ヲ失ヘリト云ヘリ

○第十七 小笠原島ハ漸ク日本ノ物トナレリ(一名所屬論)

小笠原島ハ小笠原貞頼ノ初檢ニ出テタル事實ハ疑フヘクモアラス此  
發見ハ實ニ我文祿二年即チ西曆千五百九十三年ノ出來事ナリ其後此  
ニ渡航スルヒノ斷ヘス就中漂流人ノ滯留廿年ノ久シキニ至ルモノア  
リ又母島沖村ノ後山ニ古ク堅文字ヲ刻セシ石碑アリシカ安政ノ初メ  
島人來船ノ英艦ニヤ米艦ニヤ載去ラレメタリト是レ我漂流民ノ墓ナル  
カ或ハ太神宮ノ舊蹟ナルカ是等皆古ク我國人ノ此ニ到リ住居セシ証

跡ナリ然レニ我國人樂テ住セズ外人其無人ノ境ヲ見テ來往セシコ  
ナレハ或ハ發見ノ外別ニ所屬ハ一線案アリトシ其人多ク英米人ナレ  
ハ兩國ニ所屬ヲ疑フモノアレニ其來往スルモノ亦決シテ各本國政府  
ハ命ニ出ルコトヲス

元來歐米人カ此島ノ事ヲ知リレハ今ヲ距ル七八十年前ノトニシテ  
其此ニ到リシ年記ノ詳ナル者ハ文政六年米國ノ鯨船長コッパンカ母島  
ニ來リテ始トシ次々同八年英國ノ鯨船「スツプライ」號ニ見港ニ到リ一  
樹ニ來由ヲ釘シ去ル同十年英政府ノ測量船長ビーチー此ニ到リ自  
初發見トシ各島ニ名ヲ命シ此時人跡ナケレハ直ニ取テ英領トシ其事  
由ト年月ヲ銅版ニ刻シ洲崎ノ一樹ニ貼シ國旗一梳ヲ置ケリ其銅版ノ  
文ニ

大英國ノ船「ロンドン」號船長ビーチー英國王第四代ノジョージ第四代

ア此群島ヲ領略ス千八百廿七年六月十四日

同十一年魯國海軍船長ルゲナルモノ亦此ニ到リ取テ魯領ト命シ一樹  
ニ一板ヲ附シテ去ル嘉永六年米國水師提督彼理二見港ニ寄泊シ暹  
父島兄島ヲ探リ船舶碇泊ノ爲メ灣瀬ノ一地ヲ島人セーボリヨリ五十  
勇ヲ以テ購ヒ去ル同年十月彼理別將ケルリテ此ニ遣ス當時無人ナリ  
レカ爲メ取テ米領トレ更ニ各島ニ名ヲ命シ銅版ニ事ヲ記シテ母島沖  
村西北岬ノ一樹ニ付シ又一板ト一壺中ニ此島コフツノ發見ニ係レル  
實記ヲ納レタルモノトテ地中ニ埋メテ去ル其銅版ノ文ニ

此南方諸島ハ合衆國軍艦ブリマウス號船長ロヨンケルリ并ニ士官  
等海軍提督彼理ノ命ニ從ヒ北亞米利加合衆國ノ爲メニ巡見シテ之  
ヲ領ス千八百五十三年第十月三十日(島人今尚此銅版ヲ持タリ)  
此ニ於テ彼爾島殖民ト稱シ新ニ憲法ヲ制シセーボリテ頭官トシマ

レ及ヒユヅナ副官トス其憲法左ノ如シ

彼爾島移住民制法

我輩彼爾島ノ住民衆議シテ一政府ヲ建テ衆ノ幸福ヲ計ツント左ノ條  
々ヲ制定シ今日ヨリ二年間之ヲ保守センコト誓ヘリ

第一章 我政府ノ號ヲ彼爾島ノ殖民トス

第二章 此政府ハ一長官ト二副官トニ成ル而シテ此章ノ條ニ依リ我

輩同議シテテリタル、セーボリヲ長官ニ選任シロ、エームス、マトレ及ヒ

トーマス、エツチ、エツチヲ副官ニ選任シ各此會議ヨリ二年間其職ヲ守ル

ヘシ此長官副官兼ノ利ニ必用ト考フル時ハ常ニ島中ノ制令ヲ設ク

ルノ權アルヘシ其制令ハ島人三分ノ二ノ同議ニ決スヘシ

第三章 此長官副官カ後ニ一法制書ヲ編スルマテハ我輩先次ノ十三  
條ヲ議決セリ是其改正ノ時ト二年ノ期マテハ充分施行ノ權アル者



第二條 全島ノ人民互ニ争論アリテ私和スル能ハサルハ必ス其裁決ヲ長官ニ委シ長官ノ決議ハ一定ノ者トスヘシ

第三條 此殖民ノ刑ハ贖金ニ止リ何罪ヲ論セス其刑ハ、ノ金高チ越ニヘカラス

第四條 何罪人ヲ論セス其贖金ヲ取立ツル時ハ其人ノ財産凡ソ彼爾島ノ境界中ニ在ル者ハ長官其沒收賣却ヲ命スルノ權アリ

第五條 島人此港來泊船中ノ人ヲ誘引逃走セシメ或ハ潛匿セシムルハ全ク法ニ背シモノトス

第六條 來泊船中ノ人ノ逃匿ヲ助クル者ハ五十弗以内ノ贖罪ヲ受クヘシ

第七條 贖罪沒收ノ金ハ積テ島人公用ノ資本トス而レテ長官其金

ヲ守リ必用ノ公用ニ供シ費用ノ精算ヲ司リ其出入ノ算ハ歲末ニ公告スヘシ

第八條 歲末ニ至リ其殘金アリテ島人ノ衆議ニ其他ノ用途無ケレハ之ヲ現在ノ島人中ニ平均分與スヘシ

第九條 港法此港ニ公任ノ水先案内役二人アルヘシ而シテ第三章ノ義ニ因リ我輩同議シテ安ニシムスマトレ及ヒトーマス、エシテ、

ニツテ此會議ヨリ二年間此役ニ任セリ此役ノ者ハ他ノ適任ノ者ヲ其代ニ任スルヲ得其他ノ者ハ總テ此役ヲ行フテ法ニ背クトス何人ヲ論セス此役ノ者ノ許ヲ得スレテ此港出入ノ船ヲ案内セントスル者ハ其案内料ノ高ニ均シキ贖金ヲ收ムヘシ

第十條 凡ソ來泊ノ船長此長官議官ノ許ヲ得ス此港ニ其水火ヲ揚クルコト法ニ背クトス且疾病困迫ノ人ヲ諸費用ヲ給セスレテ此島

上ニ殘スヘカラス

第十條土地ヲ有セサル人若シ他ノ土地ヲ有スル人ト交易ニ組合ヒ  
或ハ他ノ土地ヲ買切ルルハ條約ノ書付ヲ認メ其土地財産等買切  
ノ證書ヲ受ケルヘカラス此組合ノ分離或ハ一方ノ死亡起ルルハ  
其財産ノ配分ハ長贖官之ヲ行ヒ死者ノ爲メニ不公平ノ事ヲ保護  
スヘシ

第十一條凡ソ他人ノ土地ヲ損害スル者ハ長贖官之ヲ檢シ其相當ト  
見ル所ノ損害ニ均シキ贖金ヲ命スヘシ

第十二條長官贖官若シ緊要ナリトスルルハ人民ノ衆議ヲ起シ上文  
ノ政令ニ改正増補ヲ行フヘシ

第十三條凡ソ此後世殖民地ニ加入セントスル者ハ必ス上文ノ制令  
ヲ奉守スヘシ

一千八百五十三年第八月廿八日彼爾島ノボルトロイドノチサチ  
ル、セーカリノ家ニ於テ上文政府ノ憲法ヲ決定シテ互ニ之ヲ奉行  
スルノ保證ヲ誓ヒ我輩爰ニ姓名ヲ記ス

チサチル、セーボルトーマス、エツチ、エツプジョー、ムス、マトレ、キルレ  
ム、ギルレ、ジョン、ブツバ、ジョーセフ、カレン、ジョー、オ、ラ、ブル、ユ  
ー、ブラバ、ウエル、ジョ、ホルトン

此處彼理香港ニ在ル時香港總監ボーンハム此島ヲ英領トシ彼理カ其地  
ヲ購ヘルヲ詰リ千八百四十二年即十二月サントキ、チ島ノジョ、ホーニ  
於テ英領事シムブソンカ出版セル書ヲ示ス其文ノ略ニ曰ク

ボニン島ハ千八百廿五年(文政八年)英國ノ一鯨船之ヲ見出シ後二年英政  
府ノ船ブロンム號ノ船長ピーチー之ヲ取テ英屬トス當時島中ニ人  
無ク又人ノ住セル跡モ無シ此島ヤ幅員總計二百五十英方里ニ過キ

サル小島ナリト雖も彼希有ナル帝國日本ニ接近シ後來其國ト交易ヲ開クニ到ラハ最モ好位置ノ地ニシテ氣候好ク土地肥沃ニシテ又最好港アリ抑此島第一ノ移住人ハミルリチャムプ及ヒマザルロナル者二人ニシテ此者等サンドキッチ在留英國領事チャールトンニ大平海中何島ヲ論セス無人ノ者ニ移住センコトヲ乞フ依テチャールトンハ近頃英國ニ於テ此ボーン群島ヲ發見セ取テ英屬ト爲スト知テ乃チ此島ニ移ラシム是ニ於テ千八百三十年(天保元年)此二人サンドキッチノ土人數人ヲ力作人トシ若干ノ牧畜種實ヲ携ヘ愛ヲ出帆シテボルト、ロイドニ上陸シチャールトンカ校ケタル英國旗ヲ揚ケタリ爾後鯨漁船モ屢此ニ到リ英國支那艦隊ノ一艘モ亦到レリ既ニシテミルリチャムプハ英國ニ歸リマザルロハ其頃人口僅ニ廿八人ノ小殖民地ナルヲ以テ更ニ人口ヲ加ヘント欲シ千八百四十二年(天保十三年)英國ノ鯨漁船ニ乘

リサンドキッチニ來リ曰フ土地肥沃ニシテ牧畜耕作共ニ繁盛ニ且毎年船舶四十艘ノ糧備ヲ給スルニ足ルト此時マザルロハ移住ノ初頭人ナルヲ以テゴブルノル行本ノ號ヲ與ヘタル然ルニマザルロハ此殖民極テ小ナルモ之ヲ處置スルノ甚メ易カラサルヲ見テチャールトンニ其助力ヲ乞ヘリ依テチャールトンハ其助勢トシテ次ノ書ヲ與ヘ其事ヲ保護セリ其書ニ曰ク此マツウマザルロナル者ハ大英領事リチャルド、チャールトンノ保護ヲ受ケボーン群島ニ殖民セント此港ヨリ發行セル初頭人ノ一ナリ且遍ク此島ニ到ル鯨船ニ告ク此人ハ實據沈密ナル者ナリ若シ何事ヲ論セス此遠隔セル殖民地ニ艱難ノ起ルコトアラハ幸ニ助力セラルヘシ且島中ノ人ニ告テ後來大英政府ヨリ直ニ其頭人ヲ命スル迄ハ此人ヲ以テ頭人ト殿クヘント云々

同時ニ彼理ノ返翰ニ其事ヲ駁ス其略ニ曰ク

來書中初頭ニ此島ニ移住セル白人ノ名ヲ悉ク擧クルヲ失セリ即チ其人々ハウヱニア(伊太利)ノ産マテオ、マサルロチ頭人トシ米湖マツヤンセツ産チサチル、セーボリ及ヒ同國ノアルデンビー、チヤピン英國ノ産ウヰン、ミルンチャムア噠馬ノ産チャールス、ウヰンツン等ナリ此五人ノ者サントキツチノ土人男女凡廿五人乃至三十人チ伴ヒ千八百三十年ノ夏ニポルト、ロイドニ上陸セリ其後此白人中今島ニアル者ハセーボリ一人ノミマサハロチヤピン、ウヰンツンハ死シミルンチャムアハ今ラトロン諸島中ノグアム島ニ移住セリ故ニ其移住人ノ本國ハ即チ其所屬ノ論ヲ証スヘク他ノ各國人ハ各一人ニテ米國人ハ二人ナリ島ノ開拓以來他ノ鯨漁船ヨリ白人時々之ニ加ハリ余カ此ニ到リ時ハ白人凡ツ八人居留セリ余カ島ヲ去ルノ後此者等相議レテ自ラ一政府ヲ立テセーボリチ頭官ニ選舉シシムス、マトレント、マヌ、ユツプチ

頭官トセリ又此島最初ノ發見ニ付キ其所屬ヲ論スルハ千六百七十五年(延寶三年)日本人既ニ之ヲ見出シシムムニシノ名ヲ命シタリ且ビチエーノ此ニ到ルヨリ五年前千八百廿三年(文政六年)米國ノ鯨船トランレット號船長コブン既ニ此ニ到リ是ニ由テ之ヲ觀レハ英國政府ニ於テ發見ノ權ハ絶エテアルヘク唯ビチエーカ取テ英領トセン處置ニ付キ其權ノ當否ヲ決定スヘキノミ然レモ是等ノ事ハ兩國政府ノ互ニ論スヘキ條件ナレハ宜レテ其論ニ付スヘシ但シ余カ島人セーボリヨリ一地ヲ贖ヒシコハ今辨解スルヲ用キスト雖モ蓋シ此事ハ眞ニ些細ノ私事トスヘシ其地ヲ得ントスルニ於テ余カ心一毫モ之ヲ已ニ利スルヲ思ハス正ニ公正ノ事ナリ計レルナリ港中石炭貯場ニ唯一所ナル好地ヲ他人利ヲ貪ランカ爲メニ賣ハントスルアラント防カントナリ是故ニ此處置ハ實ニ太平洋海中ノ我鯨船

及ヒ早晚桑港ト支那トノ間ニ建ツル飛脚船等ノ碇泊ノ爲メニセシ  
ト余カ一念ニ起レル者ナリ我此處世ニ就キテハ我政府ノ特令ヲ受  
ケタルニモアラス且其事ノ許可ヲ得ル否ヤモ未タ知ルヘカラス且  
凡ソ此島ヲ取ラントスル者ハ其保有ノ費用必ス之ニ從フヘク若シ  
島中ノ諸島ヨク來舶ノ各國船ヲ遇容スル間ハ輪ヲ費スニ足ラサル  
程ノ事ナルヘシ且ヤ今全世界ノ大飛脚船路ノ其全周スヘキ線ヲ  
繼繋シ毎半月ニ世界ヲ一周スヘキ方法ヲ力ヲ盡シテ成就セシメレ  
メソコハ英米彼此ヲ論セス豈ニ一大要策ナラスヤ云々  
明年彼理復タ江戸灣ヨリ別將ヲボツトシテ此島ニ過ヤラシメ農具  
種實等ヲ島人ニ分チ且開殖ノ意ヲ告ク彼理歸國シテ尙此島開殖ノ事  
ヲ唱ヘシカ悉テ遂ケス

文久元年幕府再拓ノ檢吏ヲ遣ルニ及ヒ我屬島ナレハ久ク中絶シ且英  
米人等來往スト聞キ使テ其旨ヲ英米公使ニ告ケシニ米公使ハルリス  
ハ其旨ヲ本國ニ告ケン但住民ノ諸免許ハ保持セシコト乞フト答ヘ幕  
府モ亦安住セシムヘキヲ答フ英公使アルコトハ即時答ヘサリシカ  
明年二月ニ到リ此島日本ノ發見ナレハ千八百廿七年英國之ヲ取り明  
年魯人之ヲ取り米國彼理其地ヲ買フ日本中絶シテ他人開ク所トナレ  
ハ所有ノ權ナシ因テ共有ノ地トナサント欲スト答フ然ルニ其檢檢吏  
歸ルニ及ヒ幕府在島島合ノ衆各政府ノ命ヲ受ケテ開クニアラスト答  
ヘタリ且當時島人亦我政府ノ管理ニ安シ其明年我吏人ノ去ルニ及ヒ  
頗ル之ヲ哀ムノ狀アリタリト云フ其後國事多端ニシテ再ヒ中絶レ島  
中ハ制法益立クサルニ苦ミ島人各其本國ニ保護ヲ乞ヒ明治六年ヒ  
ス米公使アロンクニ所屬ヲ問フニ至リアロンクハ直ニ本國々務卿ニ  
左ノ書翰ヲ送リタリ其略ニ曰ク

今朝カビテ、ペンロミン、ピースナル者余カ許ニ來リ曰ク余ハ元來  
米國人ニテ三年前ヨリ無人島ノ住人タリ今回此諸島ノ移住人ノ託  
ニ依リ尋問ス元來此諸島ノ移住人ハ何國ノ管轄ニ屬スヘキヤ余モ  
亦種々其情ヲ聞糺セシニ其人曰ク千八百廿八年英國軍艦長ピーチ  
川此島ヲ取リ陸ニ一標柱ヲ建テ銅版ニ之ヲ蔽ヒ此島ハ英國ニ屬  
セリトノ旨ヲ鵠刻セリ水師提督彼理カ日本ニ至リシ時暫シ此島ニ  
據合ヒ其時一船ヲ送り其船長ハ米國ノ名ヲ以テ此島ヲ取リ國旗ヲ  
建テ祝砲ヲ放テリ英ノ銅標米國ノ國旗共ニ今ニ存セリ九年前ニ德  
川將軍ハ吏人一名ト移住人六十戸程ヲ送り日本ノ名ヲ以テ此島ヲ  
取リレニ依リ外國移住人ハ望ニ任セ契約書ナト與ヘタルコトアリ  
又其外國移住人ヲ悉ク召集メ居住ヲ許サル、謝狀ヲ將軍ニ出スヘ  
キコト命シ其旨ノ如ク爲セタリ此ノ如クシテ十四ヶ月許ニテ日本

人ハ悉ク呼運サレ其後日本人アルコトナシ諸島ノ面ハ百五十英方里  
アリテ横濱ヨリノ距離ハ四百八英里ニテ神戸ヨリ五百英里アリ島  
地ニ法例定マラス教育モ無ク爭論屢起リ刑罰ハ立タズ日本ノ役人  
此島ニ來居セシ時ニ此諸島ヲ悉ク外國人ノ殖民或ハ通商スルニ任  
スト公告シタリ又余ハ彼カラス家畜ヲ布陸ニ積出サント計レリ去  
レト此等ノ事ヲ行フ前ニ何國ノ法律ニ服スヘキヤヲ聞カンコトヲ願  
フト是ニ於テ余其人ニ向ヒ此事ヲ國務卿ニ問ヒ此島ヲ米國政令ノ  
及フ所ト爲スカ否ラサレハ日本ニ屬スルカ若シ米國ニ屬ストセハ  
其人ヲ始メ其他ノ移住人中ニテモ一人ヲ選ヒ米國代理人ト爲スヘ  
キヤヲ問フヘシト談シ置ケリ以上ノ件々速カニ指令アラソコトヲ仰  
ク

同年五月三十一日華盛頓發ノ國務卿ノ答書ノ略ニ曰ク

敬理氏ノ船隊此島ニ到リ其一船長ハ取テ米領トセシトノ事ナレバ  
 蘭院ニ於テ明ニ之ヲ允シタルヲナシ其他米國政府ニテ彼ノ船長ノ  
 處置ニ次々此島ヲ米領トスヘキ事情ノ處置ヲナセシト無レ若レ米  
 國人カ此島ヲ開キ其住居トナスナラハ是レ米國政府其人ノ保護ヲ  
 爲スヘキ約束絶エテ無クシテ其事ヲ爲シタルナリ此等ノ邊方僻地  
 ニ立去ル者ハ其情形ニ依リ全ク歸國ノ念無クシテ本國ヲ見棄テ  
 ル者ト見做サ、ルヘカラス就キテハ米國人タルノ權理義務モ同時  
 ニ失ヒタル者ト知ルヘシ

然ルニ當時ヒース全島ニ據有スト中外ノ新聞紙ニ噴々タルニ由リ我  
 政府再拓ノ舉起ルニ英公使復タ我所屬ヲ詰問スレバ我斷然我屬ヲ以  
 テ答ヘ翌年冬我官吏島ニ至ルニ及ヒ英領事モ亦之ニ會ヒテ其說  
 英政府若レ此島ノ英人ヲ護ラハ此近傍諸島尙幾多ノ英人ヲ護ラザル

ヘカラス共ニ之ヲ棄テシテ若カストア往年ヒース島ニ據有セル船版實  
 島人ノ手ニ在ル者ヲ取上ケテ去レリト云フ且今回ノ接檢ニ島人皆默  
 然我管理ニ歸伏シ是ニ於テ始メテ純然タル我版圖ナルヲ公言スル  
 事得ケリ

小笠原氏カ之ヲ檢出シテ以來數百年其所屬曖昧トシテ歸スル所ヲ  
 或ハ英ニ米ニ魯ニ其所有ノ權ヲ爭ヒ殆ント我カ手ヲ離レントスル  
 數次然レバ初檢ノ事實敵フヘカラス當路迄ノ處置宜シキヲ得テ漸ク  
 ニシテ我物トナリタル經歷ハ讀者宜シク前陳ニシテ知ルヘシ今此  
 島ニ遊ビ各國ノ船舶カ來テ其國旗ヲ建テ其事由ヲ記シタル所ニ至リ  
 テ熱々往時ヲ思ヘハ轉テ慷慨ノ情ニ堪ヘス然レバ遙ニ旭山頂ヲ望ミ  
 我威臨九カ我國旗ヲ翻セシ當時ノ下ヲ思ヘハ又實ニ快哉ヲ呼ハサル  
 事得ハ喜憂交至ル天涯孤客ハ心情モ唯コレ既往ヲ以テ將來ヲ戒ム

ハハハ知ハハハハ小笠原島ノ我物トナル也何ソ偶然ナランヤ

夏見

○第十八 大村十一月ノ風光

大村ハ小笠原群島ノ本地父島ノ一大村落ニシテ島嶼ノアル所ナリ予等此ニ着ス實ニ本年十一月六日コシテ當時東京地方ハ漸ク秋風冷カニ近山ノ楓樹紅ヲ呈レ王子滝川ノ邊ハ雅客ノ杖ヲ曳キ秋ヲ賞スルモノ陸續斷ヘス然ルニ東京ヨリ南ニ航ス海路五百三十余哩行程日數僅カニ六日間ニシテ寒暖頓ニ異ナリ昨日ノ秋冷ハ變シテ今日ハ三伏ノ熱ヲ覺スルニ至レリ予等上陸シテ大村ノ海岸ヲ眺ムルニヒートリマナナ又マレナヒートリマナ又ヒートリマナ又琉球名ヤラボナ又パーナ又ソフストハハナハナ等ノ大樹陰德トシテ林ヲナシ幽巖挿スヘシ家々ノ庭園ニハ香蕉花咲ヒ實熟シ長葉暖風ニ翻ル椰子樹ハ高ク亭立シ護蔭樹ハ低ク葉茂ス仰テ東

西ノ諸山ヲ眺レハ峨々タル山腹ヒロクサ蒲葦林投ヒロクサ層々林立シテ其親自テ内地ト異ナルモノハ蓋シ地ノ熱帶ニ近キニヨルヘント雖モ亦實ニ風光ノ奇ニシテ寒暑ノ差異甚ダ著シキニ至リテハ一驚ヲ吃スルニ堪ヘズ

予等一日杖ヲ曳テ大村山又名アリ山ニ遊フ時ニ炎威赫々トシテ恰モ内地七八月ノ候ノ如ク携フ所ノ寒暖計ヲ見ルニ八十五度ニ達セリ山ハ高カラスト雖モ登攀ノ間常ニ熱汗ヲ拭ヘリ時々驟雨襲来リ己メハ乃チ炎威一掃ニ加ハリ苦熱云フヘカラス林中往々蟬聲ヲ聞キ又黄鵠ノ喧嘩ナルアリ予等元來風流ヲ喜ブモノニアラス然レモ何トナシ奇ヲ感シ妙ヲ覺ヘ獨自ヲ思ヘテ若シ雅客ヲシテ我ト共ニ此境ニ入ラシメハ佳吟玉琢ヲシテアタラ伎中ニ充タレムヘント予等志賀氏ノ南洋時事ヲ閱シ漳州客中ノ詩ヲ讀ムニ三月漳州秋色冷滿天風露露吟

夏見



島ト云ヘルコ至テ其實ニ南北球ヲ異ニシ季節ノ相反スルヲ意外ナルニ驚キタリシカ今ヤ該島ニ遊ンテ其事ノ相似タルヲ感シ予モ亦彼ガ口吻ヲ學ハサルヲ得サルニ至レリ然レニ地未ク熱帯ニ入ラス位置南緯ニ遠セス春秋相反スルカ如キ一種ノ風流アルナシト雖モ猶ホ不雅ナル予等ラシテ南洋十月風和暖柳樹陰深幽乱蟬ノ句アラシメタリ異境ノ風流モ亦奇ナラスヤ妙ナラスヤ

當時島人大抵夏衣ヲ着レ絶ヘテ重衣スルモノナク予等ノ如キ初テ内地ヨリ來ルモノナリト雖モ夜分ハ褌衣ヲ着レ氈布一枚ヲ被リテ眠臥スルニ寒暖宜シキニ適シ更ニ寒キヲ覺ヘス之ヲ聞クニ該島ノ氣候ハ盛夏ノ候室外陰處ニテ華氏ノ寒暖計最高度九十二三度ニ昇ラス嚴冬ノ節ト雖モ五六十度ニ降ルヲ稀ナリ終歲全ク霜雪ヲ見サルカ故ニ草木落葉スルモノ少ナク百蟲蟄セス四時戲關ノ聲ヲ斷タス盛夏ノ候ニ

ハ日光直射スルカ故ニ日中露天ニ勞動シ難シト雖モ室内ニアリテハ八十七八度ニ昇ラスシテ海風常ニ涼ヲ送リ以テ暑ヲ鎮ス殊ニ晩暮ニ至レハ清風來リテ止マサレハ夜間殘熱ニ苦ミ眠臥安カラサルノ慮ナレ故ニ島人全ク團扇ヲ要セスト云フ概レテ周嶺ノ氣候内地ノ如ク寒暑ノ大差ナキカ如シ母島ハ氣候父島ニ比スレハ更テニ温暖ニレテ植物ノ收期早キヲ數旬ナリ海風多ク雨横斜シ海岸波濤常ニ高シ殊ニ冬季春初ニ至レハ日々暴風雨多シト云フ

○第十九 陸産ニ三個ノ望ムヘキモノアリ

本島ノ氣候ハ熱帯ニ近キヲ以テ温帯地方ノ草木ヨリハ單熱帯地方ノモノ能ク繁茂ス地味モ亦肥沃ナルヲ以テ耕作ノモノ率テ長大ヲ致シ一年再收スヘキモノ多ク風土大ニ異ナルニヨリ曾テ内地ニテ見サル

奇木異草多シ樹木ハ極メテ高大ヲ蒙レ堅硬ナル良材多シト雖モ元來  
 彈丸大ノ小島ナルヲ以テ置リコ之ヲ伐觀セハ數年ナクヌシテ諸山禿  
 丘ヲ呈スルノ恐ナキ能ハス且松杉樺竹ノ如キ造屋必要ノ材ハ全ク産  
 セヌ多クハ珍奇ノ器材ナルヲ以テ人家ノ建築ニハ内地ヨリ輸入ヲ仰  
 カサルヲ得ヌ要スルニ陸上ニ在リテ永久ニ望チ屬スヘキ有用ノ物産  
 ハ少キヨ居ル近來珈琲<sup>ココア</sup>糖<sup>シュガー</sup>等ノ如キ移植勃アリト雖モ栽培保護當テ  
 惜ス多クハ湖澤萎枯シテ又見ルヘキナシ唯殊ニ子豐カ將來大ニ繁殖  
 レテ聊カ望アルモノ三ツアリ一ニ曰ク甘蔗ニ曰ク草綿三ニ曰ク山  
 錠<sup>シロ</sup>金是レナリ

該島ニ於テ元來甘蔗ヲ産セス近年ノ移植ニ係ル其種類四種アリ廣  
 東種布哇種臺灣種竹蔗是ナリ廣東種甘蔗又白莖ト稱ス十六年前鯨  
 ハ獵船支那地方ヨリ持渡リ甘蔗莖ヲ扞挿セシヨリ次第ニ繁殖セシモ

ノコレテ莖太ク黃綠色ニ微紅ヲ帯ヒ糖分ヲ含有スル極メテ多シ  
 生莖ヲ嚼ムニ甜液淋漓トシテ頗ル粘着ノ氣味アリ最上品トス土民  
 ニ問フニ支那種ナリト云フ之ヲ上海ヨリ得タル廣東種ノ蔗莖ニ比  
 スルニ頗ル吻合スルヲ以テ假ニ廣東種ト定ムト云フ莖極メテ肥大  
 ニシテ一莖二百七十目ヨリ三百目許ニ至ルヲ常トシ或ハ八百目許  
 ニ至リ徑一寸九分圓五寸七八分以上ニ至ルヨリ少ナカラス無比絶  
 大ノ蔗莖ト云フヘシ先年該島ヨリ携ヘ來リシモノヲ駒場農學校ニ  
 テ分析セシニ百分中十四ノ糖分ヲ含有シ居レリ後來大ニ望アル良  
 種ナリ布哇種甘蔗<sup>ブワ</sup>ヲ稱ス元來外船種ヲ傳フル所コレテ土民之  
 テ栽培セリ莖太ク綠色ニシテ紅色ノ條紋ヲ帯フ故ニ<sup>ブワ</sup>名アリ  
 又編莖ト云フ糖分較多クシテ廣東種ニ亞キ上品ナリ臺灣種甘蔗ハ  
 何ノ頃ヨリ傳ハリレヤ得テ知ルヘカラス莖太クシテ全部鮮紅色水

分多クシテ糖分較薄シ生ニテ噛ムニ宜レ品位布哇粗ニ亞キア其種ナリ土民ニ問フニ「マニツ」種ナリト云フ然レモ臺灣種ニ似タルヲ以テ此ニ定ムト云フ竹蔗ハ莖細ク堅硬勁直ニシテ黄綠色竹竿ノ如シ花穂ヲ生シ易シ糖分ヲ含有スルコト分外ニ少ナレト雖モ能ク強風ニ耐ヘテ倒レスト云フ

草綿ハ元來該島ノ産コアラヌ明治九年ニ舊勸業局ヨリ送致セラレタル米國產海島綿及相良某ノ持渡タル朝鮮綿等ヲ栽培セシメ其始トス就中海島綿ハヨク地ニ適應シ暖地霜雪ナキヲ以テ終歲莖葉枯ルハコナク全ク宿根本トナリ冬日ト雖モ花實絶ユルコトナク一二月ノ交採取スルヲ得ルト云フ初メ北袋深コテ之ヲ試作シタルニ一株ノ實數百二三十顆ヨリ多キハ百五十顆ヲ得毎株平均百五十顆ニ上レリ其中雨濕或ハ鳥ノ爲メニ損害セラル、チ二割トナスモ霜收

實平均百二十顆アリテ此綿絮ノ量正味三十目アリ線綿ハ長湖二十顆コレヲ凡二十目余ヲ得タリ絮ハ長サ一寸四五分コレヲ光澤恰モ絹絲ノ如シ最良ノ綿絮コレヲ歐米州ニ於テハ大コ之ヲ賞美シ其價甚タ貴シト云フ

山靛鬱金ハ従前鹿兒島沖縄ノ阿蘇ニ培養スル植物コレヲ其質鬱藍ト異コレヲ栽培ノ法モ却テ易ク莖芽ヲ挿シテヨク生育ス物ヲ染ムルニ其色澤鬱藍ニ優ルアルモ劣ルコトナシ近時阿蘇ヨリ苗ヲ傳ヘ栽培スル所ナリ生育ノ景況頗ル宜シク之ヲ藍靛ニ試製スルニ其質甚タ佳良コレヲ好結果ヲ得タルヲ以テ今ヤ逐日盛ニ栽培シ之レカ輸出ヲ計畫セリト云フ

以上三者ハコレ實ニ小笠原島陸産中將來ニ望ミアルモノナリ就中甘蔗ノ如キハ内地其産ナキニアラヌト雖モ收支常ニ相償ハスシテ製糖

ノ事蹟ヲ逐テ退却シ今ヤ海外ノ輸入益加ハリ薩ト云ヒ讚ト云ヒ其名  
 將ニ滅亡セントスルノ傾アリ此時ニ方リ此損耗ヲ防カントスルコハ  
 第一風土其栽製ニ適シ得失相償フノ地ニアリテ一層其事業ヲ振作ス  
 ルヨリ好キハナシ幸コレテ該島蔗作ニ適シ殊ニ父島ヲ最良トス近來  
 島嶼ノ保護厚ク與フルニ各種ノ器械等ヲ以テ之爲メニ一般ノ氣勢ヲ  
 振作レ既ニ北袋澤村ノ如キハ從來荒蕪ニ屬シタル地モ概テ蔗田ニ變  
 レ栽培地貳拾余町步ヲ増セリト云フ故ニ一年漸ク三四百樽ノ製糖  
 本年ハ八千樽以上ノ見込ナリシヲ聞ケリ果シテ此勢ヲ以テセハ日ナ  
 ラスニテ本島ノ一物産トナリ幾分カ内地産ノ不景氣ヲ挽回スルニ足  
 ランカ勉ヘキナリ草綿ハ甘蔗ト併行スヘキ物産ニシテ多クハ母島  
 ニ栽培ス該島ハ一般ノ氣勢農業ニ傾キ取分ケ草綿栽培ニ勉努スルヲ  
 以テ輸出モ年一年ヨリ増加スルカ如ク既ニ本年ノ如キハ早勉ノ爲メ

多少ノ損害アリシモ尙二千余圓輸出ノ見込アリト云フ二千余圓ノ金  
 額些少ナリト雖接蘭タル島地ノ産額ナリトシテ見ルハ又甚メ輕ス  
 ヘキモノコアラサルヲ知ルナリ山旋鐵金ハ從前長谷村ニアリテ僅ニ  
 栽培セシモ近年島嶼ノ獎勵ト東京鐵會社トノ特約トニヨリ氣勢頓ニ  
 勃興シ栽培地増シテ十余町步ニ及ヘリ畢竟此植物ノ父島ニ適スル所  
 以ハ氣候ノ温暖ナルハ勿論彼レカ爲メニ最モ恐ルヘキ風害ト鹿害ノ  
 少ナキコソルナルヘシ今日島民他ノ作ヲ廢シ專ラ之レカ栽培ニ從事  
 セントスルノ傾向アルヲ以テ將來物産中其首位ヲ占ムルニ至ルモ測  
 ルヘカヲササルナリ  
 夫レ斯ノ如クコレク此三物産ハ將來該島ノ經濟ヲ持スヘキ有益物  
 ナルニ疑ハ容ルヘカヲスレテ子輩ハ切ニ望ムヲ今ヨリ此島ニアル  
 モハハ勿論縱令新クニ移住スルモノナリト雖モ安リニ各種ノ物産ニ

眩目、ス、取、此三者ニ向テ一層ノ心カヲ尽スルハ益其産額ヲ増シ其  
品質ト聲價ヲ嵩ムルニ至ルヤ知ヘレ殊ニ砂糖ト云ヒ綿ト云ヒ蔗ト云  
皆内地必需ノ物品ナルモ其供給ノ區域日ヲ逐フテ縮退スルノ今日ナ  
レハ苟モ此時ニガリ之ヲ勉メテハ富ニ一島ノ利益ナルノミナラズ我  
帝國一般ノ裨益タル決シテ尠少ニアラサルヘシ豈ニ夫レ之ヲ勉メサ  
ルヘケンヤ

○第二十 海産ニ三個ノ望ムヘキモノアリ

小笠原島ハ我南洋ノ群島ナリ煙波渺茫ノ中無數ノ島嶼星羅棋布ス其  
沿海魚翅ノ利少ナカラスト云フ元來諸島ハ彈丸黑子ノ地ナルヲ以テ  
敢テ陸産ニ於テ大望アルナク唯海産ニヨリテ全島ノ經濟ヲ利スヘシ  
海産ノ種類素ヨリ二三ニ止マラスト雖モ殊ニ該島將來ニ望ミアル有

益物産ニ至リテハ僅々數フルニ足ルノミ予等初テ此ニ到ル先海産  
ノ饒多ナルヲ耳ニレ喜テ其調査ニ着手シタルニ何ソ國ラン無益ノ珍  
魚奇介ハ甚タ多クシテ或ハ世ノ博物者流ニ利スル處アルヘキモ要ス  
ルニ該島ノ經濟ニ關係レテ將來我南洋ノ大利大益ナリト稱道シ得ル  
モノ頗ル乏シキヲ知レリ加ルニ海底概テ珊瑚礁ヨリ組織スル俗コレ  
ヤボアノイレト稱スル植蟲ノ岩石多ク網ヲ投スレハ是等ノ岩石ニ懸  
リテ破損ノ恐アルヲ以テ漁法モ亦ク隨テ開ケス僅ニ釣漁ノ一法アル  
ノミ故ニ予等ノ究ムル所ニアツテハ誠ニ此島ノ海産ニ於テ大ニ望ム  
ヘキモノ少ナシ而レテ漁船ハ僅ニ内地形ノモノ數艘アレモ多クハコ  
ノ一船ヲ用ニ此船ハ丸木ノ刳舟ニシテ巾凡ソ二尺長サ一丈乃至二丈  
片舷ニ板羽ヲ施シ覆ヘルヲ防ヤ撥ニ大ナル杓子ノ如ク頗ル迅疾ナル  
モノナリ現ニ父島ニ三十艘母島ニ二十二艘アリ南洋人ノ傳フル所ナ

ト云フ唯幸ニシテ漸々茲ニ三個ノ利益ヲ發見セリ其三大利トハ何  
ソヤ一ニ曰ク鯨ニ曰ク海豚三ニ曰ク鯨魚是ナリ

鯨ニ種類多シ從來内地沿海ニ在リテ捕獲スルモノハ背美小鯨長鯨  
坐頭鯨巨頭鯨等ノ諸鯨ナリ然ルニ該島近海ニ來游スル鯨ハ今回ノ  
調査ニヨリレハ坐頭鯨多シトシ抹香鯨之レニ亞クモノ、如シ本  
邦ニ在リテハ其肉食ヲ貴フカ故ニ背美小鯨ノ如キハ品質宜シキヲ  
以テ賞セラルルニ外人ハ却テ然ラス單ニ油臘ヲ目的トスルカ故ニ殊  
ニ抹香鯨ヲ賞スト云フ此近海ハ鯨ノ來游スルニ甚ク多ク就中母島  
群嶼中平島ノ邊ヲ最トス又父島群嶼中本島ト兄島ノ海峽ニモ極メ  
テ多シト云フ古來外國ノ鯨獵船年々二見港ニ來泊スルモノ幾艘ナ  
レタ知ラス昔此近海ニテ鯨獵ヲナスカ爲メナリ安政中米公使ハル  
リス我官吏ト談話ノ序ニ今山ニ登テ洋中ヲ望メハ各國ノ船泊此近海

ニ捕鯨ノ巨利ヲ取去ルニ付テ之ヲ顧ミサル豈惜ムヘキトナラスヤ  
ト慨セシテアリタリ之ヲ見ルニ該島鯨利ノ大ナルヲ知ルニ足ルヘ  
シ文久元年土佐ノ人中濱萬次郎氏之レニ就テ獻議シ同年七月米  
國鯨船ノ乗員佛人某我吏人ノ許ヲ得テ境浦ニ在住ス此人捕鯨ノ術  
ニ長シタレハ港中ニ來ル鯨ヲ獵セント履テ移住民等ニ其術ヲ傳習  
セシム明年平野慶藏ナルモノ官許ヲ得テ中濱氏ヲ船長トシ此佛人  
ヲ雇ヒ近海ニテ二鯨ヲ獲歸國ス明治二年京都ノ人谷陽卿此島開拓  
結社ノ許ヲ得テ將ニ發セントシカ明年官若手ノ擧アルヲ以テ暫  
ク止メラル爾來鯨獵ヲ志シ波島スルモノアリト雖モ未ダ其功ヲ奏  
スル能ハス現ニ伊豆ノ人木野某氏ハ母島ニ在リ着手ノ計畫中ナリ  
海豚モ亦種類多ク内地沿海ニアルモノハ真海豚坊主海豚鯨海豚等  
其他數種類アリ然レモ該島近海ニ來游スルモノニ至リテハ未ダ一

唄ダモ捕獲セレヲナキヲ以テ其種類ノ何タルヲ何知ルニ由ナシト雖此聞ク所ヨレハ真海豚ナルカ如シ風波靜穩ナルノ日ハ四時ノ何レヲ問ハス外洋ハ勿論二見港内ニ入來ルモノ幾百千頭ナルヲ知ラス從來島民其利ヲ知ルモ捕獲ノ術ヲ知ラス故ニ之ヲ捕ヘシモノナシ近年有志者之ヲ捕獲セントシ予カ在島ノ際右漁具調製ニ就テ計畫スル所アルヲ聞ケリ

鯨魚ハ此近海極メテ多ク今回ノ調査ニヨルニヒラガレテアイザメニテ多レトスウサバ、ソコ、シユモク、チコザメ、アカブカ、メイラ等ノ種類アリト云フ之ヲ漁スルニハ外洋ニテ洶洶急激ノ場所ニ於テス先年土佐ノ人清洲喜十郎氏自ラ漁船ヲ携ヘテ該島ニ移リ境浦ニ居住シ盛ニ鯨魚ヲ漁シ甚シキハ一日二三百尾ヲ獲レテアリ此等ヲ製シ神戶横濱等ニ輸出シ一時巨利ヲ占メシカ中途故アツテ廢シ今ハ其從者

アリシ同國人依岡伊太郎氏ハ母島コソリ同小松鹿三郎氏ハ父島コソリテ僅ニ其事業ヲ存ス然レモ鯨魚ハ獲キ甚メ多シト云フ

夫レ斯ノ如クニレテ此三者ハ小笠原島海産中主要ノモノコレヲ該島ノ經濟上ニ於テ將來至大ノ關係ヲ有スルモノハ實ニ此ニアリ此ニ云ハスヤ捕鯨ノ利ハ七浦ヲ問フト鯨ノ大利益アル殆ント他ニ比スヘキモノナレ然レモ其起業ノ容易ナラサルカ爲メコ人其利ヲ知ルモ其利ヲ得ルヲ能ハス要ハルニ此近海ノ鯨獵ハ洋式折衷ノ方法ヲ以テ父母兩島ヲ本據ト定メ時々出漁ノ策ヲ施スルハ敢テ莫大ノ費用ヲ要セサルヘシ殊ニ抹香鯨ノ所在ヲ究メテ全ク洋式ヲ用ヒルモ可ナリ歸化人中ニハ捕鯨ハ水手多クシテ能ク其事ニ熟スルヲ以テ之ヲ使役シテ其業務ヲ實行セシムルハ一舉兩得ノ策ニシテ其奏功期スヘキナリ海豚ハ鯨ニ比スレハ其捕獲甚メ容易ナリ而カモ鯨ニ亞テ大利用アリ

地ニテハ能州七尾港等最モ盛ニ之ヲ漁ス奉テ菓網ヲ以テルカ故ニ漁具ノ調製モ亦僅少ノ費途ヲ以テナレ得ヘシ聞ク所ヨレハ其來游ハ場處ハ二見港内ナリトモハ僅ニ野羊山外ノ港口ヲ一括スルハ恰モ膏中ノ物ヲ探ルカ如ク一舉大利ヲ得ヘキヲ信スルナリ島民ノ計畫果シテ好結果ヲ得ンニハ該島ノ經濟上非常ノ影響ヲ來タスヘシ予輩ハ其着手ノ一目ニ速カナランコトヲ望ムナリ鯨魚ヲ捕ルコトハ釣ヲ以テレ捕獲ノ容易ナル三者中ノ最タリ其利用ハ殊ニ廣クシテ鮭ハ製レテ魚翅ト稱シ軟骨ハ製レテ明骨ト唱ヘ清國ニ大販路アリ肉ハ食スヘク油ハ搾ルヘレ溝淵氏既ニ之ヲ捕ヘテ大利ヲ占メタルカ故ニ予輩カ今愛ニ喋々セスト雖凡之レカ利益ハ明白ナラン(鯨魚ノ事ハ後ニ詳ナレ故ニ略ス)小笠原島海産中起スヘキモノハ實ニ以上ノ三者ノリテ各之レカ利益アルヘキハ予輩ノ信シテ且疑ハサル所ナリ然レモ事業ニ難易アリ

又緩急アリ其易キモノハ先ニ難キモノヲ後ニシ其急ナルモノヲ始メトシ其緩ナルモノハヲ末トナスハ事業ノ順序ニシテ此順序ヨリ片ハ敢テ失敗ノ患ナキモ苟モ之ヲ倒轉レテ強テ難ヲトリ緩ニ就クハ忽チ其目的ヲ失スルモノ古今ニ徴レテ明カナリ予輩ハ平生鯨魚熱心ノモノナリト雖凡然レテ今日ニ當リ殊ニ該島ノ爲メニ意ヲ第一鯨魚漁業ニ着手シ第二海豚獵ニ着手スルヲ以テ實ニ安全ノ策トナスノミナラス將來ノ經濟上却テ幾多ノ利益ヲ承クヘキヲ信スルナリ世ノ此等事業ニ着手セントスルモノ實クハ其本末ヲ轉倒スルナク若シ大利益ヲ博センコトヲ切望シテ已マサルナリ

因ニ云々綠藻アノコウキモ亦前三者ニ次テ利益アルモノトス此藻ハ内地沿海ノ赤藻アカカサト異ナリ常ニ海藻ヲ食トスルカ故ニ味之レニ勝リ其甲ハ寇甲ニ擬スヘク油ハ諸用ニ供スヘシ現ニ該島ノ名産ニシテ收益モ



○第廿一 遂ニ鯨島ヲ望テ成アリ

煙波森々ノ中、數點ノ島影、蒼クカ如ク星羅棋布スルモノ、乃チバアレー  
 群島ニシテ北ノ島、鯨島、煤島、等ヲ云フナリ。予等十一月六日夕陽將  
 ニ没セントスル頃、船中ヨリ遙ニ之ヲ眺メ、夜ニ入り、島影ヲ失シ、月浮テ  
 又之ヲ暗々裏ニ觀遇シタリ。當時予輩ノ感果シテ如何之ヲ祝ル、恰モ落  
 日孤城ノ嘆ナキヲ得サリシナリ。熟々惟ミルニ、虛名ハ賈リ易ク、實功ハ  
 求メ難シ。今ナ距、數年前田中鶴吉ナルモノ、颯然トシテ此群島中ノ本  
 地ケイタ島即チ鯨島ニ移住シ、獨リ自ラ牛羊ヲ牧シ、風ニ櫛リ雨ニ浴シ  
 經營既ニ年アリ、蓋レ聞ク同氏ハ江戸狹穴ニ産レ、幼ニシテ不羈ノ性アリ  
 父母之ヲ愛ヒ、其爲ス所ニ任ス。年十二ニシテ外船ニ伴ハレ、始メテ米

國桑港ニ着シ、數年ノ間人ノ使役ヲ受テ、後終ニ志ヲ立テ、岩島ノ天  
 日製鹽場ニ入り、進勉年アリ、其秘術ヲ修メテ歸朝ス之ヨリ先キ米國ニ  
 アルノ日、牧畜家前田喜代松氏ニ邂逅シ、告グルニ志ヲ以テス。前田氏深  
 ク之ヲ感シ、歸朝ノ後百方加擔、尽力レ製鹽ノ實功ヲ奏セシメントス。然  
 レモ不幸コレヲ計畫悉ク誤リ、又如何共ナス能ハス。於是前田氏ノ事業  
 ヲ助ケ、暫ク時機ヲ待タント欲シ、終ニ此島ニ移レリト云フ。其不幸憐ム  
 ヘク、其蒙贈賞ノヘレ、田中氏カ移住ノ後數年、我海軍ノ士官等之ヲ訪ヒ  
 始メテ氏ノ經歷ヲ得其内地ニ歸ルヤ之ヲ時事新報ニ掲ケテ、東洋ノ小  
 ヲピンソント迄賞揚スルニ至レリ之ヨリ世人喋々其偉業ヲ賞シ、就中  
 舊テ渡島ヲ企ツルモノアリ、予等モ其名ヲ聞テ私ニ之ヲ欽慕シ、其傳記ヲ  
 ル出世鏡一冊ヲ購ヒ之ヲ讀テハ、感涙ヲ浮ヘ、ルヲアリ、故ニ小笠原島ニ  
 赴ケハ先ツ殊ニ同氏ニ會シ、之レカ事業ヲ目撃シ、聊カ前途ノ參考ニ供

セント欲レ獨リ自ラ期スル所アリシカ子輩カ渡航ニ先ツ數月同氏ハ  
 製糖事業ノ爲メ米國ニ赴キアリシヲ聞ケリ而シテ其歸朝ノ何時ニアル  
 ヤ知ラサルモ苟モ既ニ一事業ニ從事スルノ身ナリセハ必ズ速ニ歸テ  
 再ヒ之レニ從フナラント思考セシカ何ツ國ラン聞ケル所ニコレハ同氏  
 ハ強ク不拔素ヨリ尋常ニアラザルモ曾テ新誌冊子ノ假スルカ如キ  
 アルナリ又製糖ノ事業ニ於テハ其結果甚ク宜シカラズ島中ノ人望モ  
 漸ク墜去テ又如何トナスヘカラス是ニ於テ米國ニ赴キタルヲ以テ未  
 ダ歸朝ノ日ハ遠キコアルヘシト云ヘリ今ヤ數人ノ從者ハ孤島ニ殘リ  
 僅々ナル牛豚ヲ牧シテ偏ニ氏ノ補給ヲ待テリト嗚呼其始ノ盛ニシテ  
 何ツ終ノキ嗚呼其名聲ノ高フシテ反テ實功ノ少ナキ子輩カ豫想ト全  
 相反シ今ヤ子ヲシテ落日孤城ノ嘆慨ヲ起サシムルモノ夫レ果シテ  
 誰ノ罪ソヤ切ニ望ム田中氏ニシテ若レ幸ニ早ク此ニ歸リテ其從者ヲ

慰勞シ其牛豚ヲ愛護スルノ日アラハ是レ特リ同氏ノ爲メノミナラス  
 實ニ本島ノ爲メニハ樹少ニアラサキヲ信スルナリ

○第廿二 小笠原島ノ農業及牧畜ト家禽

小笠原島ノ地タル全島山谷深阻ニシテ平曠ニ乏シト雖モ地味肥沃ニ  
 加ルニ氣候恒ニ暖燠ナルヲ以テ熱帶地方ノ草木全島ニ茂生シ傳ヘ植  
 ヌル所ノ植物モ亦極メテ長大ヲ致シ一歲數回ノ收穫ヲ得ヘキモノア  
 リ或ハ花實相續キ斷ヘス採收スヘキモノアリ或ハ内地ノ一年草ニシ  
 テ本島ニ在テハ木本トナリ數年凋枯セサルモノアリ土壤ハ赤道露土  
 或ハ黒植葉土ニシテ石礫少ナク粘質多シ海邊ノ平地ハ黒植葉土ニシ  
 テ介殼植葉等ノ碎粉ヲ混交シ殊ニ肥沃ナリ母島ハ地味父島ヨリモ肥  
 ヘ岩石モ亦少ナク樹木更ラニ高大ニシテヨク繁茂セリ島中泉流多ク

飲水灌溉ノ不便ナシ諸島ノ地勢皆高突ナル火山性ニシテ岩石多ク岸  
 邊ハ峻嶮礮斥相連リ處々珊瑚礁ヲ以テ成レリ岬角ハ皆斷崖ニシテ特  
 塔或ハ鬼獸ノ狀ヲナシ奇怪名狀スヘカクサルモノ多シ  
 斯ノ如キ土地ナルヲ以テ島中ノ農業ニ至リテモ見ルヘキモノアルカ  
 如レト雖モ元來此地ハ農業ニヨリテ立ツヘキ所ニアラス故ニ農産物  
 ト稱シテハ敢テ著名ノモノアルナク僅ニ甘蔗草綿ノ類ト一二ノ果實  
 アルヲ見ルノミ必竟掌火ノ小島ニシテ耕スヘク作ルヘキノ土地ハ限  
 リアリテ縱令之ヲ誘導勸導スルモ終ニ後來ニ大望アリト云フヘカク  
 ナレハナリ然レモ其農産ニシテ一朝ヨリ此土地ニ適スルモノアルニ  
 至リテハ地味肥沃ニ且氣候暖和ナルカ爲メ敢テ内地ノ如ク十分ノ  
 勞力ト費用ヲ要セスシテ意外ノ收穫ヲ得ヘシ殊ニ又終歲霜雪ヲ見サ  
 ル土地ナルカ故ニ内地ニヨリテ未ダ市場ニ出テサルモノ早ク既ニ得

ヘキモノアリ又内地ニヨリテ既ニ尽クハモ此島ニアリテハ猶未ダ  
 收ムヘキモノアリ故ニ今日ヨリ武ハ航海ノ便ヲ増スニ至リテハ農業上  
 ノ收益ヒ亦少ナカラサルヘキナリ予カ即チ津田仙君ハ此島ヲ以テ  
 蔬菜類ヲ早作スル我國ノ青房トナスノ意見ヲ吐露セラレンコトアリ  
 カ予輩モ今此ニ到リテ農業上ノ收穫ハ果シテ何レユアルヤ一言ハ  
 ニハ草綿甘蔗ノ栽培ハ勿論ノ事ナリト雖モ農作上普通物産ニ至リテ  
 ハ早作ノ甚ダ利ゾルヲ知ルナリ而シテ之ヲ作ルヘキノ地ハ父島ニア  
 ラス却テ母島ニアリ母島ノ地ハ父島ニ比スレハ大ニ肥沃ニシテ氣候  
 モ一層ニ暖和ナレハ今之ヲ拓テ此計畫ニ従事スルニハ甚便利ニシテ  
 殊ニ母島ノ人氣ハ偏ニ農業ニ傾向スルノ有様ナレハ此處ニ在リテ之  
 ヲ起サンニハ必スヤ十分ノ利益アルヘキヲ信スルナリ  
 今先ツ其試作ト既ニ廣ク栽培スルモノトテ問ハス本島ニアリ農産物

ト其他農家ノ兼作スヘキモノヲ述ブニ概テ左ノ數種ニ止ル

穀菜類

稻 小麥 玉蜀黍 豌豆 蠶豆 毋島豆 粟 蕎麥 甘藷 絲葱  
番茄 茄子 菜菔 蒺藜類 番杏 南瓜 馬鈴薯 ヤム アルロ  
— ル— ト スイモク 水芋 蕃椒

果蠟類

檸檬 甜橙 酸果 番石榴 荔枝果 ドウクウ 椰子 香蕉 鳳梨  
梨 西瓜 甜瓜 ヒーカン バカイモ 山芋

各用植物類

甘蔗 草綿 煙草 咖啡 阿利機 彈力護膜 其他染料樹木類

右ノ内單ニ農作物ト稱スヘキモノハ僅ニ穀菜果蠟ノ類ニ止ル此類中  
ニア予輩カ所謂早作ノ利アリト稱スルモノハ蔬菜ノ類ニ多クシテ稻

内地ヨリ舶來種子ヲ輸入シテ栽培シテ而テ其用ニ供スルモノナリ  
若シ幸コシテ其口のヲ失セザランニハ實ニ是レ本島ハ天賦自然ノ好  
青房ト稱スルモ敢テ過言ニアラサルヲ信スルナリ

本島ハ氣候斯ノ如ク暖和ニシテ上地斯ノ如ク肥沃ナルカ故ニ家畜ノ  
餌料トナルヘキ牧草ノ種類モ甚タ多ク且ツ四時枯槁スルコトナク新葉  
相續テ生レ常ニ青艸ノ需用ヲ欠カサルハ是レ内地ニアリテ見ルヘカ  
ラサル所ニシテ此島家畜ノ利益アル所以ナリトス家畜ノ動物ハ牛豚  
野羊等ニシテ家禽ニ雞家鴨番雞白鷄國雞アリ馬及羊ノ如キモ素ヨリ  
適スヘシト雖モ未ダ十分ノ經驗アルヲ聞カス而シテ此豚及野羊ノ如  
キハ往時放牧ノモノ今猶ホ野生トナルアリ雞モ亦然リ茲ニ逐一其家  
畜ノ狀況ヲ記スヘシ

牛ハ從前ヨリ土人ノ家ニ養フモノアリ又放牧ノモノアリ彼理氏カ

曾ア移セシ所ナリト云フ跡小コシテ力弱ク色黒ク又駁白ノモノアリ  
西班牙種ナルヘシト云フ近來移住人十二三名相謀リ南嶺ニ一牧  
場ヲ設ケ初寐浦ヲ分牧場トシ總計卅余頭ヲ畜ヘリ又母島ニモ之ヲ  
養フモノアリ其他放牧ノモノモアリテ現ニ父島ノミニモ七十二  
三頭アリト云フ殊ニ又鯉島ニテ田中鶴吉氏ノ牧セシモノ等ヲ計算  
スル所ハ少クモ百三四十頭ノ數ニ上ルナルヘシ概シテ牧牛ノ事ハ  
年々盛大ニ趣シ勢アリ

豚ハ元ト移植セシモノナレバ多クハ野生トナル毛粗クシテ硬ク色  
黒シ利牙アリテ其狀殆ント野猪ニ似タリ土人ハ常ニ犬ヲ以テ之ヲ  
獵シ食川トス文久中我吏人數十頭ヲ父島ニ放テリトノナレバ今  
ハ殆ント獵シ尽シテ反テ母島ノ山中ニ多シ性狂暴ニシテ之ニ違  
ハ往々人ニ迫ル犬モ爲メニ害セラル、トアリト云フ人家ニ養フモノ

ハ極メテ少ナクシテ唯鯉島ニハ田中氏ノ養フモノアリト聞ケリ  
山羊ハ諸島ニアレバ兄弟島鯉島及東島ニ多シ今ハ野羊島ニハ無シ彼  
理氏嘗テ父島兄弟島ニ牛羊數多ク放テシカ山羊獨リヨク殖スト云フ  
該島ノ山羊ハ三種アリ父島ノ産ハ小ニシテ東島ノモノハ大ナリ土  
人ノ多ク西班牙種ナリト云フ兄弟島ノモノハ又別種ナリトゾ東島ニハ  
甚ク多ク遠ク望ノハ鷲ノ群ルカ如シ性鈍ニシテ能ク人ニ馴レ手捕  
スヘシ其毛色一ナラズ茶褐色ナルアリ白黒斑駁ナルアリ黒色ナル  
等アリ其毛ハ甚ク薄クシテ硬ク織物トナシ難シ又毛皮トナシテ賣  
ルモ價極メテ廉ナリ其肉食フヘシト雖モ味美ナラズト云フ又土人  
ノ養フモノアリテ父島ニハ現ニ二十四頭アリト聞ケリ

夫レ斯ノ如クシテ牛豚山羊ノ其土地ニ適スルヲ知ルヘシ綿羊ノ如キ  
ハ近年鯉島ニアリテ之ヲ飼育スルヲ聞ケバ其景況ヲ詳ニスル能ハス

牧畜寮ノ説ヨレハ牛豚等ノ家畜ハ之ヲ廣漠ナル北地ニ養フヨリハ  
 寧ロ暖地ニ滴スルモノニシテ殊ニ此島ノ如キハ四時牧草アリ加ルニ  
 元來絶海ノ島地ナルカ故ニ彼ノ原野ニ放牧スルニ用ユルカ如キ構大  
 ナル柵欄ヲ要ヒスシテ是レ頗ル費用ニ關係アルモノナリ又猛獸竊盜  
 ノ患ナクシテ與羽北海道等ノ如キ廣漠ノ野ニ養フヨリ百般ノ事甚利  
 便アルヲ以テ唯將來養育ナル和畜ヲシテ愈々蕃殖セシメムハ終ニ  
 我南洋ノ大産物タルヲ失セサルヘシト寔ニ宜ナリト謂フヘシ尙又左  
 ニ家禽ノ事ヲ述ヘシ

雞ハ父島山中野生アリ飛フニ雄ノ如シ雄實中島谷氏ノ放テシモノ  
 繁殖セシカ文久中我吏人ヨ昔テ數百羽ヲ放テリト而シテ土人モ亦  
 之ヲ飼養スルニ其生長甚ク健全ニシテ殊ニ食餌ノ如キハ朝ニ山ニ  
 入りテ之ヲ求メ夕ニ巢居ニ還ルト云フ故ニ飼育ノ勞少ナシト雖モ

其山ニ入ルモノ遠ニ還ラサルノ患アリ

家鴨ハ土人之ヲ養フ敢テ内地ノモノト異ナルヲナシ然レモ其生育  
 ハ又甚ク宜シト云フ

鶉鴨ハ歸化人カ古來養育スル所ニシテ移住人モ亦之ヲ養フモノア  
 リ油膩多ケレモ其味甚ク宜シ是レ元來外船ノ傳フル所ナリト云フ  
 白鷺國鷄ハ歸化人概テ之ヲ養ヒ食料ニ供ス然レモ其數甚ク多カラ

此島ノ家禽中鷄ノ養育ハ最モ將來ニ望ムル事業ニシテ近來内地ハ如  
 キモ家禽ノ利ヲ説クモノ多ク殊ニ或家禽家ノ如キハ此島ヲ稱シテ本  
 邦中殿上ノ養雞地ト迄云フニ至レリ要スルニ氣候風土ノ大ニ適スル  
 カ爲メニ其飼養ノ殊ニ容易ナルニヨリナリ將來牧畜ト共ニ益々其事  
 業ハ歩々進メナハ元來需用多クシテ供給ニ乏レテ畜産ナルカ故ニ必

至ハ十分ノ利益アリテ大ニ本島ノ經濟ヲ補フニ足ルヘイモ、ハ、ハ、  
至ラント世ハ此事業ニ志アルモ、ハ、宜シク將ニ計畫スヘキナリ

○第廿三 紀文ノ軌事ヲ懷フ

小笠原島ニ一ノ佳産アリ黎檬ト云ヒ甜橙ト云フ其ニ外船ノ種ヲ傳フ  
ル所ニシテ初ノ歸化人ノ家園等ニ二三株ヲ視ルノナリシカ今ヤ移  
住人モ亦之ヲ栽培スルニ至リ大ニ繁殖ノ摸樣アリ

黎檬ハ丈餘ノ大樹ト雖モ皆一株ヨリ數木叢生シ絶テ甜橙ノ如ク直  
幹喬立スルモノヲ見ス枝ニハ刺針多シ葉ハ長楕圓ニシテ先尖ラス  
枸橼或ハ佛手柑葉ニ似テ薄ク數多ノ細油點ヲ帯ヒ葉柄全ク翅狀ナ  
ナサスモノアリ或ハ微シク翅狀ヲナスモノアリ嫩芽ハ綠色ニシテ  
花ハ四辨ノモノ多ク或ハ五辨ヲ雜ヘ莢ク白色ニシテ香氣高シ其實

楕圓ニシテ先々突起シ長サ二寸ヨリ二寸四五分許ニ至リ外皮凹凸  
ナク面滑澤アリテ細油胞多シ生ハ綠色ニシテ熟スレハ黃色ニ變ス  
皮薄クシテ五六厘ヨリ七八厘許ニ過キス皮ヲ破レハ香露面ヲ撲ツ  
瓢盞十一二個アリ沙瓢酸ニシテ漿液極シテ多シ綠色ノ者其液量  
ト酸味黄色ノ者ニ優レリ島民探テ米酢ニ代ヘ日用飲料ニ供シ又内  
地へ輸出ス

甜橙ハ其葉尖頭蛋圓形ニシテ大キク面光澤アリ葉柄著ク翅狀ヲナ  
シ臭橙葉ニ似タリ樹性幹皮モ亦臭橙樹ニ髣髴タリ枝ハ刺針多シ春  
夏ノ交花ヲ發キ秋冬ノ候果實黃熟スルニ唯一歳一季ニ止レリ果ノ  
形ハ圓クシテ臭橙ニ近シ面平滑ニシテ皮薄ク淡黄色ニシテ瓢盞ト  
分離シ難ク瓢肉多漿液甘微酸ニシテ味上品ナリ形色舶來ノモノニ  
異ナラス歸化人之ヲ購ケル價甚タ廉ナラス益シ其産額ホ少ナキニ

黎橙甜橙共ニ内地其産ナク然レモ之レカ需用ハ甚ク多キヲ以テ常ニ  
 外産ノ輸入ヲ仰ク殊ニ甜橙ヲ多シトス黎橙ハ其漿液ニ砂糖及水ヲ調  
 和シレモチードヲ製シ清涼ノ飲料トスヘク又藥用トナレ菓子トナス  
 ヘキ甜橙ハ蜜柑既ニ尽クルノ日出テ食卓上ノ美肴トナリ其他飲料ニ  
 藥用ニ効用多ク夏日洋風糊理ニ供スルモノ外人殊ニ之ヲ賞スト云フ  
 斯ル如キモノナルカ故ニ之ヲ輸出スルニ至レハ其需用モ甚ク多カル  
 ヘシト雖モ本島ノ如キ未ダ挿接木ノ法ヲヨクスルモノ少ナク栽培ノ  
 法甚ク拙ニシテ今日大ニ力ヲ尽スニアラサレハ未ダ此ニ到ル能ハ  
 サルナリ

昔紀ニ一奇商アリ紀國屋文左衛門ト云フ氣宇沈澗コシテ細行ヲ修メ  
 ス尤モ奇計ヲ喜ヒ心算ニ妙ナリ此國ノ堤封多ク蜜柑ヲ植ニ以テ租税  
 ニ充テ毎歲船載シテ之ヲ三都ニ鬻ク市利距離往々遠キ致スモノアリ  
 此際東海風浪大ニ作リ四方ノ海船江戸ニ輻輳スルモノ皆風ヲ怖レテ  
 敢テ發セス故ニ以テ江戸ノ蜜柑俄ニ其價ヲ増シ一顆率テ二三錢ニ至  
 ル都人頗ク引ヤテ日ニ其入港ヲ望ム紀文之ヲ聞キ海ニ航シ蜜柑ヲ輸  
 サント欲ス會ニ邑人海船ヲ藏スルモノアリ其敗漏用ニヘカラサルヲ以  
 テ解キテ薪材トナサントス紀文假リヨ之ヲ修理ス三數日コシテ工ヲ  
 竣テ乃チ揚言シテ曰ク能ク風浪ヲ得レ海ニ航スルモノアラハ人毎ニ  
 百金ヲ與ヘント人皆其虛妄ヲ哂フ一人アリ之ニ應ス輒テ百金ヲ與フ  
 愈テ駭テ曰ク紀文ハ信人ナリ豈食言シテ人ヲ欺クモノナクンヤト近  
 邑ノ壯丁來リテ寡ニ應スルモノ十餘人紀文大ニ喜ヒ悉ク其約ヲ踐ミ  
 且酒饌ヲ供ヘ痛飲スルコト累日意氣漸ク相投スルコト至リ約シテ兄弟ト  
 ナル時ニ海上風益暴ク逆浪天ヲ蹴ル一行十有九人皆凶服ヲ着ケ預メ



必死ヲ期ス翌日黎明紀文密柑數万箱ヲ大舶ニ載セ直ニ刀ヲ抜キ其髪ヲ截リ之ヲ龍王ニ獻レ默斯所了リテ船頭ニ立チ一刀其腕ヲ斷ツ船飛ヒ帆怒リ轉瞬ニレテ百里洪濤ヲ破リ東走スルヲ半日遠州洋ニ至ルニ及ヒ風益順ニ帆愈孕ミ凡海上三百里行程一晝夜ニシテ江戶ニ達ス此時海船港ニ入ルモノ獨リ此一隻ノミ都商欣迎レ以テ神助ノ致ス所トナス紀文乃チ似テ定メ密柑ヲ售ル利市萬倍一朝コレテ五萬金ヲ得タリ紀文始メヨリ利財ヲ屑トセス自ラ謂テ我半生コレテ五萬金ヲ博ス亦當ニ一生ニ之ヲ散スヘキノミ乃チ自ラ豪奢ヲ事トシ花街ノ間ニ遊遊シ金銀ヲ揮フテ土芥ノ如シ其花柳ノ門闥ヲ鎗シ長夜ノ飲ヲナスモノ前後四回遊フ毎ニ必ス千金ヲ抛ツ人呼テ紀文大尽ト云フ當時東西紅樓ノ歌妓頻リコ唄フテ曰ク沖の暗いのり白帆が見へるはれはれ紀の國密柑船ト此但謠今ハ殆ント人口ニ喧炙スルニ至レリ紀文カ

豪傑ヲ以テスルニアテサレハ何ソ斯ノ如キヲ得ン因テ惟フニ此南島ハ如キハ元來千里ノ絶海ニ孤立シ殊ニ黒瀬ノ激潮ヲ隔テ航途素ヨリ險多シト雖モ荷ヤ紀文其人ノ如キ豪傑ヲ以テスルモノランコハ此柑橘モ亦彼ノ紀州産ノ如キ價值ヲ尙ムハ日アルモ益ヲ知ルヘカラス果レテ然ルルハ予將ニ和レテ唄ハントスルモノアリ乃チ左ノ如ク唄呼號カ紀文其人タルヤ請フ之ヲ問ハシ

(沖の暗いのり白帆が見へるはれはれ無人島密柑船)

○第廿四 日本南洋ノ警戒

日本南洋ノ群島中我版圖ニ屬シテ殊ニ絶海ニ孤立スルモノハ小笠原群島ナリトス文祿ノ頃小笠原貞頼之ヲ檢出シテヨリ本邦ヨリ數次渡航セシモ其間英ニ米ニ魯ニ諸國ノ松艘來テ其國旗ヲ立テ其版圖タル

ナ表セシテ少ナカラス當時素ヨリ邦人ノ此ニ移住スルモノナシト雖  
 是既ニ我初檢ニ出ツルハ後ニ來ルモノ皆之ヲ知ルモ知ラサル爲レテ  
 然ラサルナシ之ヲ聞クニ西方諸國カ南洋ノ群島ヲ發見セシハ今ヲ距  
 ルヲ數十年ニシテ兵士軍艦ヲ派遣シ虎狼ノ慾ヲ逞フスルニ至リシハ  
 日尙淺キヲナレテ漸次蚕食シテ著大ノ諸島ハ概テ彼等カ所有ニ歸シ  
 タリ彼等カ國旗ハ到處貿易風ニ翻リ彼等カ軍艦ハ常ニ珊瑚礁畔ニ碇  
 泊シ其所有權ニ至リテハ稍曖昧ナルカ如キモノアリト雖モ今其所有  
 權ノ公然明白ナルモノシ奉レハ佛蘭西ハニユーカレドoya島ロヤル  
 ナー群島ニユー、ヘブリス群島タヒチー群島マーキリス群島ロー群島  
 カムビヤー群島チヌバイ群島英吉利ハ濠太利大陸ハウ候島新西蘭タ  
 スマロヤノルフオルク島フカロー群島カマーデック群島カザム島ヲ  
 一タランド島カムメル島マツケリー島フアンコンク島コルブン島ス

ターパツク島ライニテア島カロリン(マニロヤ群島内ノ一部ニシテ  
 牙牙ノカロリン群島ニシテ)  
 (ス)ロチニマ島(此ノト合ス)ポーナツナ群島ビトケヤン島ニユーギ  
 ムー群島ノ東部口耳曼ハニユーギニー群島ノ東北部(アイローム地方)  
 ビスマルク群島(此地ニニユーブリテ  
 ンゾサニ島シブアーシル島セイイント、イサベル島ヨルク侯群島ニユー、ハ  
 ノーヴァー島ニユー、アイヤランド島和蘭ハ東印度諸島ギロセ島ニ  
 ユー、ギニー群島ノ西部西班牙ハフキリヒン群島バラツン島ツトロチ  
 ン群島カロリン群島ビーリユー島北米合衆國ハサラマング島クリス  
 トマス島ホウランド島ベーカー島アーリー島ガレドナー島ベンリン  
 島等ヲ占領ス而シテ猶大ニ他ノ群島ニ注口シ愈々鯨香ノ慾ヲ逞フシ  
 拓地殖民ノ氣炎殆ント傳染病ノ流行ト一般今ヤ之レカ爲メ將サニ伴  
 香セラントスルモノハ總會士ナルヲ知ラス豈ニ夫レ戒メサルヘケンヤ

小笠原島ノ如キハ彼ノ野蠻驕味ナル土蕃カ棲居スル南洋群島トハ固ヨリ同日ノ論ニアラスシテ一島ノ施政確然トシテ整ヒ其人民モ亦幾分カ教化ニ服浴スルノ徒ナカニ敢テ彼強國等ノ爲メ殊更之レニ備フルヲ要セサルヘシ況ンヤ今日ハ平穩無事ノ日ニシテ一ノ乘スヘキ間隙ナキニ於テチヤ豈ニ何ソツ憂フルヲ須ントハ予輩カ一意期スル所ナリト雖也然レ此所謂拓地殖民政客ノ盛ナル今日ニ際シ一朝小故ニ托シテ爭隙ヲ開キ妖雲慘世殺氣天ヲ蔽フノ日アルモ亦期スヘカラス我政府頻リニ海防ヲ嚴コシ既ニ對州島ノ如キハ置クニ警備隊ヲ以テシ設クルニ砲臺ヲ築クモノ是レ平穩無事ノ日ニアリテハ無用ノ長物タルカ如シト雖也唯万一ノ不虞ニ供スルニ過キサルナリ聞ク所ニヨレハ琉球島ノ如キモ將キニ警備ノ隊アリト云フ海防ノ事ハ實ニコレ治ニ居テ亂ヲ忘レサル念頭ヨリ戒メザルヘカヲサルハ予輩カ致

辨、後、ス、シ、テ、明、カ、ナ、リ

小笠原島ノ海防警戒ヲ説キ大ニ此島ニ慷慨セシハ天明五年仙臺ノ人林子平カ三國通覽ヲ著シ海防ヲ説キ末ニ此島ノ事ヲ記シタルヲ始トス子平此事ニ坐シテ禁錮セラル又子平ト同時ニ高松ノ人平賀源内アリ天保十年渡邊華山高野長英等モ此島ノ事ヲ談シ併セテ海外ノ事ヲ言テ爾ヒテ同十三年東條琴登伊豆七島全圖ヲ著シ併セテ此島海防ノ事ヲ説キ爾セラル當時ミナ領國封建ノ時ナルヲ以テ此ニ到リシナリ今、此島ニアリテハ一ノ警戒アルナク加ルニ一年四回ノ航海ヲ除テ他ニ郵便電信ノ往復アルナク之ヲ小コレテ云ヘハ父子内地ト相距ツルモノ其吉凶共ニ直ニ聞ク能ハサルカ如キ不便ハ誠ニ少ナカラサルナリ然レモ其航度ヲ増スモ賊スヘキノ物産ナク又電信架設ノ如キハ一時世上議論アリテ所ニシテ或ハ此島ヲ經由シ布哇ニ達セシメ以テ

桑港ニ連テ太平洋電線ノ架テ起サントシ或ハ濠洲レドニ連スル南洋電線ヲ架セントスルノ論アリシモ元來大事業ニ屬スルヲ以テ其議モ終ニ雲霧ノ如ク消去リタリ若シ此島ニシテ今日ノ儘ニ過去クンニハ或ハ万一日ニ際シ他邦ノ戰艦來テ之ヲ封鎖シ或ハ亂暴ヲ逞フ島人ヲ戮シ貨財ヲ掠メ去ルモ次回ノ便船至ルノ日ニアラサレハ知ルヘカラス既ニ其時ニ至リテ其敵手ヲ尋ヌルモ不幸ニレテ生存スル人類ナキカ如キトアラシムハ終ニ罪ヲ何レニ訴フル由ナキニ至ルヘシ素ヨリ斯ノ如キトナキハ予輩ノ信シテ疑ハサル所ナリト雖モ時勢己ニ前限ノ如シ宜ク豫メ期シテ之ヲ戒メサルヘカラス當路者以テ如何トナスヤ嗚呼當路者以テ如何トナスヤ

○第廿五 扇浦金氏ノ寓舍

扇浦ハ二見港ノ東南隅ニアル一村落ニシテ往時官廳ノアリシ地ナリ今ハ唯寂莫タル風光地トナレリ前ニ野羊山ヲ望ミ港内ノ眺望極メテ佳絶ニレテ入港ノ帆影坐シテ見ルヘシ去明治十九年冬我政府ハ朝鮮ノ名士金玉均ヲ此所ニ移シ與フルニ一茅屋ヲ以テ之ニ尙ホ閑居セリ金氏ハ同國ノ名族ニシテ官貴ク位高キモ平生開國主義ヲトリ爲メニ守舊ノ徒ニ容レラレス先年大ニ企ツル所アリシモ事皆阻難シテ騒擾ヲ醸シ朝鮮國中身ヲ匿クノ地ナク難ク避ケテ本邦ニ渡來シ横濱ニアリシモ官懼ル所アリ遂ニ此ニ移スニ至レリト云フ便船渡航ノ度同志ノ徒來テ之ヲ見舞ヒ僊ニ變遷ヲ慰ム今回モ亦柳赫魯ナルモノ來テ之ヲ訪ヘリ

予等一日扇浦ニ遊ブ先ツ金氏ヲ訪ハント欲シ其柴門ヲ叩ク在ラズ蓋シ今朝大村ニ赴キタリト聞ケリ熟々寓所ヲ視ルニ其屋ハ蒲葵葉ヲ以

ア種ヒタル一小舎コレ芭蕉樹深ク茂リテ晝猶暗ク之ヲ訪フ子等何  
トナク感慨ノ情禁シ難ク偏ニ同氏ノ不在ヲ惜メリ後大村ニ歸レハ此  
日子等ノ寓所ヲ訪ハレタリト云フ聞ク同氏ノ容貌ハ全ク日本人ノ如ク  
官階モ亦ヨク通シ一言一語ノ間威風凛々トシテ當ルヘカラス慷慨ノ氣  
自ラ顯ハレ其人ニ接シテ益々欽慕ノ情ヲ厚カラレト而シテ渡島以  
來殆ント一周歲絶海ノ孤島訪フ人ナク居常徒然ニ苦ミ文墨ヲ弄ヒ聞  
基ヲ樂ミ儘ニ鬱鬱ヲ懣スルニ過キスト云フ

蓋世ノ英傑那翁カ亞非利加ノ孤島セントヘレナニ末路ヲ占メレハ  
既ニ往昔ノ一夢ナリ現ニ埃及ノ豪傑アラビヤ將軍ハ錫蘭島ニ流竄ノ  
身トナリ常ニ故國ノ凌辱ヲ憤レリ金氏ハ此南洋ノ孤島ニアリテ本國  
ノ安危ヲ憂フモノ是レ英雄ハ末路概シテ皆斯ノ如キモノナラシカ鳴  
呼其國ニアルヤ金殿玉堂ニ起臥シ威權赫々トレテ飛鳥モ翅ヲ收メ草

木モ亦ハノノ麻々然ルニ一朝志ヲ失ヒテヨリ身ハ異邦ノ遠島ニ漂泊  
シ妻孥皆歿セシレ知己或ハ亡シ或ハ去テ行ク處ヲ知ラス金氏カ國ヲ  
思ヒ家ヲ思フ心付果レテ如何ツヤ今ヤ此ニ到リ其配所ノ居宅ト風光  
ヲ見ルモ氏カ心事ノ轉々切ナルヲ想像シ殆ント子ヲシテ彫ヲ斷タシ  
ムルモノ蓋レ國ノ未タ開ケルヤ事彼ト相似タルモノ多ク試ニ我維新  
性時ノ下ヲ追想セシ金氏其人ノ如キモノ多ク其憂ヲ同フスルモノ少  
ナカラサリシナラン嗚呼世運變遷シ迷夢始メハ醒ム將サニ遠キムア  
ラヤルヘシ金氏カ此孤島ヲ出テ朝鮮廟堂ニ入ルノ日モ亦ナシト云フハ  
カラフ悽ムヘキハ英雄ノ不遇ニアリ金氏請フ自愛時機ノ到ルヲ待テ

○第廿六 火山群島

小笠原島ノ中母島ノ南百餘哩ヲ隔テ亞歷山島及硫黃島ノ二島アリ

又數十里ヲ距テ、一島アリ聖澳加斯島ト云フ三島共ニ鼎足ノ勢ヲナ  
 レ全レク火山性ニナル故ニ之ヲ總稱シテ火山群島ト云フ聖亞歷山島  
 ハ又北ノ島ノ名アリ母島ノ南微西ニ方リ群島中ノ最モ北方ニアルカ  
 故ナリ北緯二十五度十四分東經百四十一度十一分中點トス日本小  
 船ト雖モ母島ヨリ南ニ航ス一晝夜ナランニハ既ニ島影ヲ伺フヘキ予  
 等此島ノ近海ニ至レバ上陸セス蓋シ之ヲ見ルニ唯一ノ山島一レテ(山  
 高サ海面ヲ抜クト)恰モ碗ヲ倒ニスルカ如ク海岸多クハ絶壁ノ如ク上  
 陸甚ク困難ナルヘシ山ニハ點々樹木アリ殊ニ溪谷ノ觀ヲナス所アリ  
 テ樹木最モ多キヲ覺ユ其樹種ノ果シテ何タル艦中ノ遠望ニテハ今茲  
 ニ明盲スル能ハス若シ一ハ良材ニシテ加ルニ此島船舫水ハ川アラ  
 ヲハハ又決レテ樂ツヘキハ島嶼ニアラサルハ倍ス硫黃島ハ之ヨリ東  
 嶺南ニ方リ四十余哩ヲ距ツ實ニ北緯二十四度四十八分東經百四十一

度十三分中興トス三島ノ中央ニアルカ故ニ又之ヲ中ノ島ト稱ス英  
 國海面ニコレハ硫黃山ノ高サ海面ヲ抜ク六百四十メートルニシテ島地  
 ノ長サ五英里アリト云フ予等此ニ上陸シ觀レク島内ヲ探見セリ因ヨ  
 リ僅々五六時間ノ滯島ナルヲ以テ十分ノ調査ヲナス能ハサリシモ此  
 島ハ元來平島地ニシテ僅ニ其西南硫黃山ノ兀立スルアルノミ中央ハ  
 頗ル平坦ノ砂地ニシテ東方ニ至リテ少シク丘狀ヲナス土質ハ火山灰  
 ニナリテ輕鬆飛フカ如シ氣候ハ頗ル暖和ニシテ予カ上陸ノ時艦中ノ  
 寒暖計ハ八十五六度ニ上レリト云フ陸上ハ夏ニ高度ナリシテ覺ニ然  
 ルニ海岸ニハ砂濱アレバ硫黃山ノ近傍ハ磊々落落々ノ石礫多ク他ハ皆  
 彼ノ火山灰ニナレバ沙原ナルニヨリ草木ノ生長宜シカラス予カ多ク  
 見タルハ小笠原島ニテシサトベラノ新名アルモノコレテ該島ノ土人  
 ハ其樂ヲ生スルノ狀蒿苗ニ似タルニヨリ又チレヤツバノヤト云フ也

ノ是レナリ、今賀來飛霞氏カ、クサトベアノ説ヲ得タルヲ以テ記シテ其  
形状ヲ詳ニスヘレ

クサトベア 新名 草履科 (*Scaevola Talcotia*)

小笠原島ニ自生スル灌木類ノ常緑品ナリ該島ニテ其高サ五六尺  
枝葉互生シ葉ハ枝頂ニ撰簇シ柄ナク形倒卵圓稍長シ滑澤ニシテ  
厚シ秋月葉液ニ花梗ヲ抽キ小梗ヲ分テ白花ヲ着ク萼ハ五裂披針  
狀ニシテ葉亦五裂鋸縁ヲナシ一邊ニ並列シ形半邊蓮花ノ如ク其  
本ハ筒様ニシテ五雄蕊アリ其筒ノ裂口ヨリ一雌蕊勾リテ露出ス  
後實ヲ結ブ卵圓頂ニ勢ヲ殺セリ

此灌木ハ中央平坦ノ沙中ニ最モ多ク又東方丘山ニ多シ其他ハ林投樹  
ト一二ノ短木アリテ敢テ有用ノモノヲ見ス艸類ニ少ナクシテ島中木  
潤ナク唯岩石ノ凹處ニ雨水ヲ止ムルノニ此邊雨多キト見ヘ山中ノ砂

上ニモ雨流ノ趾アリ知ラス或ハ數日ノ滞在ヲナシ井ヲ鑿テ水ヲ呼ハ  
ハ清冽掬スキモノアルヤ要スルニ僅々時ハ滯島十分ハ探檢ヲ尽ス能ハ  
サシハ何ヨリモ遺憾ノ下トナリ動物モ少ナク大蝙蝠ハ小笠原島ノ  
産ト同シク歸化人某ナレス氏三匹ヲ捉ヘ來レリ島ニハ黒信天翁多ク往  
々人ニ迫ル又柴鷓鴣繡眼兒ノ種類アリテ殆シト人ノ掌上ニ來ル盤  
絶海ノ孤島人跡ナキノ地ナルニヨリ敢テ恐懼ノ念ナキニヨルナリ又  
蟹類寄居蟹及ヒ一二ノ死介殼ヲ見タリ海岸ニハ大材小竹椰子等ノ漂  
着多ク且鯨骨ノアルヲ目撃シタル人ノリ要スルニ予輩カ唯此一見ヲ  
以テセハ或ハ無川ノ廢島ト言ハンモ知ルヘカラスト陸ニ硫黃ノ  
産アリ海ニ鯨魚ノ産アリ豈ニ何ソ必シモ廢島トスルヲ得ン宜レシ  
十分ノ探檢ヲ尽スヘキナリ本島ヨリ又南ニ方リ數十哩ヲ隔テ殆シト  
夏至線下ニ入ラントスルニ及ンテ一島アリ濠洲加斯島是レナリ北緯二

十四度十四分東經百四十一度二十分中點トモリ三島中殊ニ其南方ニ位スルカ故ニ一名南ノ島ト稱ス山ノ高サ海面ヲ抜ク「三百六十」ヒトナリト云フ予輩ガ硫黃島ヲ發スルニ艦中衆議此島ヲ探ラントセシキニ磯輪終ニ破レテ亞歷山島ニ向ヒシヲ以テ之ヲ探シ能ハカリシハ寔ニ残念ナリシ次第ナリ此三島ハ實ニ我南洋馬瀨蘭瓦士倫加呂倫等ニ入ルハ北門ニシテ將來群島ノ交通ノ開クニ際シテハ極メテ必要ノ停車場ト云フヘレ聞ク英國水路志ニハ此三島ヲ以テ實ニ望ミナキ不毛ノ瘠地トナセリト嗚呼惜ニ然リ然レ其地我小笠原島ヲ距ル遠カラス我ヨリ之ヲ見ルニ決シテ彼レト同日ノ論ニアラサルナリ火山群島幸ニシテ所領主ナシ今ニシテ率先此ニ先鞭ヲ我國旗ヲ翻シ我版圖ナルヲ表シ進テ尙ホ得隴望蜀ノ希望ヲ達スヘキハ是レ實ニ目今ノ急務ナリト云フモ敢テ過言ニアラサルヲ信スルナリ我同胞ノ日本男兒

ルモノ登ニ夫レ之ヲ忽ニムヘクンヤ務メヲヤ男兒勵メヤ男兒

○第廿七 南洋ノ大利益

南洋ノ大利益之ヲ陸上ニ求メンカ侵瀾タル群島中其物ナキヲ如奈セン小笠原島ハ倍置キ遠南百餘哩ノ洋中聖亞歷山島硫黃島諸島ヲ探見スルニ陸上更ラニ求ムヘキノ一物産ナキカ如シ亞歷山島ハ廣袤闊大ナラスレテ其島中一草一木ノ世用ニ利達スヘキモノアルヲ見ス硫黃島ノ硫黃ハ其産出素ヨリ計ルヘカラスト雖も要スルニ掌大ノ島嶼縱令幾百千顆ノ産額アリトスルモ未ダ以テ我南洋ノ經濟ヲ維持スヘキ大利益ナリト唱道スル能ハサルヘシ而今ヨリ新タニ移スヘシ起スヘキノ産物ニ至リテハ其物産ニ二三ノラサルヘント雖も然レモ之ヲシテ終ニ群島中ノ大利益物タラシムルカ如キハ惟フニ幾多ノ



星霜ヲ經ルニアラサレハ決シテ能ハサル所ナリ況ンヤ是等群島ノ地  
タル元來火性的ノ構造ニ成ルカ故ニ其地質タルヤ燒石ノ灰屑ニ過キ  
スシテ潤養ノ資ニ乏シキヲ以テ萬物産ノ如キハ素ヨリ容易ニ出來ク  
ヘキ處ニアラサルヲ知ルナリ然クハ何ヲ以テ群島ノ經濟ヲ利シ我南  
洋ノ大利益ヲラレムヘキヤ予ニ於テハ車之ヲ陸上ニ求ムルヲ好マサ  
ルナリ茫々タル煙波渺々タル蒼海ノ中定ニ南洋ノ經濟ニ至大ノ關係  
ヲ有スルモノアリ日本南洋ノ大利益トハ蓋シ此物ヲ云フニ過キサル  
ナリ

本年十一月十日明治丸、火山群島中ノ一島硫黃島ノ沖ニ繫ル此日一  
天洗フカ如ク赫々タル紅輪甲板ヲ射レテ海風涼々トシテ波面砥ノ如  
シ予等船中ヨリ四方ノ風光ヲ賞シ談笑數時偶々人アリ來報シテ曰ク  
諸君請フ來テ那ノ海中ヲ觀ルヘト予等シテ船邊ノ波浪中ヲ窺ハレ

▲驚クヘシ大鯨魚縱橫ニ奔驅シ或ハ口ヲ開テ他ヲ襲フカ如ク或ハ鱗  
ヲ抽テ翔去ルアリ其數無慮幾百尾ナルヲ知ラス於是水夫ヲ麾キ釣シ  
テ之ヲ捕ヘンコトヲ以テ水夫賭シテ大ナル鈎櫛ノモノヲ携來リ肉片ヲ  
附シ海中ニ投ス魚ノ襲來ルモノ數十尾其勢ノ猛烈恐ルヘク又驚クニ  
堪ヘタリ須臾ニシテ獲ルコト十尾許一尾大ナルモノ丈ニ餘ル共種類ハ  
概テヒシガシラト稱スルモノナルカ如シ翌十一日船ハ西歐北ニ走ル  
テ四拾餘海哩亞歷山島邊ヲ過クルヤ又大鯨魚ノ游泳ヲ見ル始メテ  
知ル我南洋ハ鯨魚ノ一大群集場ニシテ鯨魚漁獵ノ中眞ハ實ニ此煙波  
茫茫ハ中ニアハチ嗚呼日本幾百萬ノ漁業男子タルモノ予等カ此談話  
ヲ以テ官ニ一場ハ空談ト視備スコト莫レヨ

本年四月某日ノ時事新報ヲ閱スルニ香港在留ノ英人某氏南洋鯨魚會  
社ヲ起シ日本ノ南方洋中ニ鯨魚多キヲ以テ數艘ノ船舶ヲ出シ之ヲ漁

其鱈ヲ取リ暫シノ清國ニ出スノ計甚アル云々ノ記事アリ當時予輩  
 ハ之ヲ讀テ非常ノ感覺ヲ起シ同時ニ又非常ノ屹然ヲナレタリ嗚呼日  
 本ノ男子弱シト雖モ斯ル大利益ヲアテテ外人ノ襲斷ニ委テシテ  
 如何ニモ残念千萬ノ至リナラスヤ其所謂日本南方ノ洋中トハ果シテ  
 何レノ處ヲカ云フ是レ當時ニアリテ伺知ルニ由ナカリシモ苟モ我南  
 方ノ洋中ナラシムルハ我漁人ノ掌ニ在リ何ソ外人ヲ待タノト心私カニ  
 慨嘆大息シ其報道ノ果シテ事實ナルヤ否ノ詮索ニ從事シ以テ今日ニ  
 至リシニ何ソ圖ラシテ還回ノ渡航ニヨリ英人某氏ハ所謂日本南方ノ洋  
 中トハ乃チ我小笠原島遠南熱帯ニ接スル群島海ナルコトヲ知ラントハ  
 微雨ノ未タ霏々シフケルニ既ニ網罟ノ策ニ注意スルヲ得タルハ予輩  
 ノ至幸否ナ我日本三千五百万同胞ノ幸福ト云フモ敢テ過言ニアラサ  
 ルヲ知ルトリ

日本ノ比隣大國アリ人口ノ有スル四億万沿海少フレテ魚鹽ノ利ニ乏  
 シ之ヲ支那ト云フ支那人ノ海産ヲ嗜好スルヤ我邦人ト其趣ナ異ニシ  
 或ハ皮骨筋脈ノ類ヲ賞シ或ハ鴈片肉端ヲ好ミ殆ント我ノ樂ヲ顯ミサ  
 ルモノ多キニ居レリ蓋シ彼邦人ノ調味ノ術ニ巧ミナル恐クハ世界中  
 獨歩ナリト稱スルモ過言ニシテ故ニ是等廢棄的ノ物ト雖モ之ヲ食  
 膳ニ供スルニ至リテハ其美味ナル殆ント其原料ノ何タルヲ知ラサル  
 カ如キコアリ然ルニ支那邦境ノ廣大ナル人口ノ夥多ナル治テク是等  
 ノ美味ヲ賞スルニ由ナク儼ニ貴顯紳士ノ口腹ニ入ルヘキモ既ニ中等  
 以下ノ士民ニ至リテハ斯ル美味ノ海産ヲ得ルヲ容易ナラサルナリ既  
 ニ今日我水産物ノ彼ニ入ルモノ年々三百五六十萬圓ノ額ニ上ルモノ  
 蓋シミナ是カ爲ナラサルハナシ支那人カ嗜好スル海産中殊ニ貴重ニ  
 シテ需用多キモノアリ之ヲ魚翅ト云フ乃チ鯊魚鱈ヲ乾製セシモノナ

數十年前ヨリ我産ノ彼ニ入ルハ多ク現ニ一歳ハ輸出二十万斤以上ニ達シ其價殆ント四十万圓ノ上トス今試ニ明治元年ヨリ全十年ニ至ル迄ノ輸出連年ノ比較ヲ掲ケンニ概テ左ノ如シ

魚翅輸出連年比較

元 年	數量	元 價	百斤價
元年	四五二六四	一一、五八二	二五、五八九
二年	七九九五三	一七、二〇八	二一、五二三
三年	七六、八八二	二四、五二二	三二、八八三
四年	五五、〇三八	一七、七〇八	三二、一七五
五年	六二、六六四	二〇、二七一	三二、三五二
六年	一〇、三〇一	三、六九八	二九、四三三
七年	一〇、三〇二	二九、七六一	二八、八八五
八年	一七、三〇五	二七、三四二	二八、〇九九
九年	二二、六七三	三九、九四〇	三一、二八三
十年	一一、七七一	三四、二〇九	二九、〇六三
十一年	一〇、八四九	三三、一五八	三〇、五八四

十二年	一五、九五五	五二、二六八	三二、一三六
十三年	一五、一三〇	五四、九四六	三六、三一四
十四年	一七、〇八八	五八、六九一	三三、三五九
十五年	一六、七〇三	五三、七〇五	三二、一五二
十六年	一六、六九六	五〇、〇六三	二九、九八五
十七年	二四、二〇二	七〇、〇五一	二八、九四三
十八年	二〇、八五五	六三、二八三	三〇、三七三
十九年	二二、三六九	六九、八六六	二九、八九七
平均	一三、〇四三	三九、九〇八	三〇、五九七

此物、ル、從來、本邦人、カ、棄テ、離、ミ、リ、ル、ヤ、而、カ、モ、尙、斯、ノ、如、キ、價、アリ、テ、年々、其、輸出、ノ、増加、ヲ、見、ル、茲、ニ、尙、シ、忍、ビ、ス、ク、シ、テ、殊、ニ、又、堆、積、ヲ、與、シ、明、骨、ヲ、製、ス、ル、ニ、至、リ、テ、一、尾、ノ、鰹、魚、果、シ、テ、幾、何、ノ、價、ヲ、生、ス、ル、ヤ、知、ル、ヘ、カ、ッ、ス、廢、物、ノ、利用、モ、亦、定、ニ、莫、大、ニ、シ、テ、鰹、魚、漁、業、ノ、急、要、ナル、之、ヲ、以、テ、推、知、ス、ヘ、キ、ナ、リ

今回ノ出來事ニヨリ火山群島近海ハ果シテ鰹魚漁獵ノ中點ト認定シナ

我邦人ハ一日モ早ク此洋中ニ入り先獲其利ヲ掣セザルヘカクサル  
 ハ勿論ナリ且惟フニ今回ノ如ク僅々數時間ノ碇泊ニシテ猶水十數尾  
 ノ捕獲アリトヒシニハ二六時中銳利ノ漁具ヲ使用シ熟練ナル漁夫ヲ  
 レテ之ヲ釣クシメナハ果シテ幾十尾ヲ獲ル知ルヘカラス假リニ一  
 日五十尾ヲ捕獲レ一尾ハ假金一圓(附アルニテ)ナリトナルモ五十四  
 ハ利益アリ一ヶ月ノ中風波出漁シ難キ日ヲ十日ト見定メ殘ル廿日ヲ  
 以テ快晴ノ日トナスルハ一月ノ收益千圓ナリ之ヲ半減シテ五百圓ト  
 スルモ亦實ニ莫大ノ收利ナクスマヤ予輩カ之ヲ南洋ノ大利益トナリト  
 云フモ決レテ過言ニアラサルヲ信スルナリ今新クハ此南洋ニ向テ此  
 漁業ヲ起サンニハ如何ナル法ニカ據ルヘキヤ是一個ノ問題ニレテ予  
 輩オ曾テ小笠原島ヲ去ルノ日同島ノ有志相結ヒ資本ヲ募リ近クニ之  
 レニ着手スルノ計畫アリタリ其方法ヲ聞クニ是等ハ普通ノ押送船ヲ

以テ該島ニ渡航シ天氣ヲ見テ碇泊シ若シ危險ヲ感スルハ直ニ母島  
 ニ向テ歸航スルノ心算ナルカ如ク然レモ予輩カ考ヲ以テモハ此計畫  
 ハ甚ク危險ニシテ資成スル能ハサルナク何トナレハ火山群島中一ノ  
 碇泊スヘキ港灣ナリ且風浪常ニ高クシテ縱令平常ノ天氣ナリト雖モ  
 通日本形ノ漁船ヲ以テハ其進退容易ナラサルベシ殊ニ此近海大風ノ  
 恐アルヲ以テ若シ万一ノ天象ニ際シ急ニ船ヲ回シ母島ニ向ハントスル  
 モ百余哩ノ波濤中一朝一夕ノ勞ニアラサルヲ知ルナリ古人曰ク虎穴  
 ニ入ラスニハ虎兒ヲ得スト冒險ノ事業難スヘキニアラスト雖モ荷モ  
 事ヲ成スモノ好テ險ヲ犯スヘキニアラズ宜シク完全ノ方法ヲ據テ以  
 テ其目的ヲ達スヘキナリ何チカ完全ノ方法ト云フ曰ク予輩チシテ此  
 漁業ヲ起サシメンニハ小形帆船ヲ用意シ之ヲ本船ト定メ別ニ漁舟  
 數艘ヲ用ヒ捕ル所ノ鯊魚ハ本船ニテ之ヲ屠リ之ヲ製シ充クハ乃チ小